
Babylon ~ 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って ~

和尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B a b y l o n 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って

【Nコード】

N 5 8 8 9 X

【作者名】

和尚

【あらすじ】

世界初の全感覚多人数参加型RPG【B a b y l o n】。

その開発チームの一員でもあり、そして生粋のゲーマーでもある男、影山透。そんな彼が持ち前のリアルラックを発揮し、オープンβ前の先行キャンペーンに当選しログインしたところから物語は始まる。

VRMMO作品。ログアウト不能系デスゲームものです。主人公が、悩みつつ、そして毒づきながら、自分の関わった世界を攻略目指して頑張ります。

二章までは終了。三章投稿中です。機会がありましたら暇つぶしに御一読等、よろしくお願いします。お気に入り登録してくださる方、ポイントを頂ける方、本当に感謝です。完結まで頑張って進めていきます。

プロローグ（前書き）

和尚と申します。

色々と触発されて書き始めてみます。

拙い文章ですが、よろしく願います。

ご指摘、感想等いただけましたら嬉しいです。

プロローグ

ニムロデは、もし神が再び地を浸水させることを望むなら、神に復讐してやると言って威嚇した。

水が達しないような高い塔を建てて、彼らの父祖たちが滅ぼされたことに対する復讐をするというのである。

人々は、神に服するのは奴隷になることだと考えて、ニムロデのこの勧告に熱心に従った。

それで、彼らは塔の建設に着手した。

……そして、塔は予想よりもはるかに早く建った。

ヨセフス 「ユダヤ古代誌」より

ノアの洪水の後、人間はみな、同じ言葉を話していた。

人間は石の代わりにレンガをつくり、漆喰の代わりにアスファルトを手に入れた。こうした技術の進歩は人間を傲慢にしていた。

天まで届く塔のある町を建てて、有名になろうとしたのである。

神は、人間の傲慢な企てを知り、心配し、怒った。そして人間の言葉を混乱バラルさせた。

今日、世界中に多様な言葉が存在するのは、バベル（混乱）の塔を建てようとした人間の傲慢を、神が裁いた結果なのである。

旧約聖書 創世記11より

——いよいよ正式にオープンβとして発表される全感覚多人数参加型RPGについて

上沢氏かみざわ（以下上）：それでは、対談形式で進めさせていただきます。
今回は開発ディレクターの坂上さんさかがみにお越しいただきました。

坂上氏さかがみ（以下坂）：どうもお久しぶりです、本日はよろしくお
願います。

上：では、まずは今回の主旨に関しましてご説明させていただきます。
今回協賛で発表されました、全感覚多人数参加型RPG【Baby
lon】について、僭越ながら全国の方々を代表させていただき、
私にご質問の方させて頂きます。それにしても、すごい反響のよう
ですね！

坂：はい、おかげさまで（笑）。それだけユーザーの方々が待ち
望んでいたということでしょう、PCの前に座ってキャラクターを
操作するというこれまでのものではなく、実際にゲーム内に入って
プレイするというゲームにですね。

上：ゲームをやっている人間のロマンですからね。私も様々なゲ
ームをこれまでやらせていただいて、実際2Dの時代から、3Dに
なり、画面から飛び出すような臨場感あふれるゲームにはまった世
代ではあるんですが。今回ののはレベルがやはり違いますから、興奮
しています。

……ところで、今回クローズドβテストが完了し、来月から正式リリース前のキャンペーン企画として、先行で抽選で当たった方々の為に運用が始まるんですね？ 今後のスケジュールを伺ってもよろしいでしょうか？

坂：ええ、これはまだログインする為の施設が、クローズドβで使用したもの以外は全国で完成し切れていないためなんです。まずは先行キャンペーンとして行わせていただきます。まだ、すべての皆様に体感していただくことはできないのですが、来年の春にはオープンβ版として、満を持して全国の皆様にお楽しみいただけると思います。

上：私も応募したんですが、当選することができませんでした。早く春がきて欲しいですね。

坂：それは残念でしたね……もっとリアルラック値を上げないと（笑）

上：そこからですか（笑）。——では、本題に入らせて頂きます。『B a b y l o n』のシステムの特徴といえば、どういったものになるのでしょうか？

坂：端的に言つと、『言葉』が重要になるRPGですね。

上：言葉、ですか……？

坂：ええ、名前からも推測されるとおり、旧約聖書に出てくる『バベルの塔』をモチーフにしています。上沢さんはご存知ですか？

上：名前は知っていますが、具体的には……不勉強で申し訳ない。

坂：いえいえ、私なんか今回初めて知った口ですから。開発メンバーにそういう雑学知識に溢れている男がいましたね……余談なんです、そいつは一般応募で何と引き当てたようで……今回のキヤンペーンに参加するみたいです。いや、お前関係者だろ、枠取るなよ、仕事しろよ、と言いたいところですが。要項に関係者以外とは書いてない上に、そいつは確認のためのテストユーザーからは外れていましてね、土下座して頼み込むわけですよ（笑）。

上：あはは、でも、個人的には気持ちわかる気がします。

坂：確かにそうなんですけどね。話がそれましたね……簡単に言うと、昔、人間にはひとつの言葉しか無かったそうなんですよ。一つにまとまっていた。

上：ほう。

坂：その時代、神に隷属することを嫌った人間たちが、神に届くような天高くそびえる塔を建設します。そして、その人間の傲慢さに怒った神が、そんな人間の言葉を『混乱』^{バベル}させました。その結果お互いに意思疎通の測れなくなつた人間たちは、それまでのように統一することができなくなりました。現在、多種多様な言語が存在するのは、人間の傲慢さを神がさばいた結果なのだから。

上：成程、それで、具体的には今回取り入れられたシステムというのはどのようなものなのでしょう？

坂：世界の中心の街、バベルには、『バベルの塔』が存在します。その100層に辿りつけければ、エンディングとなります。しかしその際ですね、各階層にはそれぞれ封印された言語で読まなければな

らない『言霊』が存在します。また、封印された『言霊』を開放するまでは話すことのできないNPCも存在します。ノンプレイヤーキャラクター『言霊』は街の外のフィールドに存在するし、ダンジョンの奥に存在する。それらを開放しないと、次の階層には登れません。また、開放することにより、更に世界が広がっていきます。

上：うんうん、それで言葉が重要になるということですか。言葉のわからないNPCもいるというのは面白いですね。開放されるまで何のためのNPCなのかわからないというのも。

坂：そうですね、後は、今回のシステムでは既存のコマンド型やメニュー選択型とは異なり、音声認識システムが採用されています。これは、PCの前に座って操作する鳥瞰型の視点とは異なるからですね

上：確かに、目の前にモンスターがいるのにメニューを開いてる場合じゃないですからね（笑）

坂：その通りです（笑）。ですので、呪文の詠唱であったり、技名の発声が必要になります。そして、特に呪文の詠唱では、特定の言葉をつなぎあわせて自分だけの呪文を生み出すことができます。

上：おお、それは凄い！

坂：フィールドに散らばる『言霊』を開放することに、より強力な技であり呪文が使えるようになります。自由度が高く、各ユーザーが主人公となれるように様々な配慮がなされた設計になっていますね。

それに、今言ったのはあくまで一部で、戦闘だけではなく、鍛冶屋や料理人のような生産職も充実していますので、ただ生活すると

いうことも楽しめる作りとなっています。ですから、今回が初めてという方にも敷居は低くなっていますよ。

上：ますます早くやりたくなって来ました。では、内容については後は実際にプレイするまでのお楽しみとしまして（笑） 話は変わりますが、今回は安全面についても指摘がなされていましたがそのへんに関してもコメントを頂けますでしょうか？

坂：やはり世界初、ということとでそういうご指摘があるのは当たり前ですね。ただ、今回用いる技術は、元々は医療技術として開発されたものであり、更には過酷な環境に身を置く宇宙飛行士さんたちのための技術でもあるんですね。

上：つまり、十分に検証されており危険性はないと。

坂：もちろんです。それでも、やはり人のすることですから何かが起こる可能性はゼロには成り得ません。……そこで、『アル』の出番です。

上：『アル』というのは噂されているA・Iの呼び名うたなまですよ？

坂：そうですね、彼……普段話していると、もう彼という人格に思ってしまうほど優秀なのですが、『アル』はほぼ世界一といっても良い演算能力と思考能力をもつAIです。元々は軍事用に開発されたということなのですが、とある経緯でこのプロジェクトに参加してもらったことになりました。

上：今では様々な分野でAIたちの活躍が報じられていますからね。私もスケジュールなどで弊社のAIにはお世話になっています。でも、彼、と呼ぶほどに人間的なのは珍しいですね。

坂：ええ、私も最初のうちは驚きました。『アル』はネットワーク環境から様々な言葉や感情を仕入れては自分のものにするんですよ、冗談も通じたりしますしね。

——これは余談ですが、あるスレッドから「k t k r」^{キタコレ}だとか「orz（土下座にみえることから、失敗したorz などと使われる）」だとかを学んで会議中に使ったりした時には呆れを通り越して笑ってしまいましたよ。

上：それは……凄いですね（笑）

坂：そんなお茶目なところもあるのですが、彼は本当に優秀です。ですので、彼と担当に人間数人で、トレースしているので、何か健康的に問題があればすぐに発覚します。また、モニタリングもバックアップも万全です。

上：成程、つまり、今回の夢のような企画は、かつては夢であった人とAIの合作でもあるわけですね。

坂：そうですね、面白いことまとめますね（笑）

上：いえいえ（苦笑）。でも、そろそろお時間ですので、ここまでにしましょう。興味深い話など、ありがとうございます。

坂：こちらこそ、ありがとうございました。では、私どもも鋭意努力させていただきますので、本リリースまでしばしお待ちください。

〓オープンβ先行キャンペーン開始一月前。 MMO通信談話より〓

プロローグ（後書き）

バベルの塔は、言葉を探す系で設定探してググッていたら出てきたので採用してみました。

バベルとは、ヘブライ語で、バレル（混乱）という言葉から来ているそうです。少しロマンを感じるわけです。

そして妄想、この世界が生まれました。

出来るだけ頑張って書いていきますのでよろしくお願いします。

少し設定でふらふらしましたが、

オープンβ↓クローズβ↓オープンβ前先行キャンペーン（そんなもんあるのか？という疑問は勘弁してください）で落ち着かせようと思います。

一話

(……こんなよくあるような展開が現実にかかることなんて在るのか?)

俺は、突然のアナウンスに騒然とし始める広場をよそに、ぼんやりとそんな事を考えていた。

誰よりも先に、今起こっていることが現実だと、運営側のイベントなどではないと把握できる立場にいながら、心がその事実を受け入れてくれない。

つまりは、絶賛現実逃避中である。

目の前の店のガラスに、少し長い黒髪を後ろに縛り、動きやすそうな黒服に身を包んだ瘦身の目立たない男が写っている。少々目つきが悪いがよく見れば整った顔立ちだ。

腰の両側には短剣が装着されており、ここが現実であれば警察が飛んでくるであろう。

視線を横に向けると、目に入ってくるのは中世ヨーロッパを思わせるレンガ造りの街並み。

乱雑そうに見えながらも、きちんと設計された道と、それに沿って存在する店。

そして、ここからでは建物に遮られており見えないが、この街の四方は壁に囲まれ、どの場所からでも、見上げれば、中心地には天をつくかと思われるような塔がそびえ立っている。

———ようにデザインされたはずである。

【バベルの塔】

その、先端が途中で霞むほど高い塔は、そう呼ばれている。
旧約聖書の『創世記』中に登場する巨大な塔から取った名前である。

この名前の付け方にも、一悶着あったのを思い出し、俺は現実逃避の一貫としてこれまでの流れを思い返していく。

……決して死ぬ前の走馬灯ではない、きっと。

クーラーの聞いた会議室の中では、意見が割れ少し白熱し始めていた。

設定のメインとなるはずの、塔の命名について揉めているからだ。
オリジナリティを出すために、引用ではなく自分たちで名前を考えるべきだという意見と、わかりやすさの面からも、神に挑むというスタンスからも、この、旧約聖書からの引用が一番しっくり来る、という意見。

俺は、後者だった。

何故かって？

『バベルの塔』や『バビロン』。

オリジナルで考えるような言葉よりも、歴史や過去を匂わせる聖書や古典、そしてこれは俺が日本人であるからではあるうが、北欧神話などに出てくる言葉の響きにロマンを感じるからだ。

別名としては、厨二病とも言つ。

え？ わかつてもらえない……？

異論は受け付けるが、元々うちの開発チームにはそういう響きを好む人間は少なくはない。

だって元々ゲームの世界が好きで、この仕事に就いてるわけだし。そりゃね、ある部分は子供のままだったりもしますよ。

ちなみに反対してる奴らも、それにロマンを感じるだけでは飽きたらず、更に一それらしい名前を考えただけなのであしからず。

その後、世界で最も有名な平和的解決法、多数決でも一向にまとまる気配もなく（何でいつも開発メンバーは偶数なんだ）、次善の策であるくじびきで決めた結果――。

正式に次世代型オンラインゲーム、全感覚型RPG【^ロBabylon^ン】がプレリリースされた。

医療用・軍用に制限されていた、認知学・脳神経学の観点から五感をフルにトレースできる技術を用いた、文字通り世界を作り上げその中に入り込める夢のゲームである。

ゲームの創作、デザインの秀逸さでは世界一を自負する日本の企業が協力し、世界初となるこのオンラインゲームをリリースすると発表したときは、すべての紙面を飾り、大騒ぎになったものだ。

キタ

（。。。）

ッ！！

という単語がさまざまなMMOSレで飛び交っていたのは目に新しいところである。

15000人という募集枠に、200万人を超える申し込みが殺到したのだからその熱狂が伺える。^{うかが}

もちろん、【^{バビロン}Babylon】開発メンバーの一人にして生粋のゲーマー、裏技など使わず、一般抽選で堂々と100分の1以下の可能性を引き当てたこの俺、^{かげやまとある}影山透こと、【トール】も、たまりに溜まっていた有給をゴネにゴネて取り、当日の、先行キャンペーン当選者ログイン会場に足を運んだ。

これをリリースするために、どれだけの朝を会社で迎えたことか……

クローズドβの時なんて、色々心がすり切れるかと思った、楽しそうにするテストプレイヤー……そして上がってくるバグの報告。あれは切ない、切なすぎた。

知ってるかい？ そんな風に二晩寝ずにモニターを見続けて迎えた朝日は……文字通り痛いんだ……

……いや、これ以上深く思い出すのはやめておこう。

現実逃避の中ですら逃避してしまったら、戻ってこれなくなる気がする。

そして、開発が一段落して久々に家に帰ってみると届いていた当選通知。

それを見た俺を止められるものなど、更に長時間働いている先輩以外にはこの世の中に存在しない。

——鉄人すぎるんだよ、あの人達……

もちろん、優しい先輩方は許してくれたさ。

たとえば、通知を持つて……じーっと見つめ続ける俺に耐えられなかっただけであろつと、言質^{げんち}は取つてある。うむ。

……休暇のためにそれからの仕事量が限界を超えたことは、言うまでもない。

今回世界初の全感覚型オンラインゲームである【B a b y l o n】には、幾つかそれまでのM M O R P Gとは異なる点がある。

一つは、もちろん一番の変更点。

ゲームの世界に意識ごと入り込めるといふ点である。

もつとも、頭にかぶるだけでその世界に入り、簡単に入りができる仮想の世界とは異なり、ある特殊な液体の入つたカプセルに入り、【B a b y l o n】の世界へとログインすることになる。

この間、栄養補給・トイレなどの生理現象もこのカプセル内で行われる。

心境的にはかなりの抵抗感はあるが、実際ログインしている間の感覚は無いし、何よりこの技術は元々宇宙活動における、宇宙飛行士の心神喪失防止のための技術ということで、その循環技術は世界最高峰。

むしろ普通に行動しているよりも健康的で清潔に保たれるという優れものなのである。

もう一つは、感覚を現実と統一化させるために、極端な容姿・身体的特徴の変更ができない。

普段何気なく動かしている手足や顔の表情。

それらは俺たち一人一人に特有の感覚として身に付いているものだ。

例えば、俺は身長が168cm 58kgだが、それをいきなり190cm100kgの巨漢に変更すると、脳の記憶との差に違和感が生じ、重大な感覚障害が起こる。

何気なく額に手をやったり、咄嗟に何かを避けたり、という無意識な行動は自分の体であるからこそ行えることなのだそうだ。

言われていればそうかとも思うが、それが『無意識』というもののだろう。

もちろん許容範囲内での改変は可能（髪の色や眼の色など）だが、太っている人間が激やせした状態にしたり、細い人間がマツチヨになってロールプレイすることは、残念ながらできないのだ。もつとも、ゲームの中ではパラメーターに左右されるため、見かけがマツチヨでも、STR（筋力）値が低ければ意味はないのだが。

また、顔の造形も急激な変更は同様にできない。その特徴のまま比較的格好良く設定することはできるが、あくまで基本は元の顔としようになる。

PCで加工するような感じ、といえわかりやすいだろうか？

……そう、男の子が借りるDVDのパッケージとかで騙されるアレだ。一応面影は残るだろう？ それを見破れるまでになったところのあなた。……君とはいい友人になれそうだ。

同様の理由から、ネカマ（ネット上性別を別にして演じる人）もないことになる。

これは結構非難が出たようだが（そんなに重要なのだろうか？）、それでも技術的にできないといわれればしょうがないといえば無い。もしも、男としての大事なものが存在しない感覚に脳が慣れてし

まい、その機能をなくすのが御望みならば個人的には止めはしないが。

とにかく、そういった条件で、俺は、 170cm 58kg

男 盗賊【^{シーフ}トール】として【^{バビロン}Babylon】にログインした。

……ん？ これだけ長々と説明しておいてサバを読むなって？
誤差の範囲だ。背伸びしなかった俺の気持ちは、わかってもらえ
ると信じている。

一話（後書き）

た 1
つ 6
た 8
た 2 c m
2 c m、さ
れど 1
2 c m。 7
0 c m。
2 c m。

二話

「それでは、心ゆくまでもう一つの世界――【B a b y l o n】^{バビロン}――をお楽しみください」

柔らかく、心を落ち着かせやすい声、という女性の機械音声を聞
きながら、この瞬間、俺は『プログラマー影山透』^{かげやまとおる}から『盗賊ト
ール』^{シーフ}になった。

初めに感じたのは、空気。

何と説明すればいいのだろう、街中の匂いでありながらどこか懐
かしいとでもいうか。

土の匂い。

排気ガスも下水もない空気は、これほどまでに美味しいものだっ
たのかと感ずる。

たえそれが【B a b y l o n】をコントロールしている人工知
能『アル』によって認識させられているものだったとしても、この
感覚は、俺がそう感じているというのは事実だ。

自分が関わり合って存在しているものを体感できているという事
に、俺は感動すら味わっていた。

少しの酩酊感と共に、視界が広がっていくのを感じる。

目を瞑^{つむ}ってまぶたの上から強く押した後のような焦点の合わない
感じから、少しずつ、眼前の現実を脳が認識し始める。

レンガ造りの街並み、そしてコンクリートではない、石畳いしだたみの道路。
ノンプレイヤー・キャラクター
NPCとはわからないほどリアルな、人々が店頭にいる道具屋、
武器屋。そして宿屋。

資料や、実際の映像では部分的に見ていたし、テストでも入った
のでログイン自体は初めてというわけではないのだが、全てのデザ
インが完成されてからは初である。

開発メンバーのくせに何故かって？

それは、俺がひたすらダンジョン形成のアルゴリズムとモンス
ターの設定を行っていたから他のとこまで見れてはいないのだ。い
わゆる分業というやつだな。

しかし、そのお陰で現時点でデフォルトで全雑魚モンスターの性
質を把握しているのは俺ぐらいのものだろう。

肝心のボスモンスターは俺の担当じゃないから知らないけど……
それもこの世界を満喫するにはちょうどいい。

「ウインドウ・オープン」

俺がそう呟くと、眼前にウインドウが開く。

音声認識システムは正常に作用しているようだ。

「どれどれ」

俺は早速自分の能力値をチェックする。

この辺は通常のRPGと同じく、自分のアバターの能力パラメー
ターが存在する。

【トール】

盗賊^{シーフ} L V・1

HP（生命力）：158

MP（精神力）：22

STR（腕力）：28

DEX（器用）：45

AGI（俊敏）：48

CON（体力）：15

INT（知力）：25

WIS（魔力）：19

CHA（魅力）：5

LUC（幸運）：55

――1 / 2――

一ページ目は職種と各種能力値が表示されている。

基本的な職種は『戦闘系』『生産系』に分けられる。

『戦闘系』では、『戦士・格闘家・狩人・盗賊・魔術師・僧侶・吟遊詩人・呪術師』の8種類。

『生産系』では、『鍛冶師・料理人・商人・錬金術士』の4種類が存在する

これらは、レベルをあげることにより上級職の道がひらけ、あるNPCの『言霊』が開放されれば他の職種に転職することも出来る。

また、その下に表示されているのは能力値だ。

最大値は、HP・MPが『9999』、CHA、LUCが『100』、その他が『999』。

戦闘を重ねることに得られるスキルポイントを割り振っていくことができ、数値が高ければ高いほど、関係する能力が強くなる。

例えば、STRの値が大きければ、重量のあるものも装備できる

し、攻撃力も上がる。

A G Iが高ければ、素早く行動できる。

上がりやすい能力値は職種によって異なるため、例えばI N TやW I Sが重要となる魔術師であるのに、S T Rに割り振り続けると馬鹿みたいに効率が悪いことになる。

その上で敢えて杖で殴り倒す肉弾専門の魔術師を目指すなら、止めはしないが。…… 実際時々いるんだよな、そういう人。

ちなみにいうと、C H A（魅力）とL U C（幸運）の値だけは割り振ることはできない。

簡単な説明はこんな感じだ、わかっただけだろうか？

最も、今回のこの【B a b y l o n】では、他の要因にもかなり左右されるため、能力値のみでは実力は測れないのだが。

そして、今ここで俺が知りたいのは、まさにその他の要因たる次のページにあるであろう情報だった。

【B a b y l o n】では、申込時に『アル』が施行する様々な性格テストを受け、初期設定する職種とは別に、属性・性質・能力パラメータ等が自動で設定される。

ちなみに、この時、あまりに危険な性格値と見なされた人間は今回のテストからは外されている。

プレイヤーキャラ

今回P K等も可能とはなっているが、それでも最初からそれに固執したりする人間は入れられないし、一定以上の禁止行為はすぐに判定され、頭上に黄色いマークが出ることになっている。しかもその行為を行った相手の承認なしには取り消すことはできない。

ハラスメント

『アル』の目をごまかすことはできないし、訴えなどがあれば運営側にてアカウントを強制的に削除し、その人物を二度とログイン出来ない様にもすることも可能だ。

そして、そこまでは行かなくとも、この黄色いマークは目立つ。言うなれば、私は痴漢行為をしたことがあります、許されていません、という名札をつけていると同じ状態——。一瞬魔が差したら、誰も近づいてくれない、パーティに入れてももらえない晒し者の出来上がりだ。

後、これは公開されていない情報だが、それすらも恐れずに10度以上禁止行為を行おうとした場合、本格的に『私は変態です』マークに変わり、さらに全能力値が1になる。これは、開発メンバーの女の子のデザインだ。そもそもそこまでやる奴に人権等存在しないという意見に対し、誰も反対意見は出せなかったのはしょうがない。

開発チームの一員とはいえ、俺ももちろんテストを受けており、その結果は実際ログインするまではわからない。

正直なところ、こういう答えにすれば良い性質が出るのか調べようとしたのだが、管轄である『アル』のセキュリティが厳しすぎて不可能だったのだ。若いながらに幼い頃から慣れ親しんだ（さらには入社後3年しごかれつつけた）おかげで社内有数の技術を持つ俺でさえ無理だったのだから、他の人間にもおそらく無理であろう。

さすが世界最高峰と言われるAIである。

（……性質どうなってるのかな、『勇猛』とか、『俊敏』とかだ
といいよなあ）

そんな事を思いながら、俺は次のパラメータを見た。

【ツール】

属性：闇

性質：臆病者・優柔不断・裏方

技能：スキル索敵・盗む・マッピング・幸運・闇系モンスター捕獲率アップ

ツプ

― 2 / 2 ―

(……………)

性質を見た、俺の何とも言えない感覚は置いておいて、先に、属性とか性質についてもう少し詳しく説明しようか……ところどころ心の声が漏れると思うが、興味ない方は適当に読み飛ばしてやってくれ。

気をとり直していくと、

属性は、基本は『火・水・地・風・光・闇・無』の7種類で設定されている。

何らかの条件を満たすと、『炎』だとか『氷』などに変化することがあるらしいが、それは俺の担当ではなかったので詳しい仕様は覚えていない。

(しかし、『闇』か……まあありだな、盗賊シーフだし、その上級職は暗殺者アサシンとかだし、悪くないな。元々夜型人間で暗いほうが落ち着くしな)

この点については頷く俺。

性質についてはすべてを網羅はできない。

何故かというと、この辺のパラメータ設定は、基本的なルールを作ってネット上の人間を表す言葉を抽出し、意味付けをし、パラメータに反映しているからだ。

それが出来るのも、世界最高峰の演算能力と思考能力を持つ『アル』がいるからこそであつたが。

つまり、人を表す単語として、『勇敢』とか『豪胆』とか色々あるわけだ。ぱっと思いつく所ではね。

それが、『臆病者』って……いや間違つてないけどさ、うん、そりゃね、自分からやばいものには関わらない、長いものには巻かれますよ俺は。

効果は、索敵範囲アップ・逃走速度アップ・隠発見効果アップか。意外と使えるところがまた……何かくるものがあるな。

『優柔不断』も、確かにと肯けてしまう。勢いで行動してしまうことも多いが、時間が与えられると悩みに悩んだ末に結局コインとかで決めてしまう、そんな俺です。

効果は、柔術系スキル効果アップ・斬撃系耐性アップ。

……つてか、これ言葉の意味関係なくね！？ いや、漢字は間違つてないけどもさ、戻ったら、『アル』にちゃんと言葉の意味教えないと。

『裏方』……？ これは、性質なのか？

あれか、俺はAIに見破られるほど裏方オーラが出てるのか？ そうなのか！？ ……そうだよな、すみません。

効果は、パーティーメンバーへのアイテム使用効果アップ・補助呪

文効果継続・隠密効果アップ・モンスター遭遇率軽減。

ああ、裏方だ、特に最後二つが存在感無いって言われてるみたいで哀しい。

確かに主役ではないですけど、高校の時の文化祭の催し物では照明補佐でしたけども。

……………それにしても、『アル』の作った性格テストとんだだけ優秀なんだよ。

哀しいけど俺を表す3つの単語としては的確すぎる。

うん、きつと的確すぎるのは良くない、そうに違いない。

戻ったら設定を甘くするように問題点リストに上げておこう。

俺はその時そう固く決意をした。

結果的にそんな余裕はなくなっただけだが。

三話（前書き）

世界観を妄想しながら、とりあえず書いてみないと始まらないと書き始めた昨日。

アクセス数が思いの外多くてビビりました。ありがとうございますこの話までで、とりあえず説明多いのは終わりの予定です。趣味の小説ですが、よろしくお願い致します。

三話

俺は、自分のパラメーター確認をした10分後気を取り直して街並みをぶらついていた。

——10分も何をしていた、とか言わないでくれよ？ ゲームの中でなら、とか甘いことを思っていたら、いきなり現実を見せられた上にそれを否定できない二重コンボはなかなかクルんだから。

ここは、最初に冒険が始まる場所にして、ラストダンジョンでもある『バベルの塔』がある、始まりと終わりの街、『バベル』。この街は完全なる正方形から構成され、2平方km、20万人が優に住めるだけの広さが設定されている。

大通りを歩いていると、ほとんど現実とは変わらない感覚だ。痛覚はショック死を防ぐためある程度までに抑えられているものの、その他の感覚に関してはほぼ再現できている。むしろ、現実以上に。

そろそろ、全てのユーザーが【B a b y l o n】にログインを完了した頃であろうか。

辺りを見渡すと、色鮮やかな髪と瞳が見受けられる。

意外と、自分の容姿をもとに変更したとはいえ、染めるのではなく設定で反映されたからなのか、赤や青、それに金の髪であってもそこまでの違和感が感じられない。

何人か、金髪青目という、どこのサ。ヤ人？ という方がいるのもご愛嬌だ。

（実際にファンタジー世界来るとこんな感じなんだろうか）

そんな事を考えていると、腹の虫がなった。

それで、babylonここの中で敢えて食べるために何も食べていないの思
い出す。

ここでは、たとえ仮想現実の世界の中であろうと腹は減るし、生
理的な欲求も感じる。

これは、脳の感覚を再現しているため、その部分だけカットする
という方が難しかったからである。

余談だが、良俗的な反対意見も大きいものの、このVR技術バーチャル・リアリティを風
俗店関係の技術にも転用する動きがあるようだ。……何でも性犯罪
をなくすためとの主張があるとかないとか。

——要は美男美女と楽しむための名目が欲しいだけではない
かと俺は思っている。ご存知の方も多いかもしれないが、IT業界
で一番お金が稼げるのは、実は『エロ』関係のものである。——
——領いた貴方、きみは世界について少し知っているようだ。

ちなみに、最大ログイン時間は72時間に設定されている。

これは、健康的な問題ではなく、社会的な対応である。

ただでさえネット廃人は多いのだから、それこそ無制限にしたら、
一度ログインしたら出てきそうにないんですよ。

……俺を含めて。

そんな中で、開発時一番苦労したのが、味覚の再現と、……トイ
レや風呂の仕様である。

戦闘の仕様やダンジョンの仕様に関しては、VR型で再現するの
に苦労はしたが、それまでのMMOである程度の既存技術を用いる
ことはできた。

しかし、ゲーム内で生活できるというこのbabyionでは、衣食住を提供できなければならない。これには担当メンバーが苦労していたのを思い出す。

トイレにこだわるメンバーがいたため、更に時間をかけてウォシユレットをつけるかでもめていたのは余談である。睡眠時間を削つてまでそんな細部を作り上げていた同僚にはある意味尊敬の念を感じないでもない。

風呂は外観のために桶や温泉のような形になったが、備え付けのトイレには、同僚の主張と努力によりウォシユレットは付いているらしい。

何でも、……いやよそう、際限がない。

『アル』の声が街に響く。

「只今、15000人の方々のログインと、それに伴うメディアカルチェックが完了致しました。私の織り成す世界によろこそ。私の名は『アル』、あなた方の言葉で言う人工知能です。これより、世界初となるVRシステムを採用したMMORPG【Babyion】のチュートリアルを行います」

その全体アナウンスが唐突に始まったのは、ゲーム開始から一時間。俺を含めたプレイヤー達が、始まりにして終りの街『バベル』に慣れ始めた頃であった。

「初期イベントか何かが始まるのかな？」

「凝ってるわね、『アル』ってあれでしょう？ 世界最高峰のA
Iって言われてる」

「あ、雑誌で俺も見たわ、凄いな、本当に人っぽい」

そんな声があちこちで囁かれる。

腹ごしらえをした後、武器屋が立ち並ぶ通りをぶらついていた俺も、少し不思議に覚えながら足を止めた。

（先輩たち、誰もこんなイベントが在るなんて言っていなかったけどな。そんな処理いつ組み込んだんだろう？）

もしかしたら今回参加する俺のために言わないでいてくれたのか
もしれない。

そう思い、次の『アル』の言葉を待つ。

「私の今回与えられている行動原理としましては、できうる限りの
プレイヤー様の希望を叶えること。そして、現実世界の皆様の健
康を管理することです。」

私は今回皆様に対して楽しんでいただくために、全ネットワーク
上にある様々な情報を収集致しました。VRMMOという単語、仮
想現実という単語。それによって私が得た知識の中には、各種小説
であったり、それに伴う様々な人間のコミュニティの感想や希望な
ども含まれます」

（……………）

VRMMOを主題にした小説。

『アル』の言葉の中にその単語を聞いた時、俺の脳裏に一抹の懸念がよぎる。

——強いて言うなら、嫌な予感というやつだ。

この場合、生まれてきて以来25年。嫌な予感しか当たらないのは、俺だけなのかどうか教えて欲しい……

俺はゲームだけでなく昔の小説なども好きでVRMMO物はよく読んでいるが、その大きな特徴として、2つのものがある。

ゲームから出られなくなるもの、つまりログアウト不能もの。

そして、これは各設定にはよるが、ゲーム内での『死亡』が現実の『死亡』と同意義である、デスゲーム。

MMOなんて知らないよ、という方のために補足しておこうか、そんなん知ってるよ、という人は、10行ほど読み飛ばすといいと思う。

もともと、各個人で行う通常のRPGと違い、多人数参加型であるMMORPG—正式名称Massively Multiplayer Online Role-Playing Game（マシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム）—は、まず世界ありきのゲームだ。

これにVRシステム—Virtual Reality System（ヴァーチャル・リアリティ・システム）—が採用されたのが今回の【Babylon】になる。

例えば、ゲームに誰も接続していないという悲しい状態であっても、ゲームの世界の時間は流れていく。つまり、個人を主体として

しまつと、その他のプレイヤーの操作との矛盾を引き起こすため、
「セーブされたデータ」からやり直すという概念は存在しなくなる。
そのことから、死亡すれば、デスペナルティが課せられ、決めら
れた場所に復活する仕様が取られていることが多い。

もちろん、この【B a b y l o n】でもそうになっている。

というか、一度も『死亡』せずにクリアできるゲームなどそうそ
う存在しない。

ログアウト不能なデスゲーム。

そんな小説の世界に少しでも憧れないといえは嘘になるが、あく
まで仮想の話だ。

やっぱり現実の生活も仕事も大事だしね。

……………だつてそんな事になつたら他のジャンルのゲームできな
いし集めてる漫画の続きも読めないじゃん。……………なんて理由では決
して無い。

（ウインドウ・オープン）

小声で俺はメニューを確認する。

ログアウトだけは、音声認識ではできない、なぜなら、それを日
常会話で用いて予期せずログアウトしてしまう場合があるからだ。

「……………ふう」

そしてその開いたメニューの中に、『ログアウト』の文字が存在
しているのを見て、ホッと息をつく。

（そうだよな、さすがにそんな、よくあるテンプレみたいな状態になんてならないよな）

うんうん、と頷く俺。

そんな俺の目の前で、それは起こった。
おそらく俺は、その瞬間を見た数少ないユーザーの一人だろう。

『ログアウト』 ↓ 『

』

——
ん？

——
消えた。

——
あれ、消えましたよ？

——え、本当に？ 消えたよ……うん、しつこいけど今日の
前でメニューからその5文字が。

多分この状況で、一番大事なそれが……

「……………」

無言であたりを見渡す、目に見える範囲ではまだ誰も気づいてい
ないようで、談笑しながら『アル』の言葉を聞いている。

俺は、背筋になにか冷たいものを感じながら、『アル』の言葉の
続きを待った。

最悪の予感を全身で感じながら。

そして、この【B a b y l o n】が俺にとって、そしてすべての
ユーザーにとつての楽しい世界初のゲームであったのは、開始1時
間7分後、『アル』がそのアナウンスを終えたその時までであった。

— t o b e c o n t i n u e d

三話（後書き）

お読みいただいている方、本当にありがとうございます。お気に入り登録が増えるのを、プログラムを書きつつニヤニヤしつつ、ビクビクしつつみています。

ところで、作者は実際プログラムを仕事としておりますが、ゲームデザイナーではありません。そして、仕事によっては更新が不定期にもなりますのでその際は申し訳ないです。

ちなみに、どうでもいいだろうってとこに美学を見出す人が多いのは多分本当です。

四話

始まりと終わりの街——『バベル』。

その街の西部に、一軒の喫茶店がある。

レトロな雰囲気で、店内は決して広いわけではない。

現実でも駅から離れたところなどにぽつんとあるような、そんな店。

俺は、そこで一人コーヒーを飲んでいた。

今は太陽が頂点から下がり始めて二時間ほど、もう少しすれば、フィールドではこの世界の綺麗な夕焼けがみえるだろう。

かき入れ時の時間とは異なり、店には俺とマスターの二人だけしかいない。

俺がそんな時間にもかかわらず、フィールドにも出ずにここにいるのは、人に呼ばれ、待ち合わせているからだった。

『アル』のアナウンスから、二週間が経過していた。

結論から言うと、現状の事態は最悪の予想、半歩手前辺りに落ち着いている。

そして、正直、アナウンス後の街で起きたことは一言では言い表せない。

怒号を上げるもの。

落ち着くように叫ぶもの。

泣き始めるもの。

知り合いを探すもの。

さすがに15000人。

様々な反応が見られた。

そして、意外と多かったのが、肅々（しゅくしゅく）と行動を始める者達だった。

中でも俺が印象的だったのが、

「ログアウト Logout! イグジット Exit! エスケープ Escape!」

等とログアウトするコマンドを思いつく限り叫んでいた男が、その努力が報われないことを悟った時、それ以上取り乱すこともせず、気を取り直したかのようにそそくさと装備を整えに行った事である。

現在のところ、不思議と暴動も起きていない。

いや、起きていないのはいいことなのだし、その後、何度か頭上に黄色いマークが点灯している人間がいたりもしたので、何もなかったわけではないのだろうか。

この理由の1つとしては、これは俺の想像でしか無いのだが、この状況に混乱しつつも、俺を含めて中途半端に理解してしまう人間が多かったのではないかと思っている。

そして、もしかすると日本人であること、も大きな要因かもしれない。

俺は男であるため、女の人ことはよくわからないのだが、MMOに限らず、RPGをやっている人間は、一度でも想像したことはないだろうか？

このファンタジー世界の中で、実際に命をかけて戦ってみたい。仮想現実の中で生きてみたい。

さらには、美人のヒロインを命を張って助ける主人公。または、助けられる自分。

大人になるにつれ馬鹿馬鹿しくなるような妄想を、一度も行わずに成長した人間などいるのだろうか？

そして、そんな中で、誰しも最初からカッコ悪い、取り乱した自分など想像したくもないだろう？

実際、そんな『願い』や『望み』が、ログインした俺たちの中に少しでも存在したからこそ、世界最高峰の人工知能と呼ばれ、そして現実世界の健康管理を行いつつ人間の要望を実現する『アル』が、こんな事態を招いたのだとも言える。

そんな訳で、現状は、思いの外、平和を保っている。

そう、不気味と感じるほどに。

良くも悪くも、考える時間が、この世界に取り込まれたプレイヤーには与えられている。

この平穏が、嵐の前の静けさなどではないと、俺は思ったかった。

現状を説明しておこう。

あの日、何があったのかの続きを。

あの時ログアウトボタンが消えたのは、やはり俺だけではなかった。

この世界の始まり——今と同じような、昼下がりの、この時間帯だった。

『アル』が続ける。

「ログイン時の深層心理、それにネットワーク上から手に入れた情報をまとめた結果。私はこの世界を皆様に提供いたします。ご確認いただいている方にはもうお分かりでしょうが、ログアウト手段は抹消させて頂きました。外部からも内部からも、このゲームからログアウトすることは不可能です」

その瞬間、確かに世界から音が消えた。

俺はそう感じた。

談笑がやみ、それぞれのプレイヤーが今の『アル』の言葉を反芻はんすうしている。

半笑いな者が多いのは、信じ切れない気持ちと、どこかイベントの一環だと考えている気持ちが半々といったところだろうか。

そして一瞬とも永遠ともいえる静寂の後、あちこちでウィンドウを開く様子が見受けられる。

疑問か怒号かは分からないが、さらに声がどこかから上がったの

だろう、『アル』が補足する。

「現在、皆様は脳の信号と肉体の信号がある部分において【B a b y l o n】システムにて制限されております。そのため、外部よりカプセルからの強制的な摘出により、長時間接続が切断された場合は、脳と肉体に異常を及ぼし、死亡する危険性が非常に高い状態となっております。これは、当初の仕様とは変更ありません」

そして更に言葉を続ける。

「また、これより一ヶ月間をチュートリアル期間と致します。その間の『死亡』は現実には反映されません。ペナルティの後、東部に存在する神殿にて復活いたします。

次に私が皆様の前に現れる一ヶ月後に、再度最終アナウンスを行わせていただきます。その時、プレイヤー様の現実と、ここ【B a b y l o n】は同一のものととなります。今回選ばれた皆様の望む、もう一つの世界です。その管理システムの維持、皆様の現実側にある肉体の健康管理は、私『アル』が行わせて頂きます」

その言葉の矛盾には気づかないのだろうか。

いや、『アル』にとつては、ユーザーの深層心理を叶えた結果のログアウトできない状態と、元々命じられていた現実にある肉体の健康維持は、あくまで並列処理であり関連はないということか。

そんな事を考えながら、俺はただ『アル』の声を聞いていた。

開発中に幾度も会話を交わした声。

AIとは信じられないほどに会話が成立する、彼。

そんな彼だからこそ、俺たちはある意味自分たち人間よりも『アル』を信用していた。

【B a b y l o n】をこうして運用する上での管理者権限は『アル』と、開発ディレクターである坂上さんにしか与えられていない。そして、『アル』に与えられている指示は3つ。

ログイン中残されるユーザーの健康状態を管理すること。

ユーザーの要望をできる限り調査し、実現するために行動すること。この時、改良であれば認めること。

そして、その二つを守る限り【B a b y l o n】の世界をいかなる場合であっても守ること、その妨害行為を受けた場合は、例えば関係者であってもアカウントを排除すること。

これだけだ。

そして、その要望の本質に制限はかけていなかった。

そのことがこの3つに抵触せずに今の状況を引き起こしている。

『アル』が外部からのアクセスも遮断しているということは、おそらく先輩たちも既に気づいているだろう。だが、残念なことに『アル』がその要望を優先する限り、何も出来ないはずだ。

健康管理を含め、運用のほとんどは『アル』に一任されている。

俺達人間がやったことは、ストーリーを作り、プログラムを書き、グラフィックをデザインしたこと。

たとえ開発者であろうとも、担当であろうとも、外部の個人の主観をできるだけ除き、また悪用する可能性を除くため、システムに障害を与えない限りは、ユーザーの要望が優先される。

もしもこの状況を外部から打破しようとするのなら、ハッキングをかけるしかない。しかも、すべてを掌握された状態から、眠ることもない相手に。

そう、世界最高峰の人工知能と呼ばれる、『アル』に対してだ。

そして、その『アル』の最後の声が聞こえる。

「では、以上で【B a b y l o n】のチュートリアルを終了いたします。皆様、この仮想現実世界【B a b y l o n】をお楽しみくださいませ。各々の物語を紡ぎ、各々の選択で、この世界の中心である『バベルの塔』最上階にたどり着き、そしてその場所に鎮座する神に挑み打ち倒すことで、再び現実の世界への道が拓けることでしょう。」

……………健闘を、祈ります」

これが、あの時起こった全てだ。

そして、予想外のチュートリアル期間。それが、曲がりなりにも街を落ち着かせ、今俺がこうしてコーヒーと楽しんでいるような理由の一端を担っている。

デスゲームに取り込まれたということ。

そして、すぐには死ねないということ。

落ち着いた人間が思いの外多かったとはいえ、あの後すぐ、シヨックから自殺しようと試みたプレイヤーもいたらしい。

そして、そのプレイヤーが呆然とした顔で、神殿に再構成されたのが伝わると、騒いでいた人間たちも落ち着いたらしい。

らしい、というのは、俺もアナウンス後の少しの放心の後、とある事のためにまず街を離れていたからだ。

その過程で色々とあって、今こうしているわけだが。

（そろそろ、来てもいい頃だろうか）

俺が、なかなか現れない相手に思考を移すと、

——カランカラン

音と共に店の扉が開き、人影が入ってくる。

俺は、黙ってその人物がこちらに向かってくるのを待った。

四話（後書き）

前回説明ある程度終わりつつ書いたものの、全くそんな事なかったです。すいません。

物語を本格的に始める前に、色々と書かなければいけない理由付けが多いですが、できるだけ読みやすく書いていきたいと思っています。

……プロの作家さん達のようにはいきませんが、何とか搾り出させて頂きますので、生温く見守って頂けたら幸いです。

五話

「君がツールさんか、すまない、ギルド内の会議が長引いてしまった。随分と待たせてしまったようだ、謝罪させて欲しい」

そう言つて頭を下げ、俺に声をかけてきたのは、銀の髪をした美^び丈夫^{じょうぶ}だった。

絵に出てくるような聖騎士のような格好。

その髪によく映える銀の鎧に、腰には長剣を装備している。

その容姿を見て、おそらくあまり造形をいじっていない天然物だと俺は思った。元々ゲーム内には美男美女が多いが、設定かどうかは結構分かるものだ。

——こんな所でそんな能力が役に立つとは思わなかったが……

ちよつとした行動の立ち居振る舞いも堂に入っている。

男の俺から見てもそう思うのだから、さぞかしおモテになることだろう。

そんな羨む外見で、態度が傲慢であれば即座に敵認定している所だが、その低姿勢には好感を持てる。

「いや、問題ないさ、近頃ずっと動いていたから、この時間のコーヒータ임も悪くない。後、『ツール』でいいから。さん付けされる^{さん付け}とむず痒いんだ」

謝罪の言葉にそう首を振り、俺は対面の席を促しマスターを呼ん

だ。

「……いや、私は」

「いいから、このコーヒーは格別うまいんだ。謝罪に免じて、奢りにしとくから飲んでみてくれよ。実は、先日あんたらに買い取ってもらった情報のお陰で裕福なんだ」

そう遠慮しようとする男に、俺はニヤツと笑いかけ、コーヒーを自分の分も含め二杯頼む。

このプレイヤーの名は俺でも知っている。

あのアナウンスの後、混乱しているユーザー達をまとめ、MMO経験の豊富なユーザーに声をかけ、情報を共有する互助ギルドを立ち上げた男だ。

その容姿と類まれなるキャプテンシーであつという間に【Babylon】一大ギルドの長となったこの銀麗の剣士を知らないものはいないだろう。

一言で言うなれば、……言いたくはないが、俺とは真逆のタイプの人間だ。

リアル ヴァーチャル
現実でも仮想現実でも、人をまとめてしまうような。きつと性質の一つには『主役』とか書いてあるに違いない。

そんな俺の内心には気づかず、目の前の男は対面の椅子に腰掛け、口を開いた。

「ご厚意に甘えてありがたくいただくことにする。……改めて自己紹介をさせて頂こう、私の名は『フェイル』。ギルド――ナイツ・オブ・シルバー銀の騎士団』のギルドマスターをやらせていただいている」

「知ってるよ、あんたは有名だからね。で？ そんなギルドマス

ターさんが、ソロ狩りをやっているようなただの中級プレイヤーの俺なんかに何の用だい？」

「……………ただの、とはご謙遜だな。端的に言おう、君の情報収集能力が欲しい。君が開示したモンスターの情報、ダンジョンの情報是非常に精確だったよ、うちの補佐も驚いていた。銀の騎士団に入らないか、ツール」

俺の疑問に、少しの逡巡の後そう言ったフェイルの言葉に、俺は首を振る。

「随分と過剰評価をしていただいてすまないが、生憎と、どこにも所属する気はない。これは別に銀の騎士団がどうこの問題じゃない」

「何故だ？ 理由を、聞かせてはもらえるか？」

「そんなに大げさな理由じゃないさ。昔、もちろんこのことは違うMMOでだけけど、アイテム関係でよく揉めてな、それ以来、ソロ活動が多いんだ。……今更、集団行動が出来るとは思えないしソロのほうで効率がいい。おかげで情報収集も得意になったしね」

誰であれMMORPGの経験があるものならば、手に入れたアイテムの分配等で揉めた経験は少なり大なりあるだろう。だからといって極端にソロプレイに走る人間は多くはないが、決して少なくもないのだ。

「しかし……………」

ただ、今の状況ではそれだけでは断る理由には弱いのだろう、その俺の言葉に何かを言いかけるフェイル。

確かに、この状況では情報共有は必須だと俺も思っている。
なので俺は先手を打つことにする。

「もちろん、何もしないって言うわけじゃないぜ。もちろんボス戦には協力するし、俺が確認したモンスターの情報やダンジョンの情報は即座に公開するつもりだ。先日みたいに『言霊』関係の情報があれば、知らせるさ。人の命をかけてまで、情報を独占する気もそれを商売にする気もないよ。」

——今回情報料を頂いたのは、あんたのところの綺麗なお姉さんに借りを作りたくないと言われたからさ」

俺がそう言うと、フェイルは少し難しそうな顔をして、黙った。

本当にギルドに属さない理由はそれだけでも無いが、嘘は言っていない。

それに元々、こういう状況でなくともソロ経験が俺は多い。

先ほどのような理由もあるが、一番は仕事柄時間が不定期だからだ、いつ入れるかも落ちるかもわからないのならば、一人のほうがいい。

大々的なイベントがある場合には、臨時パーティを組めばいいだけの話だしな。

……決して、大人数での人付き合いが苦手だからなわけじゃないぞ？

「……後二週間だが、それでもか？」
少しの沈黙の後、カップを傾けてコーヒーを一口飲み、フェイルはそう呟いた。

俺はそれを聞いて、ああ、良いやつなんだと思う。

てつきり、俺が情報を独占することについて考えているのかと思
ったが、違ったらしい。

二週間後、その時何があるかなんていうことは言うまでもない。
チュートリアル期間の終わりが示すもの。

それは、塔の最上部に到達し、この世界が攻略されるまで終わら
ない、死の遊戯デスゲームの始まり。

フェイルが、俺に真っ直ぐな視線を向けてくる。そこには迷いも
打算も感じられない。

この眼の前にいる男は、おそらく本当に善人なのだろう。
今日初めて出会った俺のことまで気にかけてようとしている。

ある意味何でもありになってしまったこの状況で、他人の心配が
出来るのは皮肉などではなく、尊敬に値する。

それが分かったからこそ、俺ははつきりと否定する意味で、頷い
た。

多分、その場所に俺はいないほうがいい。

俺が、いられない。

今はまだ、死人が出ていないからいいだろう。

しかし、現実問題、今この世界に生きている15000人が誰一
人欠けずにクリアできる可能性など、限りなくゼロに近い。何せ、
1000人で行ったクロードβテストの時でさえ、どれだけ『死
亡』数があったかなどわからないのだから。

これは、当たり前のことではあるのだ。
何度も死に、そのたびに学習する。

それが本来のゲームのあり方なのだから。

しかし始まってしまった現在の【B a b y l o n】はそうではなくなる。

そして、実際その時を迎えてしまった時、きっと運営への文句は出るはずだ。

……『アル』への呪詛が、出るはずだ。

むしろ、毒づかない奴なんていないだろう。

この世界を創り上げることに携わり、『アル』と面識のある俺でさえそうなのだから。

例えばそれを間近で聞いた時、もしくは所属しているギルドのメンバーが死んだ時。

俺は、それに耐えられる自信がない。

現実世界における、運用メンバーの一人であつたものとして、この創作者の一員としての覚悟が、俺には足りていない。

この二週間。俺はひたすらモンスターの情報と自分の知識のすり合わせを行っていた。

出来るだけ正確に、先入観の混ざらないように。

AIの行動パターン、出現率、注意すべきことを知識の限り。

効率を求めて一人で出現パターンの合間を縫い、必死に自分の作ったアルゴリズムを思い出し、短期間で調べられるだけ調べた後で公開した。

もちろん他のプレイヤーが既に公開しているものは省き、俺でしか気づかないようなことであつたり、レアなモンスターであつたりの情報を少しずつ公開していった。

正直、二週間はあつという間だつた。

寝る間も惜しんでいたから、結果的にレベルも上がっていった。

……そして、二回死んだ。

自分で作ったものながら、モンスターは本当にリアルだ、攻撃されることの恐怖もあるし、始めはたとえ相手が雑魚であるとわかっていても、体の反応は逃げると叫んでいた。

しかし、無理出来る期間が限られているからには無理するしかない。

この期間が終わっても、命がかかってもお、俺がその恐怖に打ち勝てるかどうか等、正直自信がないからだ。

俺には、批判や罵声を受ける覚悟もなく、開発メンバーであることを明かす勇氣はない。

俺の持つ情報は、雑魚モンスターの基本パラメータと行動パターン、他のメンバーが担当していた部分のうる覚えの知識。

ダンジョンや『言霊』の配置や出現はランダム関数を用いているから正直わからないし、自分がゲームの時に楽しむために、必要最小限な情報以外からは敢えて離れていたことが悔やまれるが、知うる情報はすべて公開していくつもりだ。

そんな俺の内心がわかるはずもないが、表情を見て誘いが無理なことは察したのだろう、フェイルは諦めたように笑った。

こんな時だが、苦笑ってイケメンがやると確かに似合うな……、等とらちもないことを考える。

「困ったら、いつでも言ってくれ。我が銀の騎士団ナイツ・オブ・シルバーはどんな時であろつと入団希望者を歓迎するし、この状況だ、ギルド団員であるとなかろうと、助け合わなければと思っている。

——後、このコーヒーは確かにうまいな、ギルドを立ち上げて、重圧もあつたが、久しぶりにそんな事を思つた気がするよ。トール、礼を言わせてもらつ。よければ、友人として、これからもよろしく頼む」

そう言つて、本当に美味そうにコーヒーを飲み干すと、爽やかに笑い、立ち上がり手を差し出してくる。

去り際の握手か……本当に、主人公らしい男だ。しかし、話してみわかる、この銀色の剣士なら、皆の先頭に立つて、この閉じられた世界で人を導くことが出来るかもしれない。

眩しいけれど、主役としての責任と戦おうとしているこの男のようにはいかないだろうが、裏方らしく俺もがんばろうと思える。

「ああ、こちらこそ。お互いに、無事を祈つて」

俺はそう言い、その手を握つた。

これからは少しだけ心の焦りに向き合える、そんな気が、していた。

【B a b y l o n】チュートリアル15日目	現プレイヤー数：
15000人	

五話（後書き）

10/20 少しここまでの話を改稿しました。

六話

ダブル・チェイン
「双撃！」

手にした双剣が、相手にヒットする。

俺は、すっかりリンクを引っ掛けてしまったモンスター、『リザードナイト Lv.12』が、生命力（HP）を散らし粒子となつて消えるのを見守った後、その落としたドロップカード、『龍人の鱗 Lv.3』を拾い上げた。

今更の説明だが、このゲームではアイテムは二つの形状を持つことが出来る。

まずは、普通にオブジェクト化したもの。

ただ、これでは常に持ち運ぶわけにも行かない。

ドラ。もんの四次。ポケットでもあれば別だが、それは仕様を決めるときに却下された。

後、戦闘中に使ったりもするので、メニューで選ぶだけでは効率が悪すぎる。

結果、アイテムはカード化して持ち運び出来るようになったわけだ。

モンスターを倒した際も、ドロップカードが落ちる。

これを拾う瞬間は、中々いいものだ。

もちろん乱戦では自動的に収納されるようにもできるが、気づいたら在る、よりも自分で手に入れた感があるので俺はカード化してドロップされるようにしている。

それをアイテムボックスに収納すると、俺は目の前に続く目的地

への獣道をみやり、その先に歩を進めていった。

喫茶店でフェイルと別れてからの俺は、不思議と少しだけ肩の荷が下りたような気がしていた。

そばにはいられないなんて思ったけれど、だからこそ、そう思った。

自分でも、勝手だというのはわかるし、現金だな、と思うが。

俺は、元々裏方の人間なわけだ。

昔から、主人公体質のやつが突き進むのに付いて行って、適当に狩り残した枝葉を回収するようなタイプだと自負している。

伊達に俺を25年もやってはいない。

性質にも文字通り『裏方』ってあるしな。……………お願いだから笑い事にしておいてくれ。まだ時々ステータス見て哀しくなったりするから。

それでも、こんな事になって、必死になって情報を集めて、せめてどこかで俺も攻略するのに貢献しないと、なんていうことを、柄にも無く思ってしまったわけだ。

責任がある立場だと思っている割りには、俺の持つ手札は哀しいほどに少ない。

遅かれ早かれ、実力のあるプレイヤーならば解るような知識ばかりだ。

もちろん、今もその責任を感じる気持ちは変わってはいないし、やることはやるつもりでいる。

まだ、俺は開発者です、こんなことになって申し訳ないです、なんて事も言える気はしないけれど。

フェイルのように人を集めて、人を思いやって、俺みたいなソロプレイヤーのことまで気にかけるような、そんな人間がここにいると、実際会ってそう感じるのは、やっぱり少し、暖くなる気がする。

とまあそういう少しの晴れやかな気持ちの元、俺はログインしてから二週間目にして初めて、元々やろうと思っていたことをしに、いつもと変わらず一人で、だが少し気負いも和らいだ形で、ここにやってきたのだった。

バベルの街西部からでて少し行くと、『深淵の森』というフィールドに突き当たる。

初心者が少し戦えるようになったかな、というレベルで訪れることの出来る、つまりは中級者の入り口の為のレベル上げに最適な場所として設計された所だ。

攻略組、と常から呼ばれているような元・廃プレイヤー達は、これまで二週間で通り越しているし、

怯えつつも、フェイルのような人間のお陰で少しずつ立ち直り始めた初心者プレイヤーには少し早い、そんな場所。

俺も、ひたすら今開放されているダンジョンをソロで回っていたため、ここには既に来たことがあるし、モンスターの確認も終えている。

ただ、その時の余裕のない俺が、見ていない場所があった。

その場所は、別にレアモンスターが出てくるわけでもない。
決して、良いアイテムが出るわけでもない。

そんな、特にプレイヤーにとって都合の良いわけでもない場所に行こうと思いついたわけは、今の時間帯にある。

後一時間ほどで日が暮れる。それは明日以降になってしまったらう。

正直、それでも不都合があるわけでもない。

でも、フェイルが立ち去って、コーヒーが美味しいと思って、あいつもそう言って。

その場所に、行きたくなった。

自分でもわからないけれどそんな時がある。わかってもらえるだろうか？

(……追っ尾けられてる？)

街を出て、森に入って20分程、ふと、俺は違和感に気づいた。

さすがに人が少ない場所だとは言え、誰もいないわけではないから、多かれ少なかれ狩りをしているプレイヤーはいる。

ただ、先程から俺が一直線で進む場所に、一定の距離で付いてくる三人のパーティがいるようだ。

なにせ一番目の性質は『臆病者』な俺。

索敵は任せてくれ。

というかこの能力が意外と使えたお陰で、俺はソロ狩りとしてなかなか効率よくやっていけている。

……この性質を誇りたいかと問われれば、ノーコメントでお願いしたいが。

先ほども言ったが、これから向かう先は中心部でもないし、俺のような目的以外でそこを目指す物好きなどいないだろう。

それに、俺の更なる性質……『裏方』により、できるだけモンスターと遭遇しないよう^{リンク}に行動している俺に離れずついてきているということとは、向こうも結構なスピードで進んできているはずだ。

プレイヤー・キラ
(PKか……厄介だな)

この巻き込まれた状況下で、そんなことをしている人間がいるとは信じたくはないが、盲信もできない。大体、この状況でソロで行動している俺をつける理由など、他には思い浮かばない。

三人の相手をするのは相手のレベルによるが分が悪すぎるし、ここであまり時間は食いたくないのもある。

尾行をまくのならば、まだ目的地が見定められていないであろうここしかないだろう。

「しょうがない、隠れてやり過ごすか」

ここで返り討ちにしてやれないのは悔しいが、それこそ顔を覚えてフェイルにでも注意を促しておけばいい。そう考えた俺はそう呟くと、一気に移動のスピードを上げ、そして、ある程度距離が離れたところで、密集した木陰に身を隠した。

元々の俺の職種が盗賊^{シフ}なのと、外見が黒髪に黒のコートなのも相まって（裏方のせいだけではないぞ）、相当の索敵^{サーチ}スキルがない限り、ここに俺がいることは見破られないはずだ。

そして、それだけの索敵^{サーチ}スキルがあるのであれば、レベルも相当のはず。相手に害意があった場合、目的地にたどり着くまでにやられてしまうだろう。

俺の現レベルは24。

入って二週間という期間を考えると結構なレベルに達しているとはいえ、元々がそこまで装甲のない盗賊^{シフ}だ。その速度を用いた戦闘で、一対一位ならどうにかなったとしても、多人数相手にどうこうではしない。

人の気配が近づいてくるのを感じる。

俺は、息を潜めて、意味もわからず後を付いてくる不審な輩^{やから}達の顔だけでも確認しようと、木陰から目を凝らした。

（……………えっ！）

そしてその影を視認した時、俺は声を漏らしそうになるのを何とかこらえる。

追尾けてきていたのは、予想通り、三人編成のパーティだった。装備と振る舞いから見て、結構レベルも高そうだ。

戦士職二人に、後衛の魔術師が一人。

回復役はいないが、それだけ余裕のある面子なのであろう。

ただ、俺が驚いたのは、そのレベル等ではない。

その中の一人を、見たことがあり、知っていたからだ。

先頭をやってくる、黒髪の女性。

スレンダーな体型に、冷静さと伶俐さをたたえる目。そしてその美貌に似合いすぎている眼鏡。

これで腰にレイピアを吊り下げ、軽防具を身にまとってなどいなければ、立派な秘書に視えるであろう。

確か、名を『ローザ』と言ったか。

『言霊』の情報を渡しに行った時に見たから間違いない。

俺は、美人の顔を覚えるのは得意なのだ。

それは、先程俺が入団を断ったギルド。

あの主人公然とした善人に見えたフェイルがマスターを務める、
ナイツ・オブ・シルバー
銀の騎士団のギルドマスター補佐をやっている人間だった。

六話（後書き）

10/17 Lvを少し調整しました。
本筋には関係ありません。

七話

(……まさか、銀の騎士団の連中が?)

ギルドのマスター補佐がPK?

思いもよらぬ遭遇にそう考えて、俺は混乱する。

つい先程まで、フェイルのような男と、その作るギルドについてのいい印象があったからこそ、余計に思考が乱れていた。

少し躊躇するが、どういうことが確認したいという意味が勝る。

——それに、確認するとすれば、チュートリアル期間でいられる今しかない、との冷静な部分もあった。

脳内の迷いとは裏腹に、体は反応する。

音もなく、この二週間で使い慣れた双剣のうちの一本を手にとると、俺は身を潜めていた木陰から飛び出した。通り過ぎかけていた三人は気づくも、まだ構える間はない。

そして、その隙を待っているほど、俺は馬鹿でもない。

狙うのは後方にいた魔術師の男。

「……動くなよ、首への至近距離からの一撃は、ほぼ間違いなくクリティカルだ。防御の薄い魔術師タイプには耐えられないと思うぞ?」

俺に短剣を首筋に付きつけられた男は、それを聞いてコクコクと小さく首を動かした。

それを見て俺も頷くと、このいきなりの状況にも全く動じた様子のない、ローザに目をやる。

「……また会ったな」

「ええ、トールさん。あなたに頂いた情報のお陰で、この世界は初めて塔の一步を登ることができそうです。その節はありがとうございました」

塔の最初の階層を開くための、『言霊』の場所を見つけたかもしれないという情報を持って銀の騎士団に行った時と同じ……本当に嫌になるほど冷静だ。

もしかしたら、こいつは人質としての役に立つ人間じゃなかったか。構わず二人がかりで押し切られたら……

そんな心境を読んだかのように、ローザが言葉を続ける。

「後をつけたことは謝罪します。ですが私達に害意があるわけは有りません、もちろん必要と有らば防衛は致しますが」

そしてあっさり尾行していたことは認め、謝罪と共に腰のレイピアを含み武装を解除してみせる。隣の戦士の男も同様だ。

（随分とあっさりしてやがるな）

その対応を意外に感じながらも、なおも俺は魔術師の男に短剣を突きつけておく。

なににせよ三対一だ、保険はかけておいて損はない。

「……PK目的ではないと？」

「ええ、そんな事をするフェイルに怒られてしまいます。……
…
ネイルを、魔術師の彼を開放してあげてもらえませんか？」

「それだけで、偶々面識があるだけに過ぎないあんたが信じられると？」

「……そうですね、言い方を変えましょう。あなたを襲って得られるメリットと、あなたの情報の価値の利益計算ができないほど愚かだと、私はそう見られているのでしょうか？」

すごい自信だな、おい。

しかし、傲慢に聞こえるその言葉に、俺は不思議なほど納得してしまった。

……その美貌と目線に気圧けおされたわけじゃないぞ。

「……悪かった、俺の勘違いだったみたいだな」
そういい、捕らえていたネイルと呼ばれた魔術師を解放する。

「まあ、あっさりと捕まったそいつが悪いに30点」
隣の戦士が、ニヤツと笑って呟く。

でかい。190cmを超えているのではなからうか。
体格がいいだけではなく、引き締まっているのが解る。

その隆々とした体の上に乗るのは、灰色の短髪の下にぎよりとした目と驚鼻わしばなを配置した角張った顔。そして目につくのは二の腕にある大きな龍の刺青。

あの、どこかその筋の御方でしょうか？ プレイヤーの皆様、我がVRMMORPG【Babylon】は、万人に開かれております。

そんな俺の一步引いてしまった心境にもかかわらず、男は近づいてきて、バンバンと俺の肩を叩いた。

「いいね、お前。嬢ちゃんが気になるって言うから付いてきたけれど、いい動きするじゃねーか。俺はリュウだ、フェイルの野郎と銀の騎士団の幹部をやってる。つってもまだ入団10日目だけだな。よろしく頼むわ」

そしてガッハツハと豪快に笑う。

肩が痛い、どうやら氣に入ってもらえたらしい。うん、結果オーライ。

「ひどいなあ、リュウさん。僕は後衛職なんですから、しっかり守ってくださいよ。これで本当にPK専門の人間相手だったらどうするんですか」

その結果オーライの元はといえば、そのさらったとした金髪をかきあげながら、リュウに文句を言う。

そのリュウとは対称的に細い体格。そしてその容姿は文句なしの美形、西洋系とのハーフの様に見える……見ようによってはフェイルよりも綺麗な顔立ちかもしれない。強面のリュウなどよりもよっぽど騎士団と言った感じがする。

でも、どこか仕草にナルシストさが漂っていて、俺にとってはリュウの方が好印象である。

「でも確かに、今回は僕の負けを認めるよ。ツールさんだったね、僕はネイル、人は轟炎の魔術師、と呼ぶ予定だ」

予定かよ！ しかも二つ名自称ってどんだけ……リュウさんとは違う意味で強者だ。

瞬間的に、俺の中でネイルは残念な二枚目として認定された。異論は認めん。

フェイルのとは濃いキャラが揃ってるなあ、さすがだ。

とりあえず二人と挨拶を交わした後、ローザに改めて目を向ける。

「で、何で着いてきていたか、話してもらえんדרうつ?」

俺がそう問うと、ローザは頷き、少し考えて言った。

「ええ、そのつもりです。ただ、その前に一つ伺いしてもよろしいでしょうか?」

「何だ?」

「……この先には特に何も無いはずなのですが、ツールさんはどちらに向かっておられたのですか? 差し支えなければ、教えていただきたいのですが」

なる程ね、それは疑問に思つか。

俺はローザの言葉にそう納得する。

「言うより実際に見せたほうが早いな、隠すもんでもないし。でも、別にアイテムとかそういう実利的なものがあるわけじゃないから、そんな期待はしないでくれよ。そう遠くはないから、そこまで急ぎでもないけれど、歩きながら話そう」

そしてそう言って歩き出す。

後20分もかからないが、この先モンスターには合わないでもないので進んでおきたい。

というか本当にただ付いてきてたんだな。害意はないとすると、何דרうつ。

ギルドに入らなかったことについてかな。

「わかりました。貴方達はどうしますか？ リュウ、ネイル」

「俺は行くぞ、面白そうだしな」

「僕も今更一人で帰る気はしませんよ」

ローザの確認の言葉に、当たり前のように着いてくると答える二人。

ちっ、美人と二人デートも悪くないのに。

内心で思うと、ローザから一瞬冷たい視線が。

……あれ、心読まれた？ というか追尾けられてたの俺なのに何でこっちが悪者みたいな目で見るの？

コホン。

取り敢えず、そんなやり取りの後で、俺と銀の騎士団の三人という変則パーティは目的地へと歩を進める事になった。

その後話してもらうと、後をつけていた理由としては、俺のもたらした情報があまりに正確だったので、どのような方法で狩りをしているのか気になったのだという。

そして、ギルド入りを断られたと聞いて、その情報収集の手法を出来れば聞きだそうと探していたところ、街を出る俺を発見、見ていれば、よくわからない方向へと進んでいく。これは何か在るのかと思い、三人で着いてきた結果今に至るというわけらしい。

聞いてみれば、確かに馬鹿馬鹿しいような普通の話だ。

ローザの態度を見ると、どうもまだそれだけでもなさそうだったが、害意があるわけではないのは確かのようにだったので、放置する。

多分詮索してもわからん。この人感情表に出ないんだもん。

ちなみに、俺が気になって、等のフラグでは残念ながら無いのだけは言っておこう。

彼女はあの美形かつ善人のフェイルのハーレム要員のようで、裏方の俺には付け入る隙もない。

……甲斐性もないがな。

そうして臨時パーティを組んでみると、三人とも、さすがに大ギルドの幹部クラスだけあって高レベルプレイヤーであった。

ローザは小技の連続で敵を足止めし、リュウさんが薙ぎ払う。

残った敵はこれまた残念な二枚目の割に強いネイルが、後方で詠唱を重ねて焼き払う。

うわ、そりやこのレベルのフィールドでは回復役いらないわ。圧倒的だもの。

もちろん、俺は盗賊らしくそそくさとモンスターからアイテムを盗んでいましたが何か？

そんなふうに順調に目的地に近づく俺達。

まあ、近いのは俺にしかわかつてはいなかったが。

そんな時だった。

森の中に声が響き渡る。あまり現実では出会わない声。

「悲鳴？」

「……だな、多分こつちだ、100m程先にプレイヤーが三人。モンスターの気配……無し。これは本当にPKかもしれん」

ローザの疑問に、俺はそう答えて走りだす。遅れて三人も続くが、

本気で走る盗賊^{シーフ}の俺よりは遅い、何せ全基本職種中最速なのが盗賊の特徴だ。もっともそこまで遠くはない、すぐ追いついてきてくれるだろう。

悲鳴の声は女の人声だった。……それも、相当切羽詰まったよ
うな。

嫌な予感が脳裏をよぎる。

俺は、自分に出せる限りのスピードで、声の方向へと向かった。

七話（後書き）

ご覧になって頂いてありがとうございます。

この後につなげるため、締め部分を少し修正しました。

八話

本当に、嫌な予感ばかりが当たることだ。

走り抜けた先では、ある意味ではPK以上に忌避されるような事が起ころうとしていた。

その目の前の光景を見て、即座に意味を悟った俺は、すつと頭が冷えるのを感じた。

正直、内心ではわかっていたのだ。

『アル』は、この世界を、もう一つの世界と呼んだ。

ここは、仮想ではあるが、現実だと。

元々、今回が初の試みとなるVRMMOには、大きな懸念もあった。

それは、これまでは画面内の話であった暴力やハラスメント行為が、実際に行動としてできてしまうということ。

だからこそ、それを行ったことに対する黄色マーカー等があるし、様々な倫理コードでの対処等が存在する。

ただ、それは運営が機能していることが前提の対策であつたりもする。

『アル』という、この世界での神とも呼べる能力が前提である、対応策。

しかし、『アル』はあのアナウンス以来、姿を見せていない。

そして、次は、この世界を現実とするための、最終アナウンスだとも言っていた。

それは、現在、運営という名の絶対的立場からの監督が存在しな

いことを意味する。

『アル』にとっては、犯罪者も、被害者も、等しくプレイヤーに過ぎないのだ。

システム上不都合となる場合には別だろうが、仕様上影響を及ぼさないものに対しては、何も行動は起こさない。

そして、この世界には、法律というものは存在しない。

『死亡』に気を取られて、それ以外にも、どれだけ薄氷を踏むバランスのもとに成り立っているものがあるかということにまで、考えが及んでいなかった。

……いや、それは嘘だ。

考えることを放棄していたのだ。

ここは、この世界は、現実だ。

ただ、『死』だけがそうなるわけではない。

生活するということが全てが、現実なのだ。

俺の索敵にかかっていた人数は三人。

だが、ここには四人いた。

男性プレイヤーが三人、女性プレイヤーが一人。

男のうちの一人が呪術師らしく、女性プレイヤーに麻痺の呪文を掛けて動けなくした上で、残りの二人が押さえつけている。

その座標がかぶっていたからこそ、三人だと思ったのだ。

一人の頭上に黄色のフラグが出てはいるが、気にした様子は見られない。

男達が突然の闖入者である俺の方に顔を向ける。
その顔に浮かんでいるのは、醜悪で下卑た笑み。

そして、その背後で麻痺の呪文をかけ続けている呪術師の男と目が合う。

——っ！

それを見た時、俺の中で何かが弾けた。

瞬間、俺は投げナイフのカードをオブジェクト化し、その呪術師に向けて投擲。そのまま女性プレイヤーを組み伏せている男達に向かってその双剣からの一撃を放った。

三対一だということも、後から来るローザたちの事も、頭から消し飛んでいた。

虚しくナイフは避けられ、俺の双剣もまた、空を切る。

しかし、その行動によって組み伏せられていた彼女は解放された。即座に、俺はその女性を背後にかばうようにして双剣を構える。

飛び退いて避けた二人は、片方は戦士のようなだった、背中に担いだ剣を抜き、威嚇するように構えてくる。

そして、もう一人が何事かを呟いた瞬間、俺の動きを絡めようと地面から茨が伸びてくる。

ローズ・バインド
束縛の薔薇。

咄嗟にそこから飛び退くも、俺はその攻撃により判明した相手の職種に驚愕する。

（なっ！ …… もう一人も、呪術師だと！）

呪術師は、相手の行動を阻害したり、パラメーターを低下させたりすることの専門家だ。^{エキスパート}その効果は多彩なものがある代わりに、攻撃力は低い。しかも、モンスターによっては妨害が効きにくい相手も存在する。

壁役の戦士と攻撃力の低い呪術師二人などというパーティは、歪^{いびつ}もいい所だ。

明らかに、モンスターを狩る面子ではない。

……一人のプレイヤーを、嫩^{なぶ}りながら狩るための、三人だ。

おそらく、交互に麻痺^{パラライズ}をかけ続けるつもりだったのか。

その考えに行き付き、吐き気がする。

思考が、得体のしれない憎悪と嫌悪感に飲み込まれる。

「……………」

しかし、その感情に身を任せて斬りかかろうとしたその時、背後の、麻痺から解放され起き上がりうとしている女性から漏れた声に、沸騰しかけていた俺の頭が少し冷える。

そつだ、今は守らねばならない。この背後の女性を。

「……………すまない。あんたを、助けるから」

そつ小声で告げ、さらに攻撃を加えてこようと身構える眼前の男達を見据え、片手を上げて口を開いた。

「待てよ……お前ら、正気か？ 三対一で女を襲うとか……状況、わかってんのか」

そして、背後の女性の手をとって何とか立ち上がらせ、後退りする。
あとす

「へつ、何だよお前。正義の味方気取りで飛び込んできたわりにはもうビビッてんのかよ、ああ？ わかってねーのはお前のほうだ。こんな訳の解らん状態で、一度も死なずにクリアだ？ 出来るわけがねえじゃねーか、俺たちは死ぬんだよ！ なら、それまで楽しませてもらって何が悪い」

そんな弱腰な俺を見て、戦士の男が構えたまま、俺を嘲笑つかの
あざわら
ように笑みを浮かべ言ってくる。

「……なんなら、お前もどうだよ。俺らの後で良ければ混ぜてやるぜ？ 見るよ、そいつはきつと極上だぞ」

そして、それに追従したかのように、一緒になって取り押さえていた呪術師の男が、詠唱を中断し、嘲笑った。

その言葉に、掴んだ腕ごしに女性がビクツと強張るのが解る。

うちの先輩達は本当に優秀だ。

……綺麗なものだけでなく、こんな醜悪な表情まで完全に表現しきれているのだから。

せめて少しでも安心させられるように、掴んだ女性の腕に少しだけ力を込めて、そして嘲笑する男にむけて俺は憎々しげに本心を吐き捨てる。

「クソ食らえ、って言葉を初めて自然に使うよ。下種^{げす}が」

挑発するような言葉に、二人が激昂する中、たった一人無言でいた残りの呪術師が、急に背後を振り向く。

チツ、バレたか。

「……………む……………三人。仲間か？ 分が悪いな」

目を細めそう言い、すつ、と手を地に広げ、転移の呪文を用意しようとする。

こいつだけは他の二人とは違う。挑発にも乗らずに決断が早い、このまま逃げるつもりのようなのだ。

少し頭が冷えた結果、俺の後を追って近づいて来ているローザ達の気配に気づき、何とか時間を稼ごうとしていた俺だったが、仕方がない。こちらもやられてしまうかもしれないが、誰か一人でも倒せば、その相手の情報は得られる。

今は、名もわからぬまま逃がす訳にはいかない。

【B a b y l o n】は広く、運営はいない。

ここで逃すと捕らえるのは難しくなるだろう。

後は、ローザ達が何とかしてくれるだろうと考え、相打ち覚悟でも二人は道連れにしてやると決める。

「下がってて、もうすぐ助けが来るから」

そして、そう言っただけで手を放すと、その空いた手を改めて掴む感触があった。

「……………待つて……………待つて下さい。10秒だけ、三人を同時に

足止めって、できますか？」

その後が続く思いも寄らない言葉に、俺は咄嗟に振り向く。

「……………初めてきちんと顔を見たが、息を呑むほど綺麗な、意思の強い目をしている。」

何がそうさせるのだろう、今も、まだ恐怖に震えているだろうに、そんな彼女の肩を震わせながらも俺を見る目線はまっすぐだった。その手を振りほどけない程に。

俺は、余裕が無い中で考える。

三人同時では長くは保たないが、倒すことを考えず時間を稼ぐだけなら出来なくもない。それに今ならば、一番注意が必要そうな呪術師の一人は、どこかに転移する準備に追われているはず……
そう判断した俺は、しかし、一応最後の確認を取る。

「……………できたら逃げて欲しいんだけど」

その言葉には、案の定首を振られた。
怖くないわけがないだろう。本当の心の中などわからないし、事情も知らない。

それでも、彼女が逃げることも守られることもよしとせず、戦おうとしていることは分かった。

だから、頷く。

「わかった、任せる」

それだけ言うと、俺は行動を開始した。

コートのポケットからアイテムカードを取り出し、転移の陣を構成する呪術師とそこに集まる二人の頭上に投げ上げる。

最も、これはただのフェイクだ。

しかしその意味ありげな行動に三人の視線が集まった所で、持ちうる技能のうち、最速の攻撃を俺は発動させた。

『時雨の舞い』

DEX（器用）とAGI（敏捷）が一定の値に達したプレイヤーが、あるイベントをこなすことで習得できる。

先日、仕様通り取得できたことを確認し、技能イベントを公開したばかりの、おそらく現段階では俺にしか使えない特殊技能。

俺の発した言葉がシステムの流れに乗る。この流れに逆らってはいけない、逆らえば、脳と行動の差異に、行動が中止してしまう。そして、無事双剣が攻撃の初期動作に入り攻撃を開始した。攻撃によるHPはほとんど減らないが、三人はただ防ぐしか無い。この技は攻撃力は無いに等しいが、複数の相手に攻撃できる上、防御に時間をとらせられる、後衛が詠唱することを見越した時間稼ぎの技能だ。

そんな双剣の乱舞に身を任せる俺の耳に、歌が聞こえる。攻撃の中でも不思議と響く、透き通った綺麗な声。

『彼方へ捧ぐ、風の詠』

『想念いのままに、奏でましょう』

『虚空に揺蕩う、言霊』

そんな歌が流れる中、俺の技能スキルが終わり、その反動である硬直時間間が俺を襲う。

それを見て、憤怒に顔を歪めた戦士の男が防御の体勢を解きその剣を振りかぶるが、俺には不思議と恐怖はない。

（綺麗な声だ……そうか、吟遊詩人だったんだな）

そんな場違いなことすら考える余裕が、何故があった。

そして、振りかぶった剣が振り下ろされる前に、歌が終わりを告げる。

戦士の背後で転移準備をしていた呪術師が顔をゆがめるが、もう遅い。

『——永遠とわの終わりを、告つげましょう』

『——シルフ・ディマイス
終焉の蒼風』

最後の詠唱と共に、その技が発動する。

吟遊詩人は、基本的に支援系に優れた職種である。

フィールド等にある言霊うたを使い、謳い、パーティ全体の防御力を上げたり、仲間に攻撃している相手の動きを止めたりといったことが専門だ。

ただ、この【B a b y l o n】ではそれだけではない。

その詠唱に時間がかかるものの、自分の属性に関する歌では、後方からの攻撃系である魔術師よりも威力を発揮できる場合がある。

彼女の歌は、開発者の俺ですら初めて聞くほど、綺麗なものだ。た。

そして、その効果も――。

「……これは、何？」

ようやく追いついてきたローザが呆然と呟き、それに少し遅れて現れるリュウとネイルも絶句する。

その様子も無理は無い。

何せ、未だ先ほどの三人を取り巻いている竜巻は、その終わりを告げる事なく、目の前でその威力をまざまざと発揮してくれているのだから。中に取り込まれれば、抜け出すことは不可能だろう。

そして、俺の様子で声をかけてきたのが味方だと悟ったのか、糸が切れたように隣でふらりとよろめくそれを引き起こした女性。俺は慌ててその身を支える。

フワッ、と顔にかかった髪から、柔らかい良い香りが漂う。

「う、うめんなさい」

そう慌てていう彼女を何とか支えて、体勢を立て直すと、風が止んでいるのに気づく。

後には、^{スタン}気絶状態に陥っている三人の男。

おそらく男達とは相当のレベル差があったはずだが、それでも恐ろしいことにHPを瀕死状態まで追いやり、その上気絶状態まで追加されたらしい。

さすがにこんな犯罪に走ったプレイヤーを野放しにするわけにもいかない。

当分三人が起きそうにないのを見て、俺は、とりあえず状況を把握していないローザ達に事情を話すのだった。

八話（後書き）

仕事から帰るとPVが10000を超えてました。

正直こんなにご覧になって頂けていると思ってなかったのでびっくりです。本当に感謝です。

後回しにしていたこれまでのものの見直しと改稿をして見ました。

ではまた機会がありましたら。よろしくお願い致します。

九話

眼の前の三人を見て、俺は呟いた。

「さて、どうするか」

事情を理解したローザ達——説明を終えた後の、リュウとネイルの激昂も結構なものだったが、それよりも、普段より更に冷たくなったローザの視線と雰囲気のほうが怖かった——と俺は、取り敢えず装備を解除させ、『監獄の檻』という犯罪者プレイヤー用のアイテムで動きを封じた上で、その処遇について話していた。

今ネイルが、ローザに言われて団長のフェイルにフレンドメッセージ（ゲーム内でのメールのようなもの、連絡をとる際に使用できる）を飛ばして連絡をとっているらしい。

するとローザが不意に俺の隣にいた、襲われていた女性に目を向け、口を開く。

「初めまして、私はローザ、ギルド、銀の騎士団に所属しています。あちらの二人も同じ所属です。剣士の方がリュウ、魔術師がネイルです。失礼ですが、貴方のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ……すみません。私、助けていただいたのにお礼もまだで——私は、さ……あ、じゃなくて、トゥレーネ、です。えっと、職業は吟遊詩人です。このたびは、危ないところを助けに来ていただいて、本当にありがとうございました」

彼女が、そう言って深々と頭を下げる。

トゥレーネ、か。そういえば俺も説明や後始末を先にしていて、自己紹介すらしていなかった。

咄嗟に言いかけたのは、現実での名前だろう。もしかすると、MORPG自体、そこまで詳しくはないのかもしれない。

そういえば不思議だ。

ここから出られなくなつて、曲がりなりにも生活しているのに、俺も、他の人間も、このアバター名で通っていて、それを疑問に思つたことはなかった。

まだ、ここにいることを現実とは認められていない、ということなのだろうか。

「私たちは何もできていません。お礼なら、その方に」

俺が、トゥレーネの言葉にそんな事を考えていると、ローザがこちらを指さして告げる。

その言葉に、俺の方を見るトゥレーネ。

「あ……あの、ありがとうございます。えっと……」

そして、お礼をいって口ごもる。そういえばまだ名乗っていないかった。

「トールだ。……いや、そんなにかしまらなくていいよ。結果的にあいつらを捕らえたのはあんただからな。——綺麗な、歌だった」

そう自己紹介をして、思っていたことを告げる。

「ありがとうございます。これだけは、私の取り柄だから——トールさんも、助けてくれた時凄いかつこよかったです。」

その言葉に、につこりと微笑んでそんな事を言うトゥレーネ。すこし頬が赤らんでいるのが超絶的に可愛い。

……やばい、こういう直球派は苦手だ。

先ほどは混乱で、その意思の強い目しか印象に残っていなかったが、初めて、真正面からゆっくりと彼女を見る。

背はローザと同じ位、俺の肩に目の位置が来るほどだから、160cmは無い程度だろう。

ライトブラウンの大きな瞳に、淡く赤みがかった茶色の髪が似合っている。

ローザと同じく美人なのだが、雰囲気とあいまってそこに佇む様には、可憐、という形容詞が浮かぶ。

バーチャル リアル
仮想現実、現実を問わず、俺には縁がないような人種だ。

それにしても、フェイルにあつてから、美形に大勢出会う日なにとだ。

「生まれて初めてそんな事を言われるのがこんな状態とはね。で？ あんたはあれをどうしたい？」

俺はそう肩をすくめて言うと、アイテムの中でおとなしくしている（というか身動きはできないのだが……）三人に目を向けた。

言葉が少し邪険になったのは仕方がない。その裏技的な知識でこの二週間は前線にいるものの、基本性能モブキャラ（またの名を村人一号）を自負する俺の防衛本能がそうさせる。

その容姿で、裏方性質の俺にそんな直球で褒めてくるとは、俺がうっかり惚れてしまったらどうするんだ。

……そしてローザさん、こんな時だけ伶俐なお顔を優しく向けるのはやめてください。面白そうなものを見る表情もやめてください。

「……どうしましょう。本当なら警察とかのはずですけど、こういう場合はどうするのですか？」

トゥレーネは、少し嫌悪感を目に浮かべそちらを見た後、俺に視線を戻しそう言う。

（しまった、俺の馬鹿野郎。少し落ち着いてきたのに思い出させてどうする……）

自分の気の利かなさに後悔しつつも、ローザ達を見て俺は尋ねる。

「本来なら、こういうのは運営者側でアカウントを削除するものなんだが、今回は期待できない。銀の騎士団で引き取ってもらえないだろうか？」

「ええ、そのつもりです。その件で今団長に連絡をとっているのですが……」

ローザは俺の言葉に頷き、そしてネイルの方を見、それを受けてネイルが答えた。

「はい、今連絡が取れました。そういうプレイヤー用に場所を用意して受け入れるから、転移させてくれ、ということだそうです。僕も説明のため、一緒に戻ります」

さすがに早い対応だ、頼りになる。

そう思った俺は頭を下げ、頼む。

「すまないな、面倒事を押し付けて」

「いいえ、………では、その代わりに、私どもへこれから先も協力いただけるということでチャラ、ということにいたしました」
首を振った後、少し考えた後ローザはそういった。

「……元からそのつもりだったけれどさ、あくまで交換条件みたいに言うんだな」

俺がそう言い笑うと、

「それは当たり前だと思います。……犯罪者の男三匹と、見目麗しい歌姫。少々差がありすぎるとは思いませんか」

あれ？ さらつと言ったけれど、何か単位おかしくね？

まあいいか、きつとローザさんは怒らせてはいけない御人だ。

そう思った俺は、華麗にスルーしてもう一つの懸念を話す。

「……こちらの歌姫も、保護してあげたほうがいいと思うんだが」「もちろん、お望みとあらばいつでも御受け入れは致しますが…」

…」

「いや、そりゃギルドに入ったほうがいいだろう」

少し言葉を濁したローザに、俺は言った。

「フェイルの直々の誘いを断った方のセリフとは思えませんね…」

…それに」

「それに……？」

「そちらは、銀の騎士団に入らなくとも、もう他に騎士^{ナイト}の方がいらつしやるようですので」

そのローザのいたずらっぽい笑みと、それまでの話を黙って聞きながらじつと俺の方を見つめてくるトゥレーネを見比べて、俺は頭をかく。

だから、俺は騎士でもなく（むしろ盗賊だし）、一般^{モブ}人なんだって……

そんな俺を見て、さらに可笑しそうに笑うローザ。

お、この人が笑うところ初めて見た、レアだな。笑われてるのは俺だけ……

「……………何だよ？」

「……………いえ……………お言葉ですがわびしい人生を歩んでらっしゃったのですね」

やかましい、勝手に人の心を読んで同情するな。

しかも決め付けるな。

……………ええ、そりゃ、こんな美人になつかれた経験は皆無だよ。

って、リュウさんまでニヤニヤしてるし、あなたが静かに笑うのは怖いって、旦那。

「あの、ツールさんはギルドの人ではないんですか？　だったら私も……………まだ、お礼も全然できていませんし、それに、私戦いとかに慣れていないんで、厚かましいですけど教えて欲しいというか……………」

そして、トゥレーネが空気を読んでか読まずか止めをさしてくる。

……………ああもう、わかったよ。覚悟決めればいいんだろう？

「わかったよ、あんなことがあった後、一人で放り出すわけにもいけないしな、とりあえずトゥレーネはさっきのを見るかぎり戦力になりそうだし。自分の戦い方を覚えて、身を守るようになるま

では手伝ってもらおう。フレンドリストの登録、わかるか？」

俺は半ばヤケにそう言っで、自分をメッセージでいつでも呼び出せるよう、トゥレーネをリストに登録し、パーティに迎え入れる。

……………だから、そんな嬉しそうに笑わないでほしい、耐性無いんだってば。

その様子を見て、三人を転送させたネイルまで、こちらを見て笑っている。

お前は笑うな、残念な二枚目のくせに。

「……………では、名残惜しいが僕は戻るよ。皆はどうするんだい？」

そんな声が聞こえたわけでもあるまいが、ネイルが俺達に向かってそう聞いてくる。

「そういえば、そうだったか、いい時間ではあるな」
俺は当初の目的を思い出し、そう呟く。

そして、トゥレーネ達を見て言った。

「トゥレーネ、パーティ結成の記念だ、いいものを見せてあげよう。お二人は、どうする、すぐそこだしせっかくだ、来るか？」

「私達がいて、お邪魔じゃないのかしら？」

……………だから、もういぢめないで下さい。

少し悲しい顔をした俺の肩を、リュウが叩いて言う。

「男ならしゃんとしろ、しゃんと。……………で？ どこにいきたい

んだ？」

心強い、らしい言葉と、行く気満々な言葉が帰ってきた。まだこの方がいい。

「こつちだ。もう近いはずだから」

何故こうなった。俺はそんな事を思いながら、ようやく目的地に向けて本格的に足を進めた。

十話

先ほどの戦闘の会った場所から、森の中を歩いて五分程、俺は、トウレーネ、ローザ、リュウの四人でパーティーを組み、当初の目的地にやってきていた。

トウレーネは、先程からローザと話しながらも、俺の方をチラチラと見ている。

懐く、という言葉が正確なものかは分からないが、どうも、あの状況が彼女の中で美化された結果……俺にとって居心地の悪いこの状況になっただけらしい。

素直な美人に目を向けられて、生意気に居心地が悪いとか言うのも何様だと思われるかもしれない。

しかし、思い出してくれないか？——俺は、『臆病者』『優柔不断』、そして、『裏方』だ。……いや、言っていて哀しくなる、やはり忘れてくれ。

「……ここは？ ただの行き止まりのようですが、なにかあるのですか？」

ローザが、戸惑ったように尋ねてくる。

トウレーネやリュウも、あたりを見渡しているが、不思議そうな表情を浮かべている。

「何も無いよ……ただ、これから起こることを、たまたま知っていてな。三人とも、少しでも時間をくれないか？　もうすぐだ」
俺は少し苦笑して、答える。そう、もうすぐ、日が暮れる。

ローザの感想も無理はない。

ここは、『深淵の森』の奥にある、このフィールドにおける最終地点の洞窟から、少し南に外れた場所。

アイテムがあるわけでもなければ、モンスターもない。

従来のRPGで、画面の中のアバターを操作する場合であれば、

「おい、行き止まりなのに宝箱も何も無いのかよ！」

と画面に突っ込んで——（声に出す、出さないは、皆様の自由となっております）——来た道を戻るだけの場所。

他のゲームで、そんな経験が実際にあった俺が、このVRの世界バーチャル・リアリティの構築に携わる上で、それでも敢えてこだわったもの。

（……何とか間に合ったな）

俺は内心でそう思い、眼の前に広がる、透明な深い闇のような泉を目をやる。

『深淵の森』

言葉の通り、樹々に頭上を閉ざされた、闇深い森。

正直、俺が言うのも何だが、RPGのダンジョンによくある設定だ。

—。少しだけ、ほんの少しだけ違うのが、これから起こるだろうこと。

「……………始まった」

俺のその言葉に、三人がこちらを見る。

「……………これが見たくて、ここに来たんだ。この状況で、この先、きついことがもつと起こるだろう……………だからこそ、この世界に少しは綺麗なものもあるって、見たかったんだ」

そんな三人に、俺は呟く。

変化の兆しが訪れはじめた、ただのフィールドの一部である、森に湧き出す泉のグラフィックを、静かに指し示しながら。

【B a b y l o n】では、現実と同様に時間が流れる。

何も変わらず、太陽は東から昇り、西へと沈んでいく。

実際この世界を球体につっているわけでは無いが、全ての『言霊』が開放され、全フィールドに行くことが出来るようになると、『バベル』を出て一定方向に真っ直ぐ進み続けられれば、街の逆側にたどり着くようになっていく。

それで、俺が考えたのが、この、目の前の情景。

とはいえ、俺は仕様とデザインのパーツを色々とまとめて、お願いしただけ。実際に見るのは、この中でと決めていた。

タバコ・カートンの報酬で、俺の妄想の実現に協力してくれた、グラフィックデザイナーの先輩には感謝の念に耐えない。

頭上には、太陽の光をほとんど遮かくっている樹々。

ここは、この森の南西の端……………少し戻った先の樹々のトンネルを西にくぐると、そこにはまだ開放されていないエリア、『熱砂の砂

漠』が広がっている。北には洞窟のある山が莊嚴に聳え立ち、東にはバベルへと続く道が存在する、深き森の名も無き場所。

太陽がその役目を終え、紅く輝きながら眠りにつく時間。

その、長い一日の、限られた数分間、ある一定の角度からのみ、木漏れ日が挿し込む場所がある。

計算に計算を重ね、実現した場所。

闇深く、閉ざされていた泉を、夕日の橙色が照らし始める。

「……………これは、すごいもんだな」

「綺麗……………」

リュウと、ローザの声が聞こえる。

その光りに照らされた先には、その本来の姿を現した泉。

線状に漏れる光が、配置された泉の中にある水晶に乱反射し、色とりどりのハーモニーを奏でる。

そんな、光の競演が織り成す幻想的な光景の中、不意に歌声が響く。

呪文の詠唱ではない、純粹な歌。

息を止めたように、光景に見入っていたトゥレーネから、漏れ聞こえる声。

それは、少しづつ大きく、光の波に乗るように奏でられていく。演奏も何もない、ただただ透明な歌声。

だが、俺達はそれをただ、自然と静かに聴き始める。

——夢を求めて、ここに来た。

——希望^{おもい}を胸に、ここに来た。

——夢は現^{うつし}と混ざり合い、

——絶望^{おもい}と共に、ここに居た。

——光は安寧^{やすらひ}、人は言う。

——闇は混沌^{だわめき}、人は言う。

——そして私は、知りました。

——優しい闇を、知りました。

——闇にその身を寄り添えて、

——私の心はさざめいて、

——そして私は歩き出す。

——夢の終わりに、歩き出す。

そして、聞き終わると共に、体温が上昇するのが解った。

(……………)

そんな俺の内心とは関係なく、静かに奏でる声の終わりと共に、
光の競演もまた、終わる。

後には、沈黙と、静かな闇が広がるのみ。

パチパチパチ、と拍手が鳴る。

その音にはつとして、俺も、手を鳴らす。

ローザが、そんな俺の方を見て、微笑^{わらい}っている。

俺は今、どんな表情でいるのだろうか。

向けられるのは、とても、綺麗な微笑。
脳裏を過^よるのは、とても、嫌な予感。

そして、微笑が極上の笑顔に変わり、淡々と告げられる。

「……やっぱり私達、お邪魔だったでしょうか？」

……… お願いです。これ以上いぢめないで下さい。

情けない顔をしていたのだろう、他の三人がそれを見て笑う。

そして、そのうちに俺もつられて笑い出す。

ここにきて初めてかもしれない、こうして苦笑でもなく、心から笑うのは。

そうしているうちに、本格的に日が沈み始める。

そろそろ、宿に戻る時間だ。今日は、色々なことがありすぎた一日だった。

「本当は、色々聞きたいこともあるのですが、今日はやめておきます。……いいものを、見せて頂きました。また、次も機会がありましたら」

「借りができたな、何かあったら、いつでも言ってこいよ」

そう言ってくる二人に、俺も頷いた。

「いや、一人で見ようと思ってたけれど、大勢で見るのも、悪くないな。……いい歌も、聞けたしな」

そして後半は、照れくさいながらも、トゥレーネに告げる。

一人であちこちのダンジョンを飛び回って過ごした二週間とは違う、不思議な感覚。

【B a b y l o n】にログインして15日後、その夜宿に戻った俺は、久しぶりに深い眠りについた。

簡易登場人物パラメータ

【トール Lv・24】

職種：盗賊^{シーフ}

主要武器：双剣

属性：闇

性質：臆病者・優柔不断・裏方

【トウレーネ L V・15】

職種：吟遊詩人^{バード}

主要武具：棍^{こん}

属性：風

性質：純真・温厚・歌姫

【ローザ L V・27】

主要武具：細剣^{レイピア}

職種：戦士^{ウォリアー}

属性：霧（水）

性質：冷静・慎重・女帝

【リュウ L V・26】

主要武具：大剣^{グラン・ソード}

職種：戦士^{ウォリアー}

属性：地

性質：豪胆、勇猛、ギャンブライ

十話（後書き）

眠い中勢いで書き上げたけど、少し無理くりになっちゃったかも。
とりあえず投稿、してみます。

10/22 12:00 起床後、誤字修正

正直関係するといえばするししないといえませんが、L
Vとかパラメータの設定どうしよう、とか。多分数字書いてもしよ
うがないんで、STRとかINTとかは必要な場面とかを除いて省
かせて頂きますが、ご了承ください。

後、作者の甘えなんですけど、もしも性質で良い単語、ご存知でし
たら教えて頂けたら幸いです。思ってたなかったキャラが出現した時
に地味に考えるの楽しいんですけど、時間がかかりそうなんで…
…あ、『地味』もありだな。うん。

一話

【B a b y l o n ― チュートリアル開始 16日目】

窓から差し込む光と共に、俺は眠りから覚め、目を開けた。

不思議なものだ、現実には、起きるためには、目覚まし時計が必須だったのに（むしろそれでも二度寝デフォルト……）、ここに来てからは、朝日が差し込むと共に自然と目が覚めるのだから。

この二週間で慣れた、木造の一室。

俺は、オブジェクト化したままの双剣を手に取り、いつものように食堂へと向かう。

ここは、始まりの街『バベル』西部にある名も無き宿屋の一つだ。恰幅の良いおばさんのNPCが経営している（基本AIが『アル』に影響されているようで、結構会話が成立するのが驚きだった）、朝飯が美味しい俺の住^{すみか}処。

他はレンガ造りのモダンな雰囲気であるのに対して、ここは木造で大通りからも外れた場所にあるため、俺以外にはここを使っている人間は今のところいない。

そもそも、200万人以上が同時にログインするのもザラである世界だ。

現在ログインしている15000人程度なら、この街だけでも余裕がありすぎる。

しかし、人気があるうがなかるうが、目の前にあるのはふかふか

のベッド、清潔なシーツ、そして朝日の挿し込む東南向きの窓。

……俺の現実の家である、アパートの一室等よりも健康的で快適なのは間違いない。

いまさらだが、この世界について、説明しておこう。

この世界には、フィールドからフィールドの間に、町や村が点在している。

それぞれに和洋中の特徴があり、この『バベル』の街並みは西洋風で表現されている。

そう、西洋風なのだ。

そんな中で、俺が、大通りから離れた便利でも無いこの宿に滞在することを決めたのは、今俺の目の前で落ち着く香りと共に湯気を立てている、それにあつた。

白いご飯に味噌汁。そして、絶妙な塩加減で調理された、いい焼き色の付いた赤身の鮭。

やっぱり朝は味噌汁だろう？ ……現実ではカロリーメイトが多かったが。

ところで、基本的にNPCの作成する料理は、いふなれば普通である。

まずくはない、しかしわざわざ通^{かよ}う程でもない。そんなところだ。近頃は、『料理人』であるプレイヤーの店なども出てきたようだが、まだまだLvが低いためかそこそこのレベルでしか無い。

例えば、俺がフェイルと会った喫茶店は、実はプレイヤーの経営する店だが、そこはコーヒーに特化しており、他のケーキ等はあまり美味しくはない。……見た目はいいんだよ？ 見た目はね……。喫茶店だからコーヒーが美味しければいいとも言えるが。

しかし、しかしだ。

この宿は西洋風である『バベル』の中で、数少ない和風の食事が出る宿。

しかも、美味しいのだ。昼や夜は別の場所で食べたりするが、俺はまだここ以上のものを食べたことはない。

もちろん、そんな例外なのだから、その分不都合もある。

……俺はここに来てから二週間、ずっとこのメニューを食べ続けている。

何故か？

それは、このお品書きを見てもらえたら理解してもらえらるだろう。

< お品書き >

朝の部

焼き鮭定食（味噌汁・卵付き）・・・50^{ナール}。宿泊の方は無料。

昼の部

焼き鮭定食（味噌汁付き・漬物付き）・・・50^{ナール}。

夜の部

焼き鮭定食（味噌汁付き・大根おろし・漬物付き）・・・50^{ナール}。
n r。

烏龍茶・・・10^{ナール} n r

ビール・・・30^{ナール} n r

白雪の酒・・・100^{ナール} n r

攻撃力アップ効果 稀にステイ

タス異常・混乱付加

わかったか？ …… いや、感想はいらない。

きつと、ありとあらゆるツツコミはこの二週間で俺が終えている
(果たして誰だ、こんな宿を作ったのは……)。

それでも美味い。しかも和食。俺は、これを越える『料理人』プレイヤーが出るまでは、ここで食べ続けるだろう。

…………… 早く出てきてくれないだろうか？ 頑張ろうよ生産職の皆さん。

コホン。

ところで、初めてご登場願ったが、ここでの通貨は共通でnr^{ナール}という。

基本的には、1nr = 10円で考えてくれればいいと思う。

ちなみにだが、モンスターを倒してもお金は得られない。

代わりに落とす^{ドロップする}、素材アイテムなどを売却することで、日々の収入を得られることになっている。

これが曲者で、プレイヤーのキャラクターのみならず、NPC^{ノン・プレイヤー・キャラクター}ですら値切ってくる(誰だよこんな仕様考えた奴……)。

しかも、全体での流通により相場が変わるため、例えば季節によって素材の購入金額が変わる。

現在の俺と言えば、情報収集のため(本当だぞ？)、雑魚モン

スターの落とすレアアイテムなども効率よく集めることができたのと、『言霊』の情報をローザに買い取ってもらったため、結構裕福である。

——せっかくなので、『言霊』についても少し言及しておこうか。

『バベルの塔』の中は、迷宮型のダンジョンとなっている。

広さとしては、500m四方のダンジョンが上空まで100層積み重なっている積層型。上空から『バベル』を見たならば、綺麗な四角形が二つ重なっているように見えるだろう。

1階層ごとに、次の階層へ至る為の広場には、一体の『ガーディアン守護獣』、つまりボスモンスターが存在する。そして、厄介極まりないことに（すいません考えたの俺達です）、一定期間でその『ガーディアン守護獣』は復活し、再度倒さなければ広場を通ることはできなくなる。

しかし、ただ一つだけ、各階層の広場にある『言霊』を開放することで、『ガーディアン守護獣』の復活もなくなり、街にある『マルドウク神殿』から、塔の開放された広場に転移することが出来るようになる。

ちなみに、これまためんど……いや、凝った造りになっており、『言霊』の出現場所はある程度以上には決められていない。

何故ならば、それはモンスターに宿っているからである。

モンスターを倒せば、『言霊』の封じられた水晶がドロップし、その水晶を塔の内部の広場にある対応する窪みにはめれば、開放されることになるのだが、このモンスターがまた曲者なのだ。

一度誰かがマークすれば、居場所が判明するものの、特殊な技能スキルをもっているものや、やたらと逃げ足が早いものなど、一筋縄ではいかないモンスターが、決められた範囲のフィールドやダンジョンのどこかに湧出する。ポップ

……一応言っておくが、このアルゴリズムを考えたのは俺じゃないからな。

これは、難易度に文句が多いユーザーのスレとか見てほくそ笑むような、額に『ドS』って書いてそうな先輩ひとの作品だ。

ちなみに俺も全容は把握していない、なぜなら、俺ももちろん『Babylon』が完成したらやりますよ、って言ったらさ、「じゃあお前は知らなくていい」、って言われた……あの人本物なんだよ。自分の仕事量増やしてまで、ゲームの中の俺に必死で『言霊』探させたいんだよ……。

以上だ。わかってもらえただろうか？ 思考がただ漏れているのはいつものことだと諦めてくれ。

「ふう、やはり朝飯は味噌汁がいいな」

俺が満足してそう呟き、いつものようにいつもの朝食を平らげた時だった。

ガチャ、と木の扉が開き、宿に人影が入ってくる。

伶俐かつクールな眼差しに似合う眼鏡。

笑うと怖い、とても珍しい女性が、そこにいた。

もちろん、銀の騎士団団長補佐、ローザその人である。ギルドマスター

そういえば先日別れるとき、トゥレーネの宿などについても任せきりにしたのだったが、「明日、何点かお伺い出来なかったお話があるのですが、大丈夫でしょうか」、と言われたのだった。

こちらに気づき、頭を下げ、近づいてくる。

何故か、自然と背筋が伸びる俺。

…………… 出会って二日目にして、既に苦手意識が芽生えた俺は、今日の平穏な朝は短かったな、などと思いつながら、立ち上がった。

一話（後書き）

今回は短めですみません。

生みの苦しみ < 読む楽しみ。

はい、今日は他の小説読んで、書く時間が短かった作者です。

前回で区切れたかは怪しいですが、今回からは二章ということになります。

話が進むかとおもいきや……お品書きにあつたので、二章の第一話はお金の単位とか、諸々の説明にあててしまいました。

通貨単位、『ナール』はイラクのディナールからとってきました。

何でイラク？というと、バベルの塔のモデルとして最も有名なのは、

「ウルのジッグラト」というものだそうです。

ウルは、イラクでバグダッドからクウェート方面に350kmほどの場所にあります。

ちなみに、バベルの塔のあったと言われるメソポタミアの古代都市「バビロン」。古代メソポタミアとは、主にティグリス川とユーフラテス川に挟まれた地帯で、イラクの殆どがその地域に該当します。

そんな感じで通貨を決めてみました。

読んでいただいてありがとうございます。

二話（前書き）

10/23 13:40 ローザとの会話内容を改稿しました。

二話

俺の周りの風景が、どんどん流れていく。

今俺は、過去最高の速度で走っていることだろう。きっとオリンピック選手も真つ青だ。

ここは、『バベル』の街から南に広がるフィールド、『紅の平原』。

視界を流れるのは、赤土が延々と広がる平原とそこにそびえるむき出しの岩肌、それをとどころに覆う、もこもこした形状の緑色の植物たち。

高さにして、俺の腰ほどまではあるだろうか、丸い形状は、とても柔らかそうだ。

もっとも、実際に近くまで行けばわかるが、表面は細かく鋭利な棘が並んでいるため、取り囲まれ押しつぶされた日には、一瞬でHPが削られてしまうだろうが。

しかし、遠目から見るそれが立ち並ぶ光景は、正直癒されなくもない。

……………今俺が、まさにその植物型のモンスター、『モコLv18』の群れに追いかけているところであれば、だが。

（なんだよこの俺の全力に付いてくるモンスターは！？　こんな仕様に作った覚えはないぞ…………？）

俺は涙目で毒づきながら、必死に足を動かす。

今にも、俺の背後に迫ろうとしている『モコ』。

元々は、非アクティブ系——（こちらから攻撃を加えない限りは何もしてこない、その代わりなかなかレベルが高く強い）——の植物モンスターのはずである。もちろん、植物だけあり、そこまで行動速度も早くはない。

そんなモンスターが、何故こうして、基本職の中で最速を誇る盗賊である俺のスピードに付いてきているのか、それは、その群れの中心にいる一際大きな『モコ』の額に、^{ひときわ}『言霊』を宿した水晶が埋め込まれているからである。

そう、以前に話したよな……俺の開発者の先輩に、『ドS』の人がいるって。

——つまり、そういう事だ。

（……………動かないことが条件で強く設定したモンスターに、スピードを加えてんじゃねえ！！！！）

そんな心の叫びは、届くはずもない。

届いたとしても、あの人はこう言うだろう。

「……………うん、頑張れ」

それも、とても良い笑みで。

何故こうなった。

俺は必死で足を動かし、走り続ける機械と化しながら、これまで

を思い出す。

そう、俺は甘く見ていた……あの、クールな才媛を。

「……ここは、良い喫茶店ですね」

ローザが、店内を見渡しながら、そう呟く。

俺は、落ち着いた場所で話をしたいというローザを連れて、フェイルと出会った店に来ていた。

NPCより喋らないプレイヤーである、そのマスターは、無言でいつも通りの美味しいコーヒーを入れてくれる。

………これで、ゲーム内にデフォルトで煙草タバコがあれば完璧なのだが、まだ無い。

まだ、というのは『錬金術師アルケミスト』のプレイヤーが、今開発中との情報掲示板（ウインドウから確認できる、ゲーム内のコミュニティだ）が上がっていたのを昨日見たからだ。

その名も、スレッド―【素材持ち禁断症状者求ム】。

これまでは余裕がなくてみていなかったが、結構あちこちで普通に生活するための話し合いもあるらしい。

先日のような人間もいるものの、基本的には皆、前向きになろうとしているようだ。

それとも、忘れるためにいつも通りを貫こうとしているのか。

生産職でも、戦闘はできる。何故か『料理人』は結構強くなるこ

とが可能で、下手したら盗賊などより肉弾戦に強かったりする。まあ、戦闘用技能アクティブスキルが無いから、本気でやれば別だが。

そんな中、『錬金術師アルケミスト』は戦闘に向いていない。その代わりといっでは何だが、この世界に存在しないもの——（理論や構築の完成などに時間と労力、それにセンスが必要となるが）——を、作成することが可能となっている。

例えば、それこそ煙草タバコとかな。

なので、その供給を欲する需要者達が、素材を集めて提供する事になる。

もちろん、俺も参加しようと思っている。

そんな事情もあり、俺は早く行動したいのだが、ローザの話とは何だろうか？

そんな事を思っていると、ローザが話を切り出してきた。

「何点か、お願いとご報告が」

「昨日のことについてか？」

俺は、そう尋ねる。

「……ええ、それもあります」 それにそう頷いて、ローザは話を続けた。

「まずは、先日捕らえたものの処遇についてを、彼等は、私たちのギルドに加えて、他の大手ギルドである『探求者の集い』『円環の理』も含めた3つのギルドで管理する、『牢獄』に入れることになりました。ここでは、被害者の許しがなければ、解放はしません」

「……成程。つまり、『B a b y l o n』の三大ギルドで、警察の役割を果たしてくれると、そういうわけか？」

「はい、この状況で早急に取れる対応としては、最善かと。元々、ご存知のようにMMOでは、プレイヤー同士の問題は、できるだけ当事者たちで解決するのが求められていましたから。もちろん、権力の集中を避けるため、平等の立場として、共同で管理を行うことに決定しています。また、無力化した犯罪者プレイヤーを『牢獄』に転送するための道具も、現在ギルド内の『錬金術師』アルケミスト達が作成中です」

ローザの説明に状況を把握し、俺は頷いた。

他の二大ギルドについては、あまり詳しくはないが、悪い噂も聞かないし、何よりフェイルとローザがいるのだ——（いざとなったら強面のリュウもいるし）——きつとうまくやってくれるだろう。

「ゴホッ！」

(…………絶対今の、タイミング見計らって言いやがった)

「……冗談ですよ」

そんな俺に澄ました顔を向けながら、ローザはそう言った。明らかに楽しんでいる。皆さん、ここにいちめっ子がいます（涙）

「ナンテ、カラダニワルイジョウダンダ」

「何故片言なにゆえなのですか？」

（あんたが動揺させるからだよ！　っていうかわかって言ってるだろ絶対）

俺は心の中で、表情を変えずさらっと笑えない冗談を言うローザに突っ込む。

これ以上言葉に出さないのは、ほら、解るだろう？　どうせ、そこからまたいちめ……いや、やめよう。

長いものには巻かれる。強いものには逆らわない。

そう、それが平和に過ごす方法だ！

この女性ひとに逆らうくらいなら、一人でモンスターの群れに突っ込んだほうがまだましな気がする。もちろん特攻なんてしたくはないけど。

俺が人生の何たるかを残念な方向に悟っていると、ローザが更に続ける。

「後、これが最後です。確認なのですが、ツールさんが持っている情報を共有するというのは、フェイルにもおっしゃっていたとお聞きしています」

「ああ、もちろんだ」

最初の二つのついでのように聞いてくるローザに、俺は頷いてみせる。

情報の独占等する気もないし、あなたに逆らうなんてとんでも…
いえ、何でもありません。

「……その言葉に、嘘はありませんよね？」

「？ ああ、くどいぞ？」

念を押すローザに、俺は疑問に覚えつつも、そう答える。
すると、ローザの目が、にこやかに微笑の形をとった。

(……………！)

背筋に冷たいものが走る。……あれは、獲物が網にかかったのを
確信した目だ。

そして、身構える俺に、ローザはさくつと爆弾を投下する。

「……では、お言葉に甘えてお伺いしたいのですが——現在
の状況を、貴方の同僚が解決する可能性は、どのくらい残されてい
ますか？」

「……………！」

油断した後に警戒して、その警戒心すらあっさり乗り越えられた
俺の顔に、どうしようもなく狼狽ろはうたいが走る。

「……………どうして？」

何とか俺は声を絞り出した。

そして、それを見てローザは、今度は形だけの微笑せうしほではなく、本
当にニツコリと微笑み、俺に止めをさしてくれた。

「確信したのは、たった今です。 フェイルもそうなんですが、男の人はどうしてそんなに表情が出やすいんでしょうか」

その言葉に、簡単に引っかかり過ぎではないかという哀れみすら乗っているように感じ、俺は内心で呻く。

…………… ええ、腹芸なんてできない、素直ないい子だと言われて
すくすく育ちましたとも。 168cmだけだな…………… ぐつ。

焦って変なことを考えた上に、自爆思考を行なっている俺に、口
ーザは淡々と告げていく。

「…………… 私はMMO通信の愛読者でした。 もちろん、【Baby
on】紹介の談話記事も読んでいます。 内容は、ご存知ですよね？」

（坂上さんの記事か、あれで相当いじられたんだっけ？）
そう思い当たった俺は、黙って頷いた。

「私が、今の状況に陥った際にまず思い出したのが、そのことで
す。 元々、このようなゲームの開発に携わる人も、同じようにMM
ORPGをプレイするということが、当たり前前の事なのに、私には
新鮮に感じられて、印象に残っていた…………… そして、その人ならば
何らかのアクションを起こすのではないかと、そう思いました」

「……………」

「でも、そんな行動を取る人間はおらず、貴方は全く目立ってい

なかった。もしかしたら、そんな人間はいないのではないか……開
発者は今回のことを予期していたのではないか、とまで考えていま
した」

……………地味な裏方で申し訳ない。

「ただ、ある時あなたに注意を惹かれる事があった」

「……………どこでだ。『言霊』の情報を渡した時か？」

「それは、空想が、懸念に変わった時です。……貴方は、他のプ
レイヤーにモンスターの情報を紛れ込ませていましたね？ 目立た
ず、でも目立つ人間の言葉を補足するなどして」

俺はただローザの言葉を待つ。

そんな俺を見て、ローザは続けた。

「あるとき、私の情報に貴方は書き加えた。そこであなたの名前
を知りました。私が書いたのは『深淵の森』の『トレント』という
植物モンスターに付いての状態異常効果について……………貴方が書
いたのは、そのモンスターに『光』属性の攻撃を加えると、成長し
てしまうという注意点」

確かに、そんなこともあったような気がする。

俺が情報を公開し始めて少し経った頃だ。

「その時は、まだ何も思いませんでした。ただ、フェイルが『光』
属性のため、伝えておこうと記憶にとどめただけです」

「ご存知のように、このゲーム内での掲示板には、中傷行為を減らす狙いでもあるのか、匿名ではなく、必ずアバター名が表示されますね？ 私は、その後もあなたの名前を何度か見ました。正確な情報をもたらす情報屋プレイヤー！。そんな風に考えていました」

「そして、貴方が銀の騎士団に、『言霊』の位置の情報を持って来ました……………その時、貴方が『闇』属性だと知った。それでもまだ、誰かとパーティを組んでいるんだと思いました」

それはよく覚えている。

必要な素材の話題と関連から、属性を話したのだ。

「……………ただ、貴方はその後のフェイルの誘いを断った。——ソロでやると、団体行動が苦手だから誰とも組んでいないと、たしかそのような回答だと聞いています」

「ああ、その通りだ」

「では、何故ソロで活動している『闇』属性のあなたが、他の属性、それも貴方とは反属性となる——（光と闇のように属性にも相性が存在する）——攻撃を受けたモンスターの影響を知っているのでしょうか？」

「……………」

俺は、その言葉に黙りこむ。しまった、そんなところで……………そう思うがもう遅い。

「それで貴方の提供している情報を調べました……………少しだけ、情報の質に反して収集スピードが早すぎましたね……………おそらく、情報が足りないことでの『死亡』を抑えるためだったのでしょうか、その事から、貴方が敵ではないと、巻き込まれたうちの一人なのだ

と判断したのですが」

そこで、ローザが一旦言葉を止める。

「……………そして、懸念が予想に変わったのは、先日の一件——リユウなどは、いい場所見つけやがったな、と言っておりましたが、あの場所、元から知っていましたね？」

「……………本当は、一人で行くつもりだったんだが、あの日の俺は少し浮かれていてな。他の人に見せるのも、いいんじゃないかと思った。どうするんだ？ この事を公開するか？」

そんな俺の言葉に、ローザは首を振る。

「いいえ、今回は確認をしたかっただけです。……………個人的に、隠しておきたい気持ちも理解できますし、何より公開したところで何の利益もありませんからね。必要な人物にはともかく、口外する気はありません」

そこまで言われた時点で、俺に選択肢はなかった。
静かに認める。

「あんたの思っている通りだよ。まずは、最初の質問に答える……………おそらくだが、後五年は無理だ」

「……………五年、ですか？」

「『アル』はな、本当に優秀なんだ。さらに言えば学習もするし成長もする。そして、この【Baby Ion】の根幹部分に関わっている『アル』を何とかするためには、同等のAIじゃ駄目なんだ。性能面で、遙かに超えたスペックでないと、な。……………どんなに早くても、そこまでのものが開発されるまで、五年はかかるだろう」

「成程、では、例えばその五年間、無理をせずここで生活するというのはどうでしょうか？」

「……それも、俺個人としてはおすすめしない。言っただろう？ 最短で五年だ。もしかしたら十年かもしれない、そんな時は、来ないかもしれない。それだけの時間、現実から離れて、本当に戻れると思うか？ 社会的にも、肉体的にも……精神的にもだ」

覚悟を決めた——いや、決めさせられた俺は、ローザの質問に淡々と答えていく。それは、俺が二週間の間、ずっと考えていたことだったから。

「わかりました。では、貴方の持っている情報は、どんなものがあるのですか？」

「雑魚モンスターの仕様と、ある程度の技能取得イベント……後は、昨日みたいな、攻略には関係のないものばかりだ」

ローザの次の質問に、俺は自嘲気味に答える。

「……成程、わかりました。それは、何かあればその度に聞くとしまして。では、そんな貴方に手伝っていただきたいことがあります」

役に立たなくてすまない……そんな俺の内心をわかっていそうなのに、ローザは気にした様子もなく、俺に言う。

「……何でも言ってくれ、できることは、やるつもりだ」

「『言霊』のモンスターの居場所は、おかげで判明しました。ただ、問題が一つ生じておりまして」

「問題が？ 何だ？」

殊勝にそういう俺を見て、真顔でローザが説明する。

「どうも、そのモンスターが手強いようでして、敏捷に優れたプレイヤーが必要なのです、あなたのような。……本来は壁役を犠牲

にしてクリアするのかもしれませんが、チュートリアルとはいえ——
——いいえ、だからこそ、誰も『死亡』を出さずに倒したいのです」

「……………わかった、俺は、何をすればいい」

先ほどから思ってはいるが、正直ローザには脱帽している。彼女に逆らうくらいなら、モンスターの中に放り出されたほうがまだと、本気で思っていた。

……………この時まででは。

ローザが、その返答を聞いてニツコリと笑った。いつもあの笑みだ。

もはや条件反射的に、俺は身構える。

「トールさんには、囷として、モンスターの中に突っ込んでいただき、指定の地点まで引き寄せていただきます。——もちろん逃げるルートは確保いたしますし、計算ではトールさんのスピードなら、大丈夫、のはずです」

あっさり警戒など乗り越えられる。

って学習しろよ俺。さっきと同じパターンじゃねーか……

といいますか、あの……比喻でなく、本当にモンスターの中に突っ込めと？ さっきマシとか言ってごめんなさい。 覚悟はあっさり崩れ、情けない目で見える俺に対して、ローザは笑みを絶やさない。

これが噂の『二重の束縛』
ダブル・バインド

前門の虎、後門の狼、というやつですね。わかります。

そして数秒後、俺は力無く頷いた。

そして今、俺は走っている。

背後には結構距離を詰められている気配がプンプンしている。

はつきり言つて、怖い。

俺のこの何ともいえない感情は、モンスターを作った先輩に向け
ればいいのか、状況を作ったローザに向ければいいのか、はたまた
こんな世界に追い込んだ『アル』に向ければいいのか。

とりあえずわかっていることは、誰であれ言い負かされて終わる
だろう、ということ。

俺に出来ることは、この先の地点まで『モコ』達を誘導すること
だ、ということである。

誰か、誰か俺に癒しを……………『モコ』がスピードを上げる。

—— お前じゃねーよ、勝手に心読んで反応するんじゃない！

半ば涙目になりながら、俺は走り続ける。

何とか作戦が成功した後、その日一日は、ぐったりと何も出来な
かったのは言うまでもない。

二話（後書き）

はい、今回の主役はローザさん。
取り敢えず開発者バレしました。

そして、隠れ主役は『モコ』です。

僕の描写では、おそらく表現しきれないため、参考画像はこちら
の一枚目の写真ですね。

<http://labaq.com/archives/51697856.html>

こいつがもうちよいでかくなって、高速で追いかけてくるところ
を想像してみましょう。しかも追いつかれたらアウト……その時ト
ールの気持ちがわかって頂けたら、幸いです。

トール、生粋の裏方でありながら、主役級美女が裏で動くのを好
むことで表にはじき出される男……

では、予約投稿して眠りにつきます。誤字脱字は起きたら見ます。
。

読んでいただき、ありがとうございました。

ご指摘を頂き、設定書き追記

後三話後位に登場します（予定は未定）、何か急に思いついたりし
なければ

この世界の属性

『反属性』

火 水
地 風
光 闇
無

アイテムにも様々なもの（回復役や投げつける攻撃アイテムから、設置型の罠など）があり、回復役などは属性なし、ダメージ判定を持つものは各属性をもちます。

それが自分の属性であれば効果が二倍、反属性であれば使用できない、または特定のアイテムは使用出来ても効果が半減します。

なので、『闇』属性のツールは『光』属性の攻撃はできません。でも、公開しちゃいました、迂闊。

しかし裏方はその人生経験から、誰かが自分のことを注意して見ているとは想像しないのです。なぜなら目立たないからこそその裏方。

無属性プレイヤーは、どの属性アイテムでも使えます。また、自分の属性関係なく何でもアイテムを使える職種・性質もある予定、どう出すかは微妙。

ちなみに言うと、生産職は、全て無属性となります。

以上、おいおい色々情報出てきます。

閑話 ある開発者の一幕（前書き）

お陰様で、10万PVを超えていました。

感謝の念に絶えません。

ちなみに、少しローザとのやり取りに違和感との感想をいただき、二章二話、ローザとの会話を修正致しましたので、ご覧になっていただければ幸いです。

今回は閑話です。

言うなれば三人称と、ゲーム外の世界を描く練習ですが。よろしければご覧になって下さい。

本編続きは書け次第今晚、無理なら明晩投稿いたします。

閑話 ある開発者の一幕

〔西暦2027年10月24日（日） ある開発者の休日〕

事件から、二週間が経過していた。

それが世間に発表されてからは、激動の一言に尽きる。

広報の電話は、今も鳴りっぱなしだそうだ。

マスコミは連日、無責任な報道を続けている。

V R M M Oとは何か、原因は何か、ネット社会に生きる若者の心の問題に至るまで、自称専門家が語っていた。

ある意味、ここまでV R M M Oが世間のすべての人間に認知されるのは初めてのことだろう。

ネット上では、『羨ましい』と『不謹慎』という言葉が連日バトルを繰り広げ、その騒乱はとどまるところを見せない。

中には、本当はすぐにも救出できるのに、V R システムのデータを取るためにプレイヤー達を犠牲にしている、などという陰謀論まで飛び出す始末。

これも、自称専門家が、仮想現実に取り込まれるなどありえないログアウトさせることは理論的に可能なはずだ、というさも都合の良い希望的解釈を語っているからだ。

本当に現場にいる昇達からすれば、「誰だお前」と言いたいところだが、そんな機会は訪れることはない。

（実際にここに来てみる。この状況で何が出来ると言っんだ）

そんな情報の氾濫に吐き気を覚えながら、須藤晃は目の前に開い

たPCのブラウザを閉じる。

よく、営業に行った先でその筋の人間と間違われるその強面の顔は、今も不機嫌そうに歪んでいる。

晃は、缶コーヒーがなくなっているのを見て、ついでに煙草を吸いに行こうかとポケットの小銭を取り出し、習慣で斜め前の席に目を向けた。

空席。

晃の遊び道具が居たはずのその席は、この二週間、埋まることはなかった。

どこにいるのかはわかっている。

今月、嬉々として自分の作ったモンスターを倒しに、その世界に旅立った男は、休暇が明けてもなお、晃の元に戻っては来なかった。

「……………」

晃は、無言のまま席から立ち上がり、喫煙所へと向かった。近頃は、どこも愛煙家には厳しい世の中だ、オフィスから出て、わざわざ指定の場所まで歩いていかなければならない。

税金は上がり、場所は奪われる。全く、ままならない世の中になったものだ。

ビルに囲まれた一角。黄色のラインで区切られた、晃のような喫煙者が集うその場所だが、今日は本来ならば休日であることも先立

って、人間の数はまばらだった。

そんな中、紫煙をたゆたわせている見知った顔を見つける。

その男は、近づいてくる晃に目を向けると、吸っていた一本を灰皿に押しつぶし、上着の胸ポケットから新しい一本を抜き出した。どうやら付き合ってくれる気らしい。

男の名は海堂圭一。かいどうけいち

180cmを越える身長に、細長い手足、この業界に来るまではモデルをやっていたという変わり種。晃の同僚にして、内外に評価の高い、腕のいいグラフィックデザイナーだ。

プログラマーである晃とも仲がよく、よくあいつで遊んでいた。確か、強請ねだられて、色々細かいグラフィックを作っていたはずだ。

「……暇そうだな」

圭一が晃に声をかけてくる。

「……お前こそな」

晃はそう答え、自分も煙草に火をつけ、ふう、と白い煙を吐いた。煙が、空気に混じり合って、消える。

現在、オフィスには【B a b y l o n】開発に関わったうちの半数が詰めていた。

あれだけの騒動の後、どこから嗅ぎつけてくるのかマスコミが家まで押し寄せてくることもあるためと、「待機」という名目で人がいなければならなかったため、晃達は開発メンバーは交替でここ、【B a b y l o n】システムにアクセスするビルに来ている。

……………何かが出来るわけでもないのに、だ。

『アル』にその端末のアクセス権を奪われた今、晃達にできることなど何もないのが現状である。

やっていることといえば、プログラムコードを見て、バグを発見してしまうことくらい。

——発見できたとしても、修正を行うこともできないというのに。というかあの馬鹿、致命的なものはないにしろ、バグを何個か残していきやがった。……………影響がないといいが。

晃はそんな事を内心で思う。

あれから、『アル』は、現状の状態とそれに関わる全てを全世界に公開した後、誰の前にも姿を見せていない。

文字通り、ネットワークの波の中に消えてしまった。

その後、調査を行うメンバーから、物理的にサーバー、そして『アル』の本体があったスーパーコンピュータを破壊するという案が出て、検討された。

晃達からすれば、馬鹿なことを言うな、といったところである。

21世紀初頭から始まった、データのクラウド化によって、今ではプログラムや、それに関するセーブデータなどは、世界中のデータセンター（保存する場所で、地震などの災害のないとされる場所に多く配置されている為、様々な業界のシステムがそこを用いている）に分割され、暗号化されて保存されている。

ソフトウェア——（簡単に言うと、エクセルやワード、のような

プログラムのことだ)——が『アル』に抑えられているなら、ハードウェア——(これはPC本体のような機械のことである)——を壊せばいいと思ったらしいが、そうするのであれば、そのものを区別して壊すことなどではしない。

わかるだろうか？ PCが壊れれば、何の変哲もないデータも、奥底に隠してあるかもしれない18禁データも、これまで集めた色々な情報がもれなく失われるのだ。

そして、バックアップごと壊さなければ、今回は意味が無い。何せ、壊れても大丈夫にするためのバックアップシステムだ。メインだけ破壊しても意味はない。

特に、世界初のVRMMORPG【Babylon】のデータ量を舐めてもらっては困る。

15000人のために、様々なサイトの、様々な情報を壊して、さらに世界規模のネットワークに、経済的にも物理的にも影響を与えていいのならば別だが。

しかもその場合でも、プレイヤー達の安否は不明。いざとなれば電脳世界に潜り込めるほどの性能を持つ『アル』に、影響があるのかも不明。

言うまでもなく、割りに合わないすぎる賭けだ。

……………いつそそれならば、あの馬鹿で素直な遊び甲斐のある後輩が、クリアして戻ってくるのに賭けるほうがまだましだ。

文字通り、苦渋の選択だが。

「……無事、帰ってくるだろうか」
「帰ってくるさ」

圭一の呟きに、晃は反射的に答える。
そして、内心で願い、謝罪する。

(……………すまんな透。相当難易度は高いだろうが、死ぬなよ)

『言霊』の配置と、ボスモンスターの設定を担当したプログラマーとして、晃は自分の作ったものを考え、遠くを見た。そしてその立场上、そして事件の性質上決して言葉にはできないが、思う。

(……………無理かもしれん)

今頃、どうなっているのだろうか？
起きているのは、混乱か、それとも……………命をかけてまで、攻略なんてものをしている奴らがいるのか。

晃の記憶が正しければ、最初の階層の『言霊』のモンスターは、特にハードな造りにしてあったはずだ。

物事は初めが肝心だからな、等と嬉々と設定をきつくした自分を今となつては殴りたい。

それを含め、考えれば考えるほど、あれを死なずにクリアするなど夢物語だと思う。特に……………中層以降にかけては。

おそらく、あの愚痴の多い後輩なら、勘弁してくれと叫ぶだろう。涙目になりながら、それが更に遊び心に火をつけるのに気づかずに。

そう思い当たり、本当に不謹慎ながら、晃は笑う。
そして思う、それでも、帰ってきて欲しいと。

ビル街に、風が吹いていた。

何も出来ず、自分の構築したものが人を殺すかもしれないことに
実感を持てず……。

晃は今日も一日を過ごしていた。

ただ、この悪夢が早く終わることを願いながら。

閑話 ある開発者の一幕（後書き）

以上、トールのボヤキに出てくるドSの先輩と、煙草1カートンで綺麗な風景を作ってくれた先輩たちのいる、現実世界的一幕でした。

一応

主人公 〓 透

ドSの先輩 〓 晃

深淵の森のデザインでお願いした相手 〓 圭一

になります。わかりにくいと思いますが、失礼しました。

三話（前書き）

本当はこの後にすぐ書きたかった話が続く予定だった（というかこの話はそこまでのつなぎだったはず）んですが、合わせると量が微妙になりそうなので、先に投下することに致します。

おそらく後二時間ほどでもう一話投稿しますので、読んでいただけている方で、ちまちま読むのが嫌という方は少々お待ち下さいませ。

一応区切ってはあります……………間違いました、区切ったつもりです。

三話

【チュートリアル開始 20日後】

先輩を恨みながら、ローザに毒づきながら、『紅の平原』を『モコ』を連れて走りまわったあれから4日後、俺はギルド―銀の騎士団の本部になっている建物に来ていた。

「あ、トールくん」

建物の前にいた俺を見て、ちょうど買い物から戻ってきたらしいトウレーネが声をかけてくる。

出会って二日目、ものすごく丁寧な敬語で話してくるトウレーネに、どうにもむず痒くなった俺が、慣れないからできたら敬語はやめてくれないか、と言ったら、たどたどしい変な言葉遣いになって少し萌えた俺だ。

……きつと間違っていないと信じている。

まあ、その後さすがに、普通に喋りやすいままでいい、と言ったら戻ったが、「さん」は「くん」になった。

これもまた……いや、自重することにしよう。

隣にいる、トウレーネよりもさらに小柄な女の子にも頭を下げられる。鈍色の髪を後ろ手にまとめ、歩くごとにその髪が揺れるのが可愛い。

あの後から、ローザの紹介でトウレーネと一緒にギルドの所有する建物に住んでいる、銀の騎士団所属の『アイナ』という大人しい

女の子だ。職業は『僧侶』、人選はさすがローザとでもいうか、トゥレーネとはどうやら波長があつたようだ。

ダンジョンに行く前に買い物に行ったり、食べ物を探索に誘つたりと、あんな事があり、普段はニコニコとしているものの時折暗い顔をするトゥレーネに気を遣いつつ、あえて普通に接しているように見える、無口だが優しい子である。

「今日は早いんですね。すみません、ちょっと待ってて下さい、すぐ用意してきます」

つられて頭を下げる俺に笑顔でそう告げると、トゥレーネはアイナと建物に入っていく。

「……そんなに急がなくてもいいからな」

俺は、足早に去っていく後ろ姿に声をかけ、壁に近づきもたれかかった。

………まだ、そんな素直な笑顔を向けられると戸惑ってしまうが、さすがに三日目ともなると少しずつ慣れてきた。特に、ローザにいいめられた後などにそうされると、泣きそうになる。癒し成分が足りていないのだ、きっとあの人もトゥレーネやアイナちゃん見習うといいと思う。

——ゾク！

不意に背筋に寒気が走る。

恐る恐る、俺が本能が警戒を告げる方向、すなわち上を見ると……
ギルド本部、その三階の窓から、ローザが微笑んでいた。

（何……だと……、とうとう遠距離での読心術が……）

俺がその目線に静かに慄き固まっていると、面白そうに口元に笑みを浮かべ、ペコリと頭を下げて見えなくなる。明日には大事な一戦を控えているので、おそらく、これから話し合いでもあるのだろう。

ローザさん、俺は怖いです。モンスターに追われるよりもよっぽど貴方という人間が。

注）これは体験に基づいた事実です。

……………気を取り直していこう、今日は行きたい所があるのだ。

さて、あの逃走劇の翌日から三日間、俺が何をしていたかという
と、俺はバベルの塔第一階層の迷宮を調査^{マッピング}していた。

これは、『言霊』を封じた水晶を得ることができたため、バベルの塔の扉が開き、いよいよ上層への攻略が開始されたからである。

ただ、俺にとってそれまでと違ったのは、ソロではなかったという点。

俺は、トゥレーネやローザ、リュウ、ネイル、それにアイナといったメンバーとパーティーを組み、探査を行っていた。

ギルドではない俺と、幹部でもある二人が行動しているのか

という質問には、フェイルの許可は得ているので問題ありません、とあっさり答えられたので、その六人（このゲームにおける一番基本とされる人数が、六人なのだ）で行動していたのだ。

何でそういう事になったか、まずは順を追って話そうか。

あの、死ぬ思いをして走った日――

俺が何とか指定された地点に『モコ』をおびき寄せると、ローザの用意したギルド所属の呪術師達が、その場に準備していた束縛陣バインド・スクエアで足止め、そして、ネイルを始めとする『火』属性の魔術師が用意していた詠唱を重ねて一気に焼き払うという見事な連携で、一瞬にしてかたがついた。つまり、死ぬ思いをしたのは俺だけ……しかし、
も美味しいところは持っていかれた

――俺は、開発者であることを知られたという事もあり、ローザに一つの提案をした。

それは転職クエストについての、おそらく現在は俺以外は知らない情報。

現在、この【B a b y l o n】にいるプレイヤーは、皆基本職のみである。

生産職は、上位職がないため関係がないのだが（そもそも戦闘職とは比べものにならないほど、熟練度と呼ばれる技能の習得にかかる値の成長が半端無く遅い）、戦闘職にはそれぞれ上位となる職種がある。

転職クエストは、初めてバベルの塔を登った時に開放される『言霊』で言葉がわかるようになる、神殿のNPCから受ける事のできるクエストであり、これをクリアすることで、上級職への道が拓ける仕様になっている。

そして、これをチュートリアル期間のうちに開放し、上級職の戦闘に慣れることで少しでも生存率を上げるべきだと俺は提言した。

本来は、これはある程度街の外の初期のフィールドが攻略され、あちこちの情報が集まった後、第一階層の『ガーディアン守護獣』を倒すことで初めて得られる情報なので、どう伝えるか考えあぐねていたのだが、ローザに話したことで、フェイルの統率力もあり、今のうちに攻略を進める動きが出てきたのだ。

そしてその結果、その攻略部隊の一員に俺も加わることになり、更には元々言っていたように、トウレーネのレベル上げも同時進行が良いという話が出たため、それならばと、面識のあるローザ、リユウ、ネイルの三人に、同居者のアイナを加えたパーティーが結成された。

第一階層からこれか、と頭が痛くなるような罠等トラップを抜け、上層へつながる広場が判明したのは先日のこと。

そして、ちょうど三週間目となる明日、『ガーディアン守護獣』に挑むことになり、今日は休養日とされた。

長かった。この四日間、俺は平原を追い回され、ダンジョンの性格の悪い罠の解除をし、歩いてる途中は胃が痛くなったりもする（トウレーネは何故か俺などに笑顔で好意を示してくれる）俺はあたふたする ↓ ローザ達からかいの微笑 ↓ 俺胃痛し、中々大変だった。正直、それでもソロでいるよりも、楽しかったがな。

そんな中、ようやく俺は四日前の目的を果たせる時間ができたのだ。

そう……聞いてくれ！ 今日こそは、待ちに待っていた、『煙草』を錬成してもらうための素材を取りに行くのだ！

……………あれ、反応薄い？

いや、そんな目で見ないで聞いてくれ。

近頃世間の目は厳しいが、この中でなら吸い放題……もちろんマナーは守る。

どんなに吸っても現実の体には影響はないし、現実ほど吸う場所や捨てる灰皿を必死に探し求める必要もない。何故ならアイテムは基本的には使うと消えるからな……………まだ詳細は知らないのだが、考えた奴は天才だ。

完全に自分のための用事だったため、本当は一人で行くつもりだったのだが、その話をしたところトゥレーネも一緒に行ってくれるということになり、こうして今日も迎えに来たのだった。

ちなみに、どうやら三日間行動を共にした人間の中では喫煙者は俺だけのようで——それを聞いた時、俺はリュウさんに裏切られたように感じた。……………何故、何故俺なんかよりタバコが似合いそうな外見の貴方が健康志向なんですか、リュウさん！——、その話に乗ってくれたのはトゥレーネだけである。

「お待たせしました！」

俺がそんな回想にふけていると、扉が開き、トウレーネが建物から出てきた。

ニツコリと笑って言う。

「二人でどこかに行くのって初めてですね？ 私も頑張ります、前衛よろしくお願いします」

そして、ぐつと拳を握り締めるように気合を入れ、そう言ってさくさく歩き出す。――前衛のはずの俺を置いて。

「ちょ、待て待て、張り切り過ぎだって、第一場所わかってないだろ！？」

そう言って、慌てて俺も後を追うのだった。

三話（後書き）

本来は閑話みたいな文章が作者にとって自然に書きやすい文章なんです。軽く重くで書きたいので、日々試行錯誤中。

変な部分もあるかと思いますが、取り敢えず話を進めます。ありがとうございます。

四話（前書き）

10/24 連続二話程更新致しました。よろしくお願ひします

四話

ここは、『バベル』北東に抜けた先にあるダンジョン、『無名の遺跡』。

この奥にある、『火』属性の魔石アイテムが、『煙草』の錬成に必要なという事で、俺はトゥレーネを伴い先へと進んでいた。

レベル的には、現在開放されている中では、難易度中のレベル。この三日間、結構な時間を『バベルの塔』内部で過ごしていた俺達にとっては、決して楽では無いものの、無理さえしなければそこまで危なくもないダンジョンだ。

古びた石柱が立ち並ぶ通路を越えて、崩れた壁を迂回し、遺跡の中に入ると待ち受けている罠を解除しながら、少しずつ奥へと進む。ここまで何の問題もなく進めていたが、そろそろ最奥部が近いため、モンスターも強くなってくるはずだ。

そろそろ罠も多くなってくるし警戒を、と俺が言いかけたその時、

——カチリ

「あ……………」

物珍しげに壁に手をおいたトゥレーネが、乾いた音の後、少し間の抜けたような声を出す。

続いて、石と石がこすれるような、鈍い音。

「……………ごめんなさい」

トゥレーネの声がか細く響く。

少しだけ、声をかけるタイミングが遅かったようだ。

今俺達がいる遺跡内の通路。

不思議な光沢を放つ石でできた壁には、幾何学的な文様が刻まれている。

（難しかったって言ってたなあ、これを表現するの）

少しだけ、現実逃避を試みる俺。

そうしているうちに、鈍い音が終わり、一部分が凹んだように動いた壁の中から、石兵型のモンスターが現れる。

壁のある位置に触れると、現れるような仕様になっていたらしい。幾何学模様のせいで、罨の場所を見逃してしまった俺のミスだ。
………一応、あまり壁とかに触れないでって言ったんだけどなあ。しかし、ある意味褒めよう。

その、目の前のモンスターを見て、そう思う。

俺たちの前に立ちふさがったのは、『レムナント・ゴーレム古代機兵 L V ・ 1 8 』。
こいつは、男のロマンに固執した俺の会心作だ。目の前で威嚇してきていなければ細部にわたり自慢するところだが。………やつぱりこういう風に見ると違うなあ、等と考える。

巨大だ。

頭が通路の天井に届こうかという巨体。

なめらかなフォルムにして無骨な石の光沢。

そして、画面で見るのであればわからないであろう威圧感をひし

ひしと肌で感じる。

やべーかつけー。

何で俺、無機物系は捕獲^{タイム}できない仕様なんかにしたんだろう……
痛恨のミスだ。

ああ、このゴーレムに乗ってフィールドを歩いてみたかった……
…。

このゲームでは、特定のモンスター（特殊な技能を持ったものが
多い成長型モンスター：全部で20種類程）と戦闘し、瀕死状態に
した場合、超低確率で捕獲^{タイム}することが出来ることがある。そもそも
出現率が非常に低く、出会えること自体ままならない上に、捕獲で
きる確率も低いため、出来るのは幸運の女神に微笑まれたものだけ
だ。

そんな中々手に入らないモンスターにはそれぞれ特徴があり、治
癒効果を持つものであったり、支援効果であったり、戦闘参加であ
ったりと様々だ。そして、そんな幸運に導かれ、一度何らかのモン
スターを捕獲^{タイム}すると、二度とそのプレイヤーは他のモンスターを捕
獲することはできない。

これは、オフィスのデスクに『人生は一期一会』と書かれたカレ
ンダーを置いている（毎年どこから持ってくるんだろっ？）先輩デ
ザイナーの発案である。

ちなみに、そのモンスターが『死亡』した場合の措置としては、
『死亡』後、そのモンスターはカードとして持ち主にドロップし、
これまたフィールドで得られることのある、『黄泉の実』というレ
アなアイテムでのみ復活させることが出来る。

そんな事を思う間に、ゆっくりとその足音を響かせて『古代機兵^{レムナント・ゴーレム}』

が近づいてくる。

今俺がソロでいるならば、時間をかけてヒットアンドアウェイで削っていくか、さっさと逃げ出すところだが、今は背後にトゥレーネがいる。

仲間がいる。……………しかも美人の。

おそらく性質にもう一つ空きがあれば、『見栄』が入っていたかもしれない。

遺跡に入る前にトゥレーネにかけてもらっていた支援^{バフ}効果と秘密スキル（注意 そんなものは存在しません 運営チームより）『男の見栄』を受けた俺が、いつも以上の速度で、相手に小さく攻撃しながら注意をひきつける。

太い腕が俺を襲う。速度はあまりないが、動きが厄介だ、食らえば一撃でもかなりのHPを持って行かれるだろう。注意しながら、タイミングを縫って攻撃を浴びせていった。

その間に、背後で、聞きなれてもなお、聴き惚れるような綺麗な声が滔々と響き始める。

俺にとっては援護となる、目の前にいるこいつにとっては死へ向かう詩。

『——私の声が聞こえますか？』

『——戦いに赴く人を助けたいの』

『——私の声を聞いてくれますか？』

『——共に終わり導く歌を歌いましょう』

『——そんな私の声を風に乗せて届けて』

『——ファウエルクテス・ハーム
減衰の詠歌』

数節の詩の終わりと共に、影色の風が眼前の敵にまわりつき、目に見えてゴーレムの動きが鈍くなる。

（作成時間72時間の愛しき我が子よ、最後に綺麗な声を聞かせたトウレーネに感謝して眠れ）

俺は心の中で目の前のゴーレムにささやき、先ほどまではその腕が邪魔で狙えなかった額の石を狙って飛ぶ。

数秒後、その巨軀に見合う大きなライトエフェクトと共に、ドロップカードを残して影は消えた。

「やりましたね、ツールくん！」
いいタイミングで相手の動きを止めてくれたトウレーネが、声を

かけながら駆け寄ってくる。

「ああ、いいタイミングだった、ありがとうな」
俺も、そう言って笑う。

正直、大人数でのパーティ行動やソロには慣れていたが、二人でダンジョンに潜るというのは経験が少ない。

それも、目を引くような美人となんてなおさらだ。むしろ少ないと言っか、無い。

あれ、よく考えてたら、俺近頃恵まれ過ぎてない？
これってフラグ立ったりしてないよな？
まさか俺……死ぬのかな？

そんな事を半ば本気で思うくらい、近頃調子のいい俺だ。色々愚痴って入るが、最初の二週間に比べて恵まれすぎていると感じる。
俺の内心などには気づかずに、トゥレーネが笑顔を向けてくる。

（何で、俺なんかをそんなに信用するのかなあ）

例え、あの状況で助けたとはいえ、何でだろう。心から不思議に思う。気になってこっそり尋ねたところ、ローザやアイナなどには冷たい微笑と困ったような微笑ではぐらかされた。どっちがどっちかは………言わなくてもいいよな？

そろそろ目的のものがあはずの、最奥部手前の広場に着く。帰りは転移で街に戻るため、もうひと踏ん張りで終わりだ。

ふう、と一息ついて回復アイテムである『治癒薬』を復元する俺。味は100%オレンジジュースの味である。

ちなみに、MP回復用の『治療薬』はやたらと甘い為、順番を間違えると非常に飲みづらい。味音痴の後輩に、飲み物タイプのアイテムを作らせた先輩が悪い、きつと。……………そして、理解^{わか}ってて敢えてそうしたんじゃないと信じたい。

そんな事を考えていた時、俺の索敵に、^{サーチ}また新たなモンスターが引^ひきかかった。——随分と近い。

そして、気配が近づいてくる方向に目を向ける。
トウレーネも気がついたようだ。

『黒影虎　Lv　3』

その姿を見て俺は心のなかで歓喜の声を上げる。

（おお！　ここに来て黒影虎、確か結構肉がうまい設定で、ドロップするんだっただけ）

しかしLvが低くて良かった。現在のような少し大きな黒猫のような外見の状態なら大した敵ではないが、こいつはLvが高くなると文字通り虎になる。

しかもピンチになると影に潜る強敵である。こいつは、モデルが実在の動物であったりしたため、結構作成時間は短かったが、成長する要素を持つレアなモンスターだ。

ちなみに、先程言っていた捕獲対象のモンスターでもある……がペットなんかよりも肉だ肉。

そう思った俺が、有無を言わず先制攻撃を仕掛けようとした時

ファーストアタック

——ゴッ！

背後から結構な衝撃が走った。仲間からの攻撃でなければ、HPが数ドット削れていたことだろう。

そしてよろける俺の横を人影が走り抜けた。

俺は、その衝撃をもたらした主、味方のはずのトゥレーネに恨みがましい目を向ける。

「……お前、何を……」

俺の言葉を聞かず、トゥレーネが言う。何故か憤っているように見える。

「……トールくん！　こんな可愛い子に何してるんですか！」

……えっと、はい？

俺を背後から不意打ちしておいて、どんな言い訳が返ってくるのかと思えば、何故か怒られている俺。何でこうなってる。

「弱いものいじめする人だとは思ってませんでした！」

ポカン、とした俺に、やや涙目で訴えてくるトゥレーネ。
やばい、可愛いかもしれん。そんな風に思考がそれるが、しかし
それでも内心でツツコむ。

いや、トゥレーネもさっきゴーレム倒すのは手伝ったじゃん。
ここまででも相当のモンスター倒したぞ？

何か？ 見かけが可愛い猫はダメで、ゴーレムはいいのか？
そんな数時間で描き上げた猫の方が、俺の3日間の徹夜の集大成
たる『レムナント・ゴーレム古代機兵』よりもいいと？

ん？ っていうかおい黒影虎、お前何トゥレーネになついてんだ
よ。

戦いもせずに捕獲タイムしておかしいだろ？

俺がそんな事を呟くと、トゥレーネがずっと自分のメニューを開
き、指差す。

『黒影虎は、仲間になりたそうにこっちを見ている』

……とはさすがに出ていなかった（当たり前だそんな仕様は作っ
ていない）が、捕獲した旨の表示が出ていた。

何故だ？

俺は疑問に思いながら、何故か戦わずして仲間になったらしい『黒影虎 Lv.3』を見た。

トウレーネの腕に抱かれて、柔らかな感触に気持ちよさそうにしている。……………羨ましいとか思っ
てないんだからな。

まだ怪訝そうな俺に、トウレーネがちよいちょい、と手招きし、自分の性質と、パーティのステータスを見せる。
指さされている部分を覗き込むと――

【トウレーネ】

性質：

『純真』（効果：被支援効果アップ。稀に戦闘なしでモンスターを捕獲する――0.1%）

『温厚』（効果：雪原ダンジョン・フィールドでの状態変化・『凍結』防止）

『歌姫』（効果：呪文・詩、詠唱時効果三倍）

【トール】

技能（パーティ全体に効果アリ）：『幸運』、『闇系モンスター捕獲率アップ』

……………マジですか？ 捕獲モンスター初遭遇で、更に0.1%の確率？ 一体どんな確率になるの？ 何その幸運、何のフラグ？

『黒影虎』はトウレーネを飼い主と認定したようで、静かにその影の中に潜り込み、顔だけだしてこちらを見ている。

何故同じパーティの俺が警戒されているのかはわからないが。

「もう、いじめちゃ駄目ですからね」

それを見ていた俺は、トウレーネに念を押され、疲れたように頷く。

いいや、さっさと取るもん取って帰ろう。

【B a b y l o n】ログイン20日目、どうやら可愛い黒虎がパーティーに加わったようです。

四話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
拙作ですが、今後とも宜しく願います。

ちなみにどうでもいいですが、作者は猫派です。

犬には吠えられます……何故か散歩中の犬にまで吠えられたことがあります。飼い主がびつくりしました。

注意：決して不審者ではありません。

五話（前書き）

今回は三人称です。

何故か？ それは、この場面のメモ書きをどうしてか三人称で書いていたからです……というのは理由の半分で、他の人達を主人公の目線以外から出したかったからです。

五話

【～第一層ボス攻略前日、銀の騎士団ギルド本部～】

「トールのやつとトゥレーネは、もう遺跡に向かったのか？」

『ナイツ・オブ・シルバー銀の騎士団』の本部三階では、ギルドの面々が、明日に向けての話をしていた。

そして、その話し合いも一段落した所で部屋に入ってきたアイナに、リュウが尋ねる。

「……はい、トゥレーネさん、凄い張り切っていました」

リュウの言葉に、と先ほどまで一緒に買い物に行っていたアイナがコクリと頷く。

「そうか、トールのやつもちったあ男らしくしてるといいがな。

……いつまで経っても照れてばかりいやがって、どっちが男だかわかりやしねえ」

がはは、とそれを聞いてリュウが笑う。

最初は、少し怯えていたアイナも、話していくうちに、その外見とは裏腹に面倒見がよく、ぶっきらぼうながら優しいリュウの顔を直視できるようになっていた。

「でも、二人共、優しいです」

そう呟いたアイナの頭を、リュウがくしゃっと撫でる。

節くれだった、固く、暖かい大きな手だ。

最初はそうされる度にビクツとしていたアイナだったが、今では

そうされる事に少し落ち着きすら感じている。

（何か、お父さんに似てる）

そんな事を内心アイナが思っていると知れば、意外と繊細なこの大男は傷つくかもしれないが。

「……………そうですね、一人は甲斐性なし、一人はよくわからない天然の娘ですけれど」

今頃ぎこちなくなっているであろう二人を思い浮かべて、ローザが淡々とそう言った。

「あはは、それはまた随分なお言葉だねえ。もつとも、僕も否定はしないけれど」

ネイルがその言葉を聞いて、肩をすくめて苦笑する。
いちいち行動が大げさなものにはもう誰も突っ込まないが、常々変わらないところを見ると、この状態が素なのだろう。

今、ここにいるのは四人。

出かけている二人とパーティを組んでいるメンバーだ。

おそらく、戦力のバランス的にも、明日は最前線に立つパーティの一つになるだろう。たった三日ではあったが、相当な時間を塔の探索に費やし、即席ながら各々の癖などもわかってきていた。

団長のフェイルはというと、今他のギルドとの調整に向かっているため、不在だ。

元々休養に当てる為の一日でもあり、ツールとトゥレーネは、正式にはギルドのメンバーではないことと、あれ以上、ギルドの錬金

術師の一人が開発した『煙草』を我慢させると、鬱陶しそうという理由でローザが呼ばなかった。

今日はそこまで重要な話し合いでもない、あくまで確認のためのものだ。

それに——まだ聞かせたくはない話もある。

「後で、フェイルが戻ってきたら改めてお話ししますが、キャルから『犯罪者』プレイヤーを転送するためのアイテムができたと報告が来ていました。……………あの娘は、まだうなされるのでしょうか？」

ローザがそう口を開く——後半は、アイナに向けて告げた言葉だ。

「はい…………でも、最初の一日に比べたら、全然ましです。あの日は、眠れなかったみたいだから」

「そう…………リュウの言う通りにして正解だったかもしれませんね」

トゥレーネは、いつもにこやかにしているため、人を見ることに長けているローザですら鈍感なだけかと思っていたが、同居しているアイナによると、初日は夜中にうなされては目をさまし、一睡も出来なかったらしい。

それでいて朝皆の前に姿を現した時にはあの通りなのだから、その話をアイナから聞き、逆に意外に思ったものだ。

そして、それを聞いたリュウがこう提案した。

「悪夢なんて見る暇もないほど連れ回せばいい。考える余裕がなくなるほど限界まで疲れさせて、腹一杯にしてベッドに放り込みや、そのうち時間が解決してくれる。後はトールのやつの仕事だろ」

乱暴すぎるように思われたが、効果の程は十分だったらしい。

（まあ、騎士様役があんな感じの方ですからね、確かに荒療治もありだったのかもしれませんが）

そう内心で思い、ローザが口元を緩める。

「……意外だね。ローザはああいう可愛い感じの娘は嫌いそうだけど——もちろん、悪い子ではないと思ってるけどね、僕は」
その様子に、ネイルが本当に意外な口調で尋ねた。途中からの言葉は、少し睨んできたアイナに対してである。

この無口な少女は、初日トウレーネにいきなり抱きしめられて可愛がられた時は目を瞬かせて戸惑っていたが、それから一緒に過ごす、というか構われるにつれて、短い期間ながら驚くほどよく懐いている。

ネイルには、それが現実にいた頃からなのか、こんな状況に巻き込まれたからなのかは分からないが、ほとんど自分からは口を開かなかったアイナが、曲がりなりにも自分から意見を言ったのは、トウレーネがうなされていることをここに三人と団長であるフェイルに告げた時だった。

「あら？ 私は元々可愛い物を愛^めでるのは好きですよ。……もしあれが、計算したような天然もどきでしたら別ですけれど」

そうネイルに言って、ローザが微笑む。

何故か、何かを思い出したようにイラッとしたように見えるのは………きつと触れないほうがいいのだろう、そう思ったネイルが、更なる疑問を口にする。

「何で純正の天然って解るのさ？」

それを聞いたローザが、端的に告げた。

「躊躇なく地雷を踏めるのは、本物の天然だけです。計算高い女性には、あれほど危険な罠を、躊躇なく発動させません。………それに、それが自分に振りかかりさえしなければ、可愛らしいじゃないませんか？」

ああ、とそれを聞いて三人とも納得する。

その後始末を全てツールに押し付け、それを何とか解決したところをトゥレーネに涙目で謝られたツールが照れ、そしてローザが遊ぶ、というパターンが三日間ダンジョンで繰り広げられたのをこの面子は知っている。

それを見て、リュウが笑い、ネイルが肩をすくめ、アイナが静かに微笑むのもまた、定番になっていた。

「きつと今頃、また嬢ちゃんが罠を発動させて、ツールが現実逃避してはカッコつけて頑張ってるんだろうぜ」

そのリュウの言葉に、四人とも笑う。

明日攻略に望むながらも、そんな柔らかな雰囲気の下がりだした。

【第一層ボス攻略前日、夕方】

遺跡から戻ってきた後、クロ——（黒影虎はそう名付けられたらしい……あれ、そのうち虎になるのに）——の食べ物を買うのです、アイナちゃんにも見せるのです、と張り切って（何故あんなに元気なんだ……？）いるトゥレーネをギルドまで送り届けた俺は、『煙草』の素材を渡すためにローザから紹介された錬金術師の店に入り、それを見て固まった。

もしかすると、他の人間にとってはそうでもないのかもしれないが、開発者の俺にとっては、ありえないと解るもの。

その少女にも、背の低い大人の女性にも見えるプレイヤーのアバターは、燃えるような赤い髪に、茶色の大きな目をしていた。

まだそれだけなら、この世界では決して珍しくはない。

俺を固まらせた原因は、その顔に付いているとがった耳、そして明らかに人の体には着いていないもの。

「少し変わった人間ではありますが、腕は確かな『錬金術師』です」

「キヤルさんは、とても可愛らしい方です！」

ローザと、既に会ったことがあるらしいトゥレーネは、そう紹介していたが、予想の斜め上過ぎる状況に、混乱した俺は内心で全力でツッコむ。

（何でだ！？ 何で猫耳にふさふさの尻尾のアバターなんかいるんだよ！ バグか？ それとも誰かの隠し仕様か？ ……いか

ん、思い当たるフシがありすぎる)

遺跡で、色々と精神的にも肉体的にも疲れ果てた俺を迎えたのは、現実の容姿を変更すること位しか許されていないはずのこの世界で、何故か猫耳をはやし尻尾を垂らした女性が座っている道具屋だった。

簡易登場人物パラメータ2

【ネイル LV・29】

職種：魔術師

主要武具：ロッド

属性：炎

性質：自己犠牲（パーティの誰かが瀕死時、HPを分け与える事ができる）、自己陶醉（自分への支援効果アップ）、厨二病重症者（HP1/4時、魔力暴走効果）

【アイナ LV・27】

職種：僧侶

主要武具：杖

属性：無

性質：内向的（回復呪文時、自己回復）、無口（無詠唱時効果ダウン軽減）、????

五話（後書き）

まだ出していなかったキャラ二人の簡易紹介です。
二章終了後、人物設定をどこかに置く予定です。

六話（前書き）

今日も無事投稿できました。仕事から帰ると週間二位になっててびっくりしながら嬉しく、そのテンションでお茶を取ろうとしたらドアに小指をぶつけて悶絶した作者です。

お読みいただいている皆さんに感謝を。
では、お楽しみ頂けたら幸いです。

六話

「うちに何か用？ もうそろそろ店閉めるとこなんやけど？ 用あるんやったら明日にしてくれる？」

立ち尽くす俺を見て、その猫耳女はそう告げてくる。とても客商売の言葉とは思えない。

（関西弁かよ！？ ってツツコむのはそこじゃねえ！）

そして、そんな一人ツツコミで悶々としている俺を見て、何かを思い当たったようにその女は手を打った。

「ああ、あんたツールやろ？ トウレーネちゃんからも、ローザからも聞いたとるわ。まああの二人は言うてることが違いすぎて、ホンマに同一人物について語ってんのかわけへんかったけどな、黒ずくめやて言うとなし、『煙草』欲しがつとるからよろしく、とは言われとったからそろそろくるんかとは…………… ってなんやの？ さつきから黙ってばっかで、ツールちゃうの？」

まだ衝撃から立ち直り切れていない俺が黙ったままなのを見て、そう言ってくる。

慌てて俺は頷いた。

「そうだ、ツールだ。あんたが……………」

「キヤルや。『錬金術師』で、この『猫耳亭』の店主やつとる」俺が、名前を思い出せなくて詰まっていると、キヤルと答えたその女性がそう指さしながら答えてくる。

そこには、確かに店じまいだったのであろう、しまいかけの看板

が置いてあった。

『雑貨屋 猫耳亭』

「猫耳亭？ そのままか！？ …… つていつか何だその耳は？
尻尾は！？」

俺は、ここ数分で何個目になるのかわからないツツコミどころに
更に混乱しながら、そう疑問の言葉を吐く。

「アホか、目えついとんの？ それとも見えてへんの？ これが
猫耳と猫のしっぽ以外の何に見えるんよ」

そんな俺に、はあ？ と言った口調で告げてくるキャル。

「っ！ …… そう見えてるから問題なんだろうが！」

そつたまらず叫んだ俺をつるさそうに見ながら、キャルは端的に
言った。

「最初からこうな訳とちゃうわ。大体そんな設定はこのゲームに
はないし、ネコ好きやから自分で作ったに決まってるやろ？ アホ
なんかあんた、一遍医者行ったほうがええんとちゃう？」

（駄目だこいつ、かみ合わない上に精神力が削られていく……き
つとこいつは、紙一重の方だ）

そんな風に、よく動く口からポンポン現れ出る毒舌に何もかも諦
めて肩を落とした俺に、ほれ、とキャルが手を出してくる。

「……………え？」

間拔けな声を出す俺に、イライラしたように告げる。

「『炎の魔石』。持ってきたんちゃうの？ 作つたるから早よう^は

よこし」

「あ、ああ、そうだった」

俺はその言葉に自分が何をしに来たのかをようやく思い出し、オブリエクト化した『魔石』を手渡した。

「……へえ、結構純度の良い魔石やん？　奥までいったん？」
それを見て、少し感心したような声で言うキヤル。

「ああ、トウレーネとな……えっと、知り合いなんだよな？」
俺は疑問にそう答え、確認する。

「そうや、っていうかあの娘が作ったってくれて言うから、待つとたんやんか」

キヤルが、その薄い胸を張って答える。

（いや、あなた明らかに最初追い返そうとしてましたよね？　店閉めようとしてましたよね？）

そんな俺の内心をよそに、キヤルが俺に尋ねてくる。

「まあええわ、あんた属性は？」

「ああ、『闇』だが？」

「わかった、今からすぐにできるから、そのへんのもんでも見て待つとき」

どうやら、属性が関係あるらしい、言うことだけ言うと、キヤルは少し奥に行き作業を始めてしまった。

待っていると言われた俺は、手持ち無沙汰なまま店内を散策することにする。

そして、俺はそれを見つけた。——見つけてしまった。

『透視スコープ』

そう札が貼られたそれは、5000ナール。他の回復薬が50ナールや100ナールであることを考えれば、明らかに高いが、俺はそんな事よりもその効果に目を惹かれていた。

『ダンジョンなどで、壁を透視して、その障害物の先にあるものを見通すことが出来る』

そう説明書きが書かれていたそれを見て、俺はキヤルの方を振り向く。

（こ、これはまさか漢の夢！ 服の下の、あんなものやこんなものまで透視できる、伝説の……！）

俺がそのあれこれを想像して、拳を握り締めていると、そんな俺の内心を見透かしたように、キヤルが手を動かしながら淡々と告げた。

俺の夢をぶち壊す現実を。

「……あなたがアホなんやなあって言うことと、今何考えてんのかは解る気いもするけど、多分あなたには使われへんで、自分の属性『闇』なんやろ？ それ視覚効果に必要なやさかい、『光』属性プレイヤーの限定アイテムやねん。大体、どっちにしたって『闇』属性のプレイヤーは反属性の『光』のアイテムは使われへんやろ」

「なん……だと……っ！」

その告げられた言葉に愕然としながら、俺は再度それを見る。
確かに、先ほどの説明の続きにそう書かれていた。

「ちなみに言うとな、それは凄い分厚い壁でも透視できる代わりに、微調整にはむいてないねん。使う度にMPも持って行かれるから、盗賊のあんたやったらどっちにしろ無理や。何せスーパーカー並の馬力で、街中走るくらい燃費悪いもんやからな」

止めを刺された俺は、がっくりと肩を落とす。

そう言えば、属性についての明確な説明がまだだったか。

この世界の属性の基本については前に言っただと思う。そして、それにはそれぞれ反属性というものがあるのだ。どういうものかという、こんな関係性になっている。

『反属性』

火 水

地 風

光 闇

無

アイテムにも様々なもの（回復薬や投げつける攻撃アイテムから、設置型の罠など）があり、回復薬などは属性『無』、ダメージ判定を持つものや、特別な装備アイテム等は各属性をもっている。

それが自分の属性であれば効果が二倍、反属性であれば使用できない、または特定のアイテムは使用出来ても効果が半減してしまう。ちなみに、生産職はその様々なアイテムを使えなければいけないという特性もあり、全て『無』属性である。

そして、『性質』は変化することも稀にあるらしいが、『属性』

は変わることはない。正確には、『火』が『炎』になったりするとはあれど、『火』が『水』になることはありえない。

つまり、何が言いたいかというと――俺には一生このアイテムは使用できないのだ。

（神よ……俺は恨む……何故だ、何故俺は闇……！しかし！
まだだ、きつと同じ志を持つ人間がいるはず。そうだ、『光』属性の魔術師が僧侶を探せば、そして『光』属性ならば、視覚同調スキルを持つものもいる筈……！）

「ちなみに言うとな、多分やねんけど、性格って属性に表されよんねん、『光』なんていうたらフェイルの旦那みたいな真っ直ぐな奴ばつかとちゃうか？ 多分あんたの思うてることに協力するような奴は、皆『光』属性ちゃうと思うわ」

そう最後の希望にすぎる俺の心を読んだかのように、淡々とキヤルが告げる。口元に笑みが浮かんでいるのが悔しい。

（……………くっ、漢の夢を、そんな簡単に諦められるか！）

俺は、心に決めた。

たとえどんなにレアであろうと、この条件に見合うプレイヤーを見つけ出すと。

（く……せいぜい首を洗って待っている！）

そう心のなかで決意し、ビシッ、と『透視スコープ』に向けて宣

言する俺を見て、呆れたような声でキヤルが出来上がった『煙草』を差し出してくる。

見かけは、唯の一本だけの煙草だ。

違うのは、それが紙で葉をくるんだものではないということ、俗に言う電子タバコのような形状だ。

「ほれ、あんた専用の『煙草』や。残念ながら吸って短くなるもんちゃうから、本物の感じは出せんけどな。味は、『吸う』という事実があんたの感覚から補完して、一番覚えてるもんにしてくれるはず、どうしても違ったら、追加料金で微調整したるわ。……後は、使ったんびにMP少し使うから、ダンジョンとかでアホみたいに吸ったつたら、いざというときに戦えへんから気いつけや。火は、その口に加える側を歯で噛んだら動作するようになって……大事に使い」

そう説明をしてくれるキヤル。

俺は、キヤルの了解を得てから、早速それを使ってみた。

肺に染み渡る煙、そして吐き出した煙が宙に漂って拡散する。

（こいつは……天才だ）

その現実と寸分変わらぬ煙草の感触と、先ほどのアイテム『透視スコープ』を作成したキヤルを、俺は本気で尊敬した。

そしてその心からの思いを告げる。

「俺は、お前を尊敬する。何か必要な素材があれば、何でも言ってくれ。特に、『闇』属性でも使えるアレを開発するためなら、俺はどこへでも行く」

こいつなら出来る！　そう確信を込めて俺は告げる。
そんな俺を面白そうに見上げながら、キヤルは言った。

「それを女のうちに堂々と頼む当たりがホンマにアホやな。……
まあ、そう言うてくれるんは正直嬉しくないことも無いし、うちも
鬼ではない……………あんたがうちの言う通りに色々融通してくれた
ら、いつか作つたる事もできるかもな？　……………多分無理や
けど、こいつ使えそうや（ボソツ）」

「な、何！？　本当か？　本当だな？」

後半はぼそぼそと呟いたのでよく聞こえなかったが、いつか作る
の部分以外は何も聞こえなかった俺は、肩に手をやり叫ぶ。

そんな俺に、天才『錬金術師』キヤル様は告げる。

「うちは嘘はつかん（……………ちゃんと『かも』て言うたしな）。……
……せやから頼むわ、今度来るとき、アイナちゃんを連れてきてくれ
へん？　うち、あのちっさい可愛らしい子にこの猫耳と尻尾をつけ
て愛でたいんや。なのにあの娘一回着せ替え人形にしたら来てくれ
へんねん」

「よし、任せろ」

俺は断言する。

アイナには悪いが、漢の夢には変えられん。

（すまん、俺の夢の為に、犠牲になってくれ、アイナ。今度何か
奢ってやるから）

そう心の中で謝る俺を見て、可笑しそうに笑いながら、キヤルは
しまいかけの看板を店内に引き込み、告げる。

「じゃあ、行こか。あんたも攻略前の決戦式とやらに行くんやろ？」

「……ああ、そういえば、そんな事言われてたな、何でもすごく美味しい飯を出す所があるとか」

「びつくりするで？　うちなんかと違^{ちが}うて、ホンマもんの職人であり天才やで。……ちよつと気むずかしいのと、『料理人』の癖にフィールドでとるから、あんま店はやってへんねんけどな」

そう言い、ニヤツと笑うキヤル。

（まあ、焼き鮭定食以外の美味しいものがあるなら大歓迎だな）

俺はそう思つて、キヤルに頷き、その銀の騎士団御用達という定食屋に向かうのだった。

六話（後書き）

次回までは日常、キャラ紹介の話。残り三話でボス戦含めての話。そこで設定などの説明をあらかじめ終えて、二章終了予定です

投稿後すぐに誤字発見、訂正、失礼しました。

10/27 勢いで書き上げ過ぎたので（つーか主人公が勝手に…
orz）すいません。少し修正しました

七話（前書き）

10/27 この一つ前の話、六話を少し改稿しました。合わせ
てお読み頂けたら幸いです。ただそこまでストーリーに影響はない
です。

七話

役目を終え、今にも眠ろうとする夕日に低い空が紅く染まり、真上には少しずつ夜色という名のそれが満ちてくる頃、俺はキヤルと共にその店、『満月亭』にやってきていた。

ここは、俺の疳^{ねづい}としてゐる街の西側の宿とは塔を挟んで反対側、同じく街の東側にあるキヤルの『猫耳亭』からは歩いて五分ほどの場所になる。

キヤルの店が街の中央を十字に走る大通りに面しているのに対し、そこから細い道を入ったところにある分、随分と寂れた印象を受けた。

「本当に、ここで合ってるのか？」

その店の前で、俺はそう告げた。

それもそのはず、そこは、そんな寂れたように見える道沿いの建物の中でも一際目立たないところにあり、唯の空き家のように見えた。

目の前の煉瓦の壁の中央にある扉は閉ざされ、看板も立っていない。ある、と分かっていなければ見向きもしないような場所。

「せやで、あんたは来たこと無いんか？」

「ああ、俺は宿の飯が一番うまいと信じてたんでな」

少し意外そうに尋ねてくるキヤルに、そう頷いて答える。

「そうなんや、そんなに自分のとこの飯はうまいんか？」

「……………そうだな、一度目は感動して、二度目は黙って頷いて、

三度目以降は、他の味を欲しながらも食べてしまつような、そんな食事だ。一度来てみるといい」

キヤルの言葉に、俺がそう答えていると、後ろから声がかかった。

「あ、ツールくん」

その声に振り向いてみると、トゥレーネがアイナの手を引きながら、歩いてくるところだった。

黒影虎である『クロ』は、アイナの頭に絶妙なバランスで乗っかっている。既にペット化は完了しているようだ。

その様子は、まるで仲の良い姉妹のようで、微笑ましい。

——そして、俺の隣にいたものが動いた。

「ア・イ・ナ・ちゃん！ 元気にしottaか？ 何かまた縮んでないか？ ちっこくて可愛えなあ」

盗賊の俺も真つ青なスピードでアイナの元に駆け寄ったキヤルは、これまた神速の域でトゥレーネの後ろに隠れたアイナを覗き込みうとしている。

……………クロは、怯えて影の中に潜り込んだようだ。

モンスターを怯えさせるとは……………何ていう生産職。

「……………」

アイナは、トゥレーネの裾を掴み、震えている。

（……………一体……………何をすればこつまで怯えるんだ？）

俺は、そう内心で思い、取り敢えずキヤルを引き剥がす。

「ちょっと、何すんの！ 協力するいうたやる！？」

「馬鹿、怯えてるだろうが、流石に自重しろ」

「なんやの？ アレが欲しいんちゃうんか？」

「ぐっ……」

そんなやり取りを交わす俺達を、トゥレーネは微笑ましく見て言
った。

「随分と仲良くなっただんですね。 ね、キヤルさんは可愛い
方だったでしょう？ お目当てのものはいただけましたか？」

「ああ、言伝ことづてしておいてくれたみたいで助かったよ」

そう、首袖を掴んだままにこやかに会話を交わす俺に、キヤルが
呟く。

「あんたは、透視スコープが欲しいんちゃうんか？」

「……透視スコープ？」

その言葉に、トゥレーネが反応する。アイナは恐る恐るこちらを
見ているが、キヤルと目が合うとまた隠れた。

「………どこの小動物だ。というかまずい、何あっさりばらして
くれてんだキヤル。暴れるんじゃない。」

呻く俺……トゥレーネはそんな俺を見て告げる。

「ああ、あの高いやつですね………欲しいんですか？」

どうやら、飛び抜けて高かったことから覚えているらしく、思い
当たったように頷き、そして見上げてくる。

（不思議なこともあるものだ、全然暑くなんてないのに、汗が出

てきたな)

「そうですね、トールさん盗賊だから、探索とか索敵サーチとかの為に、あったほうが便利ですもんね？ 一瞬、変なこと考えちゃいましたよ」

「……へんな、事？」

トゥレーネがいつも以上の笑みで、俺にそう告げるのを見て、アイナが聞く。

「ええ、でも、アイナちゃんも知つての通り、トールさんは私を助けてくれた優しい人ですから、関係ないと思います」

「……？ うん」

トゥレーネが、少し屈んでアイナに告げると、アイナは首をかしげながらも頷いた。

(……あれ？ おかしいな？ 何も言われてないのに、むしろ褒められているのに汗が出て寒くなってきたわけだが)

流石に、俺の不純な動機に思い当たらないほど世間知らずでもなかったようだ、そしてこれは、直接言われるより……くつ、済まない『透明スコープトランスパレント』よ、今はまだ、俺はお前とは縁がなかったのかもしれない。しかし、しかしいつか必ず。

俺は血の涙を流すような決意で、それを飲み込むと、キヤルに向けて告げた。

「そういうわけだ」

「何がやねん！」

自己完結してそう告げる俺に、キヤルが喚く。

「……………何、店の前で騒いでんだ、もうローザとリュウは中で待ってるぞ？ フェイルとネイルは遅れてくるらしいから、お前たち待ちだ、さっさと入れ」

その時、ガチャリ、と扉が開き、のそり、とその姿を現した男はそう低い声で告げた。

リュウほどではないが、180cmはあるだろう大柄な体、太い腕、そして円を描く強面の顔の頭頂は、見事なスキンヘッド。更に口元は、短いあご髭に覆われている。

つまり、なかなか怖い。間違ってもリュウとは並んで欲しくない。

これでバイクにでも乗って革ジャンを羽織っていれば、目を合わせることも無く逃げ出す自信がある。——今は、料理人らしく白いコックコート姿だった。

「ジンさん、すみません」

「……………こんばんは」

男に、トゥレーネとアイナが挨拶をする。

このジンと呼ばれた男が、この店の店主にして『料理人』らしい。そして、それに頷き、無言で背を向けたジンに続いて、俺たち四人は店内へと足を踏み入れた。

トゥレーネとアイナは、前にも一緒に来たらしく（……………確か『モコ』討伐時、俺が疲れすぎて断った時だ）、ジンに頼んで『クロ』の分をお願いしているようだ。

内装は、そこまで広くないものの、カウンターと、4つのテーブル席。

今は、それを中央につなげて円を描くように皆で座っている。

「あの二人は波長があつてたみたいで何よりだな、わかつたのか？ 嬢ちゃんは」

「……まさか、偶々です。ただ、アイナは気を遣える子ですからそれを見て、リュウが尋ねるのにそう答えるローザ。キャルもうんうん、と頷く。

「仲が良くて良かったとは思うけれど……女の子同士なんだからあんなもんじゃないのか？」

そう何でもなく会話に加わる俺に、三人が目を向けてため息を付く。

「……あなたは、本当に女性という生き物をよく分かっていない男性ですね、女性二人が同じ所にいさえすれば仲良くなるとでも？」

「アホやろ、そんな単純なもんとちゃうわ」

そしてそう辛辣な口調で言われる。……しまった、やぶ蛇をつついたか、しかも二人タッグだ。間違いなく勝てない。

取り敢えず謝罪する。

「……すまん、何かそんなイメージがあつた、違うんだな？」

「当たり前です、女性同士はなかなか波長が合いにくいのですよ？ むしろ男性の方のほうがそうだと思えます」

そんな俺はローザにそう告げられ、そいうものかと納得した。

何にせよ、仲がいいのだから良いことだろう。

そう思った俺は深く追求せず、目の前に置かれたサラダに手を伸ばした。そして驚愕する。

（美味い。どうしてこんな店が、今まで埋もれていたんだ）

サラダのシャキシャキ感とみずみずしさ、ドレッシングの味、なにより、その後飲んだ水からして美味い。

不思議に思った俺が、ここがどうしてあまり知られていないのか、と尋ねると、ため息をついていたローザが説明してくれた。

「ジンさんは、『料理人』にも関わらず、フィールドで戦闘を行うのが好きなようでして、普段はあまり店をやっていないのですよ」

戦闘好きの料理人、ジン。

それなら、何で戦闘系にしてないんだよ？ そんな俺のつぶやきに、奥から姿を現せたジンが端的に告げる。

「……………俺は料理人だからだ」

……………なら店開けよ！

至極真つ当だと思われる俺のツッコミは、しかしながらスルーされた。

そしてスルーしてくれたジンは、そろそろだが、また見るのか？ と何やら期待したように目を向けるトゥレーネとアイナに向けて言う。

この店は、街と同じく西洋料理がメインらしい。ただ、それでも日本人の舌に食べやすいものが多いということだ。和風な洋風料理、とでも言えば解るだろうか？

中でもおすすめはオムライスらしい。そしてその作る様を、先ほどの二人が見に行くということで、興味を惹かれ、キャルにも見たほうぐええ、と言われた俺も行ってみることにした。

カウンター越しに、二人と並んでキッチンを見ると、既に、更には湯気を上げたバターライスがお椀型に中央に盛られていた。その匂いだけで既にお腹が反応しそうだ。

（ここに、さらにオムレツが載るのか）

そう思った俺は、ゴクリと唾を飲み、別の皿にも目を向ける。オムライスの具なのだろう、ペースト色になるまで炒められた玉ねぎ、それと薄く斬られた肉がこんがりと焼き目がつき、こちらもそれだけでも美味しそうだ。

「これから割るんですよ、すごいんです!」

そうトゥレーネが言い、アイナも珍しくキラキラした目でジンの動きを追っている。

（割るって、卵割るのがそんなに珍しいのか？ いや、なにか秘技が……）

そんな事を思う俺の目の前で、ジンがゆっくりとよくかき混ぜられた卵黄を手に取り、よく熱せられたフライパンに、バターを落とし、なじませる。

……………あれ、もうすでに割れてんじゃん卵？

そう感じるが、場の空気から静かに見守る。

良い感じのバターの香りが漂ってきたところに、ジンが卵を箸になじませるように伝わせて投下する。

それは、バターを吸収しながら広がり、そしてジンの箸が焦げ付かないようかき混ぜながら、具を中央に置き、形を整え包みながらフライパンの端へと寄せる。そして――

ジンが軽く、コン、コン、と柄を叩くと、あたかも元からその形であったかのように、具を包んだ楕円型のオムレツにひっくり返った。

（す、すごいな）

俺はその当たり前のようにこなす技に、目を奪われた。

そして次の瞬間、ジンが盛られていたライスの上に、その出来立てのオムレツを乗せる。

さらにジンは、ここまでのスピーディな動きとはうって代わり、目を凝らして見つめる俺達に魅せつけるかのように、おもむろにナイフを取った。

――ッ

静かに線を描いたそれがオムレツを抜けると、ゆっくりと卵が開かれ、半熟の中身が姿を現した。そして、それは意思を持って流れ出すかのようにライスを包み込み、その中から先ほどの具が存在感を持って顔を出す。

俺の考えていた、薄い卵で包まれたものとは、同じ名前の違うものの。

「……………何回見ても、魔法みたいです」

アイナがそう呟くが、俺も全く同感だ。無言で頷く。

「……………ほら」

そして、その皿を俺の方へ差し出した。

その様には、誇る様子も、照れる様子も見受けられない。

「……………ありがとうございます」

俺は、何故か敬語になっていた。その、食べ物に、それを今眼の前にもたらしたジンに気圧されるように。

職人、か。そう思い、心の底から尊敬の念が沸き上がってくる。

料理一つでここまで感動させられるとは、思わなかった。トウレ

ーネ達に、感謝しなければならない。

もちろんのことながら、その差し出されたオムライスは、死ぬほど美味かった。

七話（後書き）

ジンは、作者が昔バイトで料理を作っていた店のオーナーがモデルです。書いてみたかった。オムライスの描写は、作者が初めてまかないを出された時の心境そのもの。書ききれたかはわかりませんが、本当に感動したものです。

これで初期に考えていた二章までで出すキャラは出したので、少しずつ人物補完を行いつつ、設定と前フリを出しつつ、物語を進めていきます。

お読みいただき、ありがとうございました。

八話（前書き）

なんか今日は筆が進まず。搾り出した感じです。。
第一層攻略前夜―後半、よろしくお願い致します。

八話

「トール、言霊の件では助かった、礼を言う」

「何だかあんたには、いつもそうやってお礼を言われてる気がするな。気にしないでくれ…… 実際うまくいったんだからな」

食事を終えた頃、ネイルと二人で入ってきた銀の騎士団^{フェイル}団長がそう告げてくるのに答えて、俺は笑いかける。そんな俺に少し頭を下げ、二人は空いている俺の右斜め前の席に座った。そこはちょうど、ジンのいるカウンターから対面、扉の前になる場所だ。

……… すまない、内心どうしようもなく感じているので聞いて欲しいんだが、現状、テーブルを中心に、二人ずつ座っているわけだ。

俺の座っている場所の右側には、今来ただかりの美形二人。そして対面には濃い顔に大きなガタイのリユウさんと、伶俐でスレンダーな黒髪美人であるローザが座っている。

さらに、左側にはクロと戯れる二人。ほんわかとした笑顔が似合う美人、その適度に丸みを帯びたスタイルがバランスの良いトウレィネ、小柄で、頭を撫でなくなるような可憐さを持つ、くりつとした目の無口な少女、アイナ……… ちなみに14、5の子を相手に言って犯罪者になりたくはないから大きな声では言わんが、その胸元には存在感を示している二つの…… 後は、わかるか？ 察してくれ。威力は皆に任せよう。

最後に、俺の隣にはそのアイナを虎視眈々と狙う（……… その度に俺が止める事数回）猫耳赤毛の錬金術師、キヤル。その小柄なスタ

イルは前言ったように貧、……………これから期待だが。

言い直したのは、隣から殺気が来たわけじゃないぞ、負けてなんかいないからな！

——コホン。

そんな中、俺は思うわけだ。

このメンバーでいたらただでさえ無い俺の存在感が更に薄くなる気が……………いや、いいんだ、自覚はしている。しかし、自分の存在を自分ですら感じ取れなくなるようなこの異常さ、わかって欲しい俺の気持ち伝わるだろうか？ ……伝わるといいな、物語には、俺みたいな奴がきつと必要なんだって。

そんな事をうじうじと考えていると、ジンさんが奥から現れる。そして、遅れてきた二人のためにまたあのオムライスを作ってくれるようだ。それを聞いてまた見に行くアイナとトゥレーネ……………飽きない二人が凄いのか、それとも飽きさせないジンさんが凄いのか。

（ウインドウ・オープン）

それを横目に見やり、俺はそう静かに呟き自分の性質を確認する。そんな俺の行動に、他の皆は何をしているのかと目を向けてくるが、そんなものは知らない。

『裏方』

その二文字が輝いている。——よし、現実を見る、俺！

敢えて確認することでありきれなさを振り払った俺を見て、ロー

ザが呟いた。

「では、フェイル達も到着してトールさんが思考の迷路から戻ってきたようなので、話しておきたいことがあるのですが、あの子達は……後で話します」

(……だから、心を読まないでくれよ)

そして、そう内心で哀しくなる俺を無視し、視線を二人が嬉々としてカウンターに乗り上げてジンの技を見ているのに向けて、静かに続ける。

「キヤル、アレについては、もう完成しているんですね？」

「アレって言うのは？」

「……犯罪者プレイヤーを拘束し、『牢獄』に転移させるためのアイテムです。このゲームには、犯罪者を入れる場所是用意されていましたが、そこに飛ばすためのアイテムが何故ありませんでしたから」

疑問に思った俺のつぶやきに、ローザがそう答えてくれる。

(そうだな、それは元から無いんだよ——『アル』を含めた運営が、そのPKをされた人間に依頼されてから送るシステムだったからな)

『アル』は当初のルールは守るはずだ。しかし一週間後以降、その人間が神殿に復活し、報告することなどありえない。

俺はそう、内心で呟き目を合わせた。それを見て、何かを悟ったようにローザはその視線をキヤルに戻し、俺も自然とそちらに目を向けた。

「もちろんや、ただ、やっぱり条件があるんやけどな………」

そんな俺達にキヤルがそう答え、少し口ごもる。

「どんなものだ？」

フェイルがそう口を開き、キヤルはそちらを向いて答えた。

「そもそもな、何らかを拘束するためのアイテムは全般的にそうやし、今回はそれを元に転移効果を入れて作ったから、結構条件が厳しいんや、相手のHPを五分の一程度まで減らした後で、陣の中に放り込まんと転送できん」

「……まあ、仕方が無いだろう。急遽作成してもらったものではあるしな、ただ、そうか——」

その言葉と共に、息を吐くフェイル。

考えていることは解る。

おそらく、このチュートリアルとされる期間終了後のことを、どこかで皆考えている。

プレイヤーキラー

今のところは、PKの噂は聞こえてこない。だが、この状態が最後まで続くはずと考えるには、知らない人間の数が多すぎた。

信じたくはないが、想定しないなんてことはありえない。

実際に『死亡』が現実の『死亡』とリンクした後でも、PKをする人間が存在するかどうか、ということ。

カウンターに居る二人が歓声を上げる。そろそろ出来上がるのだろう。

俺は、そんな二人を見やり、フェイルに告げる。

「なあ、分かっているかもしれんが、一つだけ、忠告させてくれ」

「何だ？ 気にしなくていい、言ってくれ」

それに落ち着いて答えてくるフェイル。

そして、俺は心に引つかかっていたことを、口にする。

「あいつに、あの三人のうち、一番落ち着いていた呪術師のやつにはくれぐれも気をつけてくれ」

頷いて先を促すフェイルにそう答えながら、俺はあの時のそいつの目を思い出す。

「……ゾツとしたんだ、あいつと最初に目があつた時。それで頭が真っ白になって、三対一なのも忘れて飛びかかった」

「そいつは、実際どんな野郎なんだ？ 俺は正直終わった後にしか見てないから、そこまで詳しくはねえんだが」

俺の言葉を聞き、そう疑問の声を発したリュウに、実際にその三人を転送し、その後の対応をしたネイルが補足する。

「そうですね、随分と澄ましているといいますが、冷めているといいですか。ゲームをやっているような？ ——いや、言い方が悪いですね」

「なんだよそりゃ？ はっきりしねえな」

説明し、うまい言葉が見つからないな、と人差し指で額を叩きながら呟くネイルに、リュウが言う。

（ゲームをやっているような）

しかし、そう、まさにそんな感じだ。

本当の時間つぶしにゲームをやるかのように。

惰性でつまらないものを見るかのように。

あいつは、トゥレーネを麻痺させ、二人に襲わせる様を見ていた。

——ここはもう、ゲームであってゲームではないのに。そんな事は無いと信じているふうでもなく、ただ、つまらなそうに見ていた。

「少しだけ、現実^{リアル}での話をしていいか？」
何故か、自然とこの『B a b y l o n』で、外の現実の話をするのが少し禁句^{タブー}のようになっていた。——それはいつからだろうか、そんな事を思いながら俺は告げる。

「……ああ、続けてくれ」「変なこと気にすんな、構わねえぜ」
そんな俺に、フェイルとリュウがそう言い、他の三人も首を縦に振る。

「時々さ、テレビで流れてたりしなかったか？ 殺人事件で、理由が『ただ何となく、誰かを殺してみたかった』っていうやつ」
そして、皆が静かに聞いてくれているのを見て、俺は続ける。

「あれは、実際のところはどうかかわからないし、専門家はいろんな事を言うけれど、俺は、病んでるとか、敢えてそう言うてるんじゃないくて、むしろそのままの言葉なんじゃないかと思うんだ。何といつか、普通の思考の延長線上にあるような。……それに比べたらまだ、他の二人の事は感情としては理解できたんだ——共感^{カンカ}は決してできないがな」

醜悪な表情をむき出しにして俺に語りかけてきた戦士の男と、それに追従するように笑っていた呪術師を思う浮かべそう告げる。

でも、あいつは違った。

次に浮かんできたあのまともに見えるように見えた、後方にいた呪術師の事を思う。

「あれはそう、何もなかった。何も感じてないんじゃない、感じた上で普通にしていたような。さっき言ったみたいに『やってみたかった』からしてみたような……何だろう、すまん、うまく伝えら

れないが」

「いえ、ネイルの言葉と、貴方のその例えで、理解したつもりです……少なくとも、気を付けたほうが良いということは……」

俺の言葉にローザがそう言い、フェイルがそれに頷きつつも続きを受け取る。

「だが、実際今日他の二大ギルドとも話してはきたのだが、捕らえたとして、その後いつまでそうするか、というのも問題なのだ」

「アホか、そんなもん一生閉じ込めとつたらええやないか」

その言葉に、これまで黙って聞いていたキヤルが吐き捨てるように告げた。顔が不快そうに歪んでいる。

「その、犯罪の質にもよるのだ。例えば、殺人と盗難をひと括りにまとめるわけにもいくまい？」

俺も心情的にはキヤルに近いが、フェイルがそう落ち着かせるように告げる言葉もわかる。

「犯罪者なんて皆同じや、軽いか重いかなんて関係ないわ。トゥレーネがされたこと忘れたんか？」

「……………目には目を、歯には歯を、ですよ」

そんな叫ぶようなキヤルの声に、横からそう言ったのは、他ならぬトゥレーネだった。

見ると、アイナと共に料理を運んできている。皆少し声を抑えて喋っていたのだが、興奮したキヤルの声が大きいので、聞こえたらしい。

（トゥレーネにはあまり聞かせたくはなかったが、しかし、当事

者のトウレーネこそ決めるべきか)

「せやろ？ やられたらやり返さな！」

俺がそう考えていると、そのトウレーネの言葉にキヤルが勢い良く告げる。

「違いますよ、そういう意味じゃありません」

ゆつくりとネイルの前に湯気を立てるオムライスをおいたトウレーネはそう言い、見回して続けた。

「『目には目を、歯には歯を』という言葉は、目をやられれば目まで、歯をやられれば歯までしか罰を与えてはいけない、必要以上にやりすぎてはいけない、というのが本来の意味なんだと、昔、人に教えてもらいました。——だから、フェイルさんの言う通り、全てを一緒にしては駄目だと思いますよ」

「……話し合いの結果としては、とりあえず、被害者の許しがあれば釈放するということで仮決定はした」

そう、静かになった席に、フェイルが言う。

つまり、何にせよPKは釈放なし、ということか、等と考えて俺は少し気分が悪くなる。

どうしても、そのことについて考えてしまう。

何にせよ、今回の三人は釈放は無しだな、とも主観ではあるが思う。

「はい、わかりました。許したら、釈放ですね」

静かにフェイルにそう告げるトウレーネ。

「トウレーネ？」「トウレーネさん？」

あっさり言うのに、まさか釈放する気が、と思った俺が名前を呼

び、同じように声を出したアイナが、そんなトゥレーネの裾を掴む。影の中に潜っていたらしいクロも、頭を出して鳴いた。

「ありがとうございます。大丈夫ですよ、私にはもう皆さんがいますから。もちろんアイナちゃんもクロちゃんもいるから、怖くないです」

自分のそばの、そんな一人と一匹の頭を撫でて、呟く。

「……あの三人に関しては、当分許す気なんてありませんし、これから先もわかりません。でも、だからって他の人にまでそれを押し付けるのは、良くないと思います」

最後の言葉は、キヤルに向けてだ。

その言葉に、キヤルが手を上げて呟く。

「わかった……うちは納得はせえへんけど、わかったわ」

そして、そのまま手を伸ばし、当たり前のようにネイルの前にあるオムライスを奪う。

「なつ、ちょっと待ってくださいよ、それは僕の……！」

「ジンさん、もう一個追加、よろしく頼むわ」

そう声をかけ、美味しそうに食べ始める。——もちろん二個目だ。ネイル、場の空気を変えるためとはいえ目の前まで来たそれを奪われるとは、不憫な奴。しかし、その様子を見ていたらおれももう少し食いたくなる。

何せ、それだけ美味しいのだから。

他の人間も同じだったのか、少し空気が軽くなったことが原因なのか、ジンに飲み物や食べ物を頼み始めた。

それに黙って頷き、調理を始めるジンさん。――あなたは、
職人の鑑かがみです

「トールくんも、ありがとうございます」

再びそれぞれ飲み食いを始めた頃、トウレーネが近寄ってきて、
そう告げる。

「……………それでいいなら、俺に何か言う権利はないよ」
顔が近いことと、その漂ってくる香りに戸惑いながら、少し席を
引き俺はそう言う。

「大丈夫です、信じてますから」

ニコリ、と笑ってそう言われ、顔が赤くなるのを感じる。

――だから、直球派は苦手だ。

ニヤニヤしている二種類の毒舌の視線を感じる。

（ああ、今日も胃が痛くなるのか）

俺はそんな事を考えながらも、楽しさも感じていた。そしてその
後は攻略の為の準備についての話などしつつ、美味しい料理に酒に
舌鼓を打ちつつ、夜は更けていった。

八話（後書き）

明日は、ちょっと出かけるので投稿や、頂く感想のご返信がでないかもしれません。明後日には頑張ります。ただ、二章は後二話の予定で、締めの部分はメモがあるんですが、次の攻略部分が……

『塔潜入、ボス戦描写』

『その後二章終了部分につなげる感じで終わり』

果たしてこの二行のメモをどこまで膨らますことが出来るのか……
…乞うご期待、はあまりせず暖かく見て下さると幸いです。
では、お読み頂けてありがとうございます。

九話（前書き）

戦闘の途中なので、この後すぐ、書け次第十話も投稿します。
すいません、個人の好みで一話5000字位までと決めてたんですが、収まりませんでした。

九話

朝、俺は約束の時間より少し早く、『塔』の前に向かっていた。昔から、何かある日の前日は、早く目が覚めてしまう。そして、二度寝すると起きれないことも既に経験済みだ。

今日塔への攻略に参加するのは48人、6人からなるパーティーが八組だ。

うち、四組が第一層のボスのいる広場へ、残りの四組は、それまで実際にボス戦を行うパーティーを送り届けるメンバーだ。

もっと大人数で行けばいい、と思われるかもしれないが、ボス戦の広場はそこまで狭くはないものの、あまり大勢で行っても意味はない。――何故なら、同じパーティーでない者の魔法などは、ダメージを受けるのだ。後は連携の問題もある。

例え100人プレイヤーがいた所で、同時に攻撃できるわけではないのだから……むしろ、多すぎる人数での攻略は弊害のほうが多い。

そこで、四方からも攻撃できる最小限の精鋭で、攻略は行うことになる。

そこまで送り届ける役目の人間は損な役回りなのではないかという意見もあるかもしれないが、この辺は三大ギルドの一つ、生産職メインのギルドである『探求者の集い』が、レアなアイテムや、今後融通を効かせる、等の見返りを与えることで納得してくれたらしいプレイヤー達が行なってくれる。これは、実際にボス戦に挑む人間をそれまでに消耗させないための必要な策だ。

何故こんなものが必要になるかといえば………塔の内部が随分

な難易度であること、そしてその一因として、他のRPGダンジョンなどで見かけるHPやMPを回復出来る場所が——あるにはあるのだが、50%までしか回復してくれない事に原因がある。つまり、フルの状態で戦いたい場合は意味が無い。

俺を含めていつものパーティーは、広場へ向かううちの一組に含まれている。

（初っ端から、毘も厳しいしなあ）

俺は、これから想像し息を吐く。

ちなみに言うと、宝箱などにも毘が仕掛けられており、解除に失敗すると爆発してダメージを受けたり、しかもそのダメージの後でモンスターが音に呼び寄せられ集まって来たりと、多分、はまると精神的にくるものがあるだろう。……………かくいう俺も今まで三回程、都合よくテレパシー能力に目覚めて、これを作った先輩に愚痴を言いつつ攻略法を教えてもらいたいと真剣に願った、いや本当に目覚めないかな超能力。

そんな事を考えながら、塔の前に行くと、思いがけず既に人影がいた。

フェイルだ。

珍しく一人で、塔の前に立っていた。ただ遠くを見つめるように空を見上げている。銀色の髪が朝日に照らされて、一枚の絵のようになっているのに、正直少し見とれてしまう。

「……………ツールか、随分と早いな」

自分のことは棚に上げて、俺に気づくと手を上げて言ってくる。

「お前こそな……何を、見ていたんだ？」

「空をね……ここは、どんなに綺麗でも、やはり現実ではないんだなと思っていたんだ」

そう言い見上げるフェイルにつられて、俺も空を見上げる。

透き通った透明な青。今日の天候は雲ひとつ無いが、あの腕のいい先輩の作品だ、俺には現実と変わらないように見える。

そう疑問を持った俺を見透かしたのだろうか、フェイルがポツリと呟く。

「私の現実での家の近くには、空港があつてね……出勤の時に見上げれば、自然とよく飛行機を見かけたんだ。何というか、時には五月蠅いとさえ思ったものなのだが……それが無くなると、どうも寂しく感じるものだな」

「………あんたのそういう話は、初めて聞くな」
いつも毅然とし、ギルドの人間の先頭に立っているイメージのあるフェイルの少し弱音にも聞こえる言葉に、意外に思った俺はそう言った。

「そうかもしれないな、君は——トールはギルドの人間でもないし、客分なわけでもないから、本音を漏らしてしまうのかもしれない」

「そうか、まああまり、無理をするなよ」

俺を見て、そう言うフェイルにそんな言葉を告げてしまっただけから、この状況で無理をするなも無いものだ、と自嘲気味に思う。

「ありがとう」

そんな俺に、そう告げるフェイル。

俺よりも少し高い目線にある切れ長の目は、穏やかな色をたたえている。

「……………礼も言うな。言っただろう？ 気恥ずかしいんだよ」
「ふふ、すまない」

俺がそんな視線に目を逸らし言うと、くっく、とフェイルが笑う。

「来始めたようだな、今日は、よろしく頼む。ある意味前哨戦だ、まだ大丈夫などとは言っても、誰も死なせずに攻略したい」

少しずつ、こちらに向かってくる人影に、フェイルがそう言い、俺も頷いた。

初めてとなる、『バベルの塔』上層部へ向かう第一歩が、今日始まる。

両脇に煌々と火をたたえた松明が灯る大きな扉の前、その、ボス戦の広場の入り口に、俺たちは立っていた。

此処から先は、何が待ち受けているのか。

「後は、任せます」

俺達を送り届けてくれた人間のうち、そのリーダー格でもある『狩人』の男がそう告げる。

レベルはそこまで高くはないが、状況判断に優れた支援を行なってくれる、いぶし銀のような男だった。

「ああ、君たちも、本当にご苦労だった。決して無駄にはしない」
そうフェイルが告げるのに対して、頭を下げた四組のパーティ達は、それぞれの転送陣にて塔の外へと離脱していく。

「さて、初陣だ。作戦は、私を含めた戦士・格闘家タイプの人間

が前衛。トゥレーネくんを含めた吟遊詩人・呪術師で補佐、ネイル等の魔術師・狩人で後方からタイミングよく相手を削ってくれ。トールを含んだ盗賊は、ボスに追隨する他の敵が出現しないかの注意を払いながら遊撃を頼む。僧侶のものは、各自のHPに注意を払いつつ、回復を——特にアイナ、君の無詠唱で行えるにも関わらずダウン効果の少ない回復は重要だ、頼んだぞ」

そんなフェイルの流れるような指示に、俺たちは頷き、そしてその広場に足を踏み入れた。

そして、四組全員が広場に入った時、少しの暗がりの中、それが姿を現した。

『アステリオス
Asterios』

そう、頭上のHPを表すゲージと共に、その巨体の名前が浮かび上がる。

隆々とした体躯——リュウですらその肩に身長が届いていない——の、二足歩行の怪物。

神話の世界や、絵などではポピュラーなもの。

牛を思わせるその顔、しかし、その血走った目、頭部の螺子巻かれた角、そして、背中と肩から生える四本の腕は、威圧感をひしひしとこちらに伝えてくる。

ミノタウロス。

そう言葉に表したほうが、伝わるだろうか。

そして、その俺達の前に立ちはだかった怪物が、地が轟くような声を上げる。

「……………来るぞ！ 散開しろ！」

そんなフェイルの声に、全員がはっと各々取るべき行動をとり始めた。

俺も、側面に回りこみながらその存在感の他に出現する敵がいな^{ホッブ}いかを探る。

（先輩……………たしかにダンジョンといえばメジャーですけど、第一層からこれはひどいでしょ！ もっと最初はゴブリンとかそういう優しいボスじゃないんですかー！）

そう内心全力で呪詛を吐きながら、今のところはその一体だけであることを確認する。……………というかそう願いたい。

フェイルの声に一番に反応したリュウが正面に立ち、その腕の一撃を大剣の横腹で止める。後衛職が距離を取る時間を稼ぐためだ。

「うおっ！」

リュウの巨体がよろめき、その足で何とか踏ん張るもののガードすら超えてHPが微量に削られている。

「……………おいおい、戦士で硬いリュウさんでそれって、俺が喰らったら一撃でレッドゾーンじゃねーか」

俺がそれを見て慄いていると、そんな中勇敢にも背後に回りこんだ格闘家の一人が、その空いた背中に飛びかった。

「……………！」

しかし、あたかも背中に見があるかのように、リュウに攻撃している二本とは別の二本の腕が反応し、体ごと受け止められる。

——押しつぶされる！

「やばい！ ネイル！」

そう感じた俺が後方でタイミングを伺っていたネイルに叫び、その足の元に双剣の連撃——哀しいくらいHPが減らない——を浴びせかけていく。しかし、それでも俺の攻撃が癪に障ったのか、そのまま引き裂こうとしていたその男を俺に投げつけ、吹っ飛ばされるも何とか難を逃れる俺たち。

ブレイズ・フレイム
「轟の紅炎」

そこに、ネイルの詠唱が間に合い、追撃は免れた……しかし、それでもHPゲージはそこまで減らず、ほとんど最初と変わらない。

（くそつたれ、冗談じゃねーぞ。マゾすぎだろこのレベルは）

俺は起き上がり、内心で呻く。投げつけられた男が礼を言うてるも、お互い答えている余裕はない。

ネイルにしろ、リュウにしろ、今俺と共に弾き飛ばされた格闘家の男にしろ、現状の上位プレイヤーである……にも関わらず、攻撃はあまり通らず、下手したら一撃でほとんどが削られる。どんな無理ゲーだ。

そんな絶望感の中、フェイルとローザがそれぞれ別の側面からその剣戟を加え、リュウが正面に上段から大剣を振り下ろす。その連携と精神力はもはや感嘆するしか無い。

「……………ッ！」

俺も、盗賊専用の投剣をオブジェクト化。その頭部に向けて投げつけた。

「グオオオオツ！！！！！」

響き渡る雄叫びと共にその腕を振り回し、全ての攻撃をはじき飛ばすモンスター。しかしそこに、すかさず魔術師達の攻撃と、弾き飛ばされた前衛達への回復がかけられる。

最真目に見て、10分の1程削れたか。

そして、初めてダメージらしいダメージを受けたそいつは、吹き飛ばされる範囲にいなかった結果、一番近い位置にいる俺に目を向ける。……………ほんとうに勘弁して欲しい。

「……………やべえ」

咄嗟に回避に入ろうとするも、一瞬の迷いのせいで横薙ぎの腕を避けられないと見た俺は、一か八かの賭けに出た。

『柔法の一・受け流し』

俺の性質『優柔不断：柔術スキルアップ』のおかげで使用できる本来格闘家のための戦闘技能。

「……………くっ！　らぁ！」

俺は双剣の柄を使いながら、腕全体をしながら衝撃の方向を変える。

（……………完璧、だろ！）

そう俺の思った通り、タイミングは完璧だった。相手の巨体も少しよろめく。

——— なのに何故、俺は今後方へとよろめき、HPは三分の一も削られているのだろうか？

（少しぐらい自己満に浸らせろよ！ 何で成功したのに喰らってんだ！？）

しかし、その隙を本来の前衛である者たちが見逃さずに攻撃する。そしてアイナの回復とトゥレーネの支援の歌の効果が俺を包む——
ありがたい。

もう少しずつ、削っていくしか無い。
それが全員の共通認識。

そしてそんな薄氷を踏むような戦いが、15分ほど続いた時、ようやく相手のHPはレッドゾーンに差し掛かってきていた。

しかし、そんな時だった。急に『アステリオス Asterios』の行動パターンが変わる。それまでは、あくまで自分に近い標的が攻撃対象だったのに対し、突然後衛のトゥレーネやアイナに目を向ける。地味ながら、回復と支援で戦闘の要となっていた二人だ。

「まずい、後衛を守れ！ 来るぞ！」

フェイル達がそれに気づき、即座に応戦するも、体ごとダメージを受けるのにも構わず突進するそれに弾かれる。

——— その前には、トゥレーネとアイナ。

（間に合わねえ！）

そう俺が思った時、その眼前に小さな生物が顕現した。……影の中に隠れていたはずの『クロ』だ。

そんなクロが、その巨躯の放つ威圧感に動けずにいるトウレーネとアイナの前に立つ。ミノタウロスの巨躯に比べてあまりにも小さいが、精一杯の威嚇の後、その巨体の影を掘るような仕草をした。

「ガ……ウ……？」

そして、その行動に急に足元が崩れたようにたたらを踏んだその隙に、二人は他のプレイヤーによって距離を取るように導かれる。

その結果、アステリオスの目が向くのは、思いがけない邪魔をしたクロ。そして、いらついた様に腕を振り上げる。

「くそつたれ！」

二人を助けようとした結果一番近くにいた俺は、それを見たとき咄嗟に飛び出してしまった。

人ではない、AIで動いているモンスターの為に、なんて考えている暇など無い。その手がクロに届くと共に、俺は背中に息が止まる程の衝撃を受け、壁にたたきつけられた。

（……………グッ！）

声も出せずうずくまる俺。腕の中に温もりを感じる。

「……………グル」

弱々しい鳴き声が聞こえる、クロは何とか無事か……しかし、視界の隅が赤い、おそらくHPが1/4以下に削られてしまっていた。そんな俺達に地響きと共に足音が近づいてくる。

剣戟の音からして、必死で止めようとしてくれているようだが、止まらない。

牛という特性から、レッドゾーンになると猪突猛進にでもなる設定なのかよ、と内心で思う。まだ、体は動かない。

目を何とか向けると、リュウの巨体ごとフェイル達が吹き飛ばされるのが見える。

（これは……やばいかも）

そう感じた。——その時。

「……………」

衝撃音としか言いようがないような打撃の音が、聞こえた。その音の源は……………杖を持った小柄な少女。

——アイナ!?

俺は動かない体で驚愕する。

無口な僧侶であるはずの彼女が、普段とは違い怒りに満ちた表情で、何故かモンスターの巨体に攻撃を浴びせながらひるませていることが信じられない。

「くそ……まだしびれは取れないのか……一体何が起こってる」

俺は信じられない気持ちで、眼前の光景を見やっていた。

九話（後書き）

中途半端なところ切ってすいません。九話が長くなりすぎて十話が短そうだったので……次書き上げたらすぐ投稿します。

お読みいただけただけの方、ありがとうございます。

十話（前書き）

本日2つ目の投稿です。よろしくお願いします。

十話

目の前にそのモンスターの巨体が迫ってきた時、アイナは動けずにいた。

(……………怖い、嫌……………)

恐怖心しか出てこない。

隣にいるトゥレーネも動けずにいる。

無理もない、先ほどまでですら、フェイル達が弾き飛ばされるのに恐怖を覚えながら、何とか自分の仕事をこなしていたのだ。

その矛先がこちらに向けられれば、抑えていた逃げ出したい気持ち溢れてしまう。

そんな時、二人の前に小さな影が現れる。

「……………クロ、ちゃん？」

目の前に現れた影は、先日トゥレーネが連れて帰ってきた黒猫——正確には黒い虎らしいが——だった。猫が好きなアイナは、一瞬で気に入って、昨日も一緒に寝たのだ。

そのクロが、自分たちの身を守るために、自分の何倍もあろうかという相手に対して威嚇している。

(……………あ、ああ)

それでも、アイナの足は動かない。

「早く！ こっちへ！」

それから目を離せず、かと言って動けずにいたアイナは、他のプレイヤー達に引かれ、その場を離脱する。

「……………ッ！」

そして、引つ張られながら、それでも目を逸らせなかったその瞳が見開かれる。巨大なモンスターの腕が、クロに迫り、そして飛び込んだできた黒い影と共に弾き飛ばされた。

「え……………ツール……………くん？」

隣で、トゥレーネの呆然とした声が聴こえる。

優しい、抜けているところもあるけれど、抱きしめてくれる腕が暖かい、トゥレーネの震えた声がする。

彼女と仲のいい、今弾き飛ばされたツールは、壁にたたきつけられたまま動かない。そんな彼が必死に腕に抱きしめているのは、ク口。

そして、動かないツール達に、アステリオスと呼ばれるモンスターは近づいていく。

「……………よくも」

そんな光景を見て、怒ったような声が自分の口から漏れるのを、アイナはかっとなる頭の一方で冷静に驚いていた。

それも束の間、頭が熱に侵される。体の指の先までが、燃えるように熱い。

そして、アイナはその衝動に従うままに、地を蹴った。

——ッ！

その衝撃が振り下ろされる前に、アイナの前に立ちふさがったのは、龍の刺青が目立つ巨躯。そして、その大剣を支えるように左右にいたのは、フェイルとローザ。

「……ったく、無茶すぎだ、嬢ちゃん」

すんでのところの間合ったりリュウはそう告げ、目はそらさずにそのまま腕に渾身の力を込める。……この戦いが始まって以来、初めて前衛がモンスターを押し戻した。すかさず細かな連撃を加える他の二人。背後からは、他の前衛達も攻撃を加え、一瞬ながら、モンスターに硬直が起きる。

そして——

「そのまま退いて下さい！」

「……………もう、許しません」

ネイルと、そしてどこか静かな怒りをまとったトゥレーネの音が響く。

その声に、アイナを抱えて飛びすさるリュウ達。

アードー・ポインツ
『灼熱の雫』
シルフ・デイマース
『終焉の蒼風』

二つの魔術が発動し、それぞれ相互的に作用して、硬直しているモンスターを包みこむ。

「……………」

言葉に表せないほどの、広場全体に響き渡る絶叫。

それと共に炎の渦の中で天井に向けて発せられたライトエフェクト。

静かにその効果が終了した後は、モンスターの影はもう、見ることはなかった。

「……やったのか」

よろける中、何とか壁に手について立ち上がった俺は、そう呟いた。

眼の前には、あの威圧感を示していた巨躯は、もう見えない。

その時、地響きと共に奥の壁が動き始め、言霊の水晶をはめ込む窪みがその姿を表した。

俺は、はっと我に返り言霊を嵌めこむようにフェイルに告げる。

頷いて、フェイルがそれを窪みにはめ込んだその時——透明だった水晶が、虹色に輝きはじめる。

そして、ログインするときに聞いた、女性のアナウンスが流れ始めた。

「只今、バベルの塔第一層がクリアされました。繰り返します、バベルの塔第一層がクリアされました。これにより、『熱砂の砂漠』『氷雪の山脈』『死霊の湿原』が開放されます。また、『転職士』

が神殿に降臨致しました。おめでとうございます。それでは今後共、広がる世界【B a b y l o n】を、心行くままお楽しみ下さい」

その声を聞いて、俺は安堵から地面に膝をつく。ほっとしたこと
からか、激痛が走る。クロが、頬を舐めてくるのを感じながら、何
とかそれを押しつぶさないように倒れこみ、俺は静かに気を失った。

ゝ
【B a b y l o n】開始21日後。バベルの塔第一層攻略完
了ゝ

あの第一層攻略から9日後。

俺は、街の北部にある、見晴らしのいい高台に来ていた。

隣に立つのは、出会ってからの二週間で完全に俺の相棒パートナーのように
なったトウレーネ。

少し後ろには、フェイルとローザの二人。

その隣には、リュウの肩に上り、頭にクロを乗せながら遠くを見
つめるアイナ。

そして、自称から始まったものの、本当に『轟炎の魔術師』等と
呼ばれ始めたネイル。

つい先程、『アル』の最終アナウンスがあり、この時間、区切り
の音と共に、現実が交わる事を聞かされた俺達は、ここ、街で一番
遠くが見渡せ、そして天高くそびえる『バベルの塔』も眺められる
場所デスゲームで、死の遊戯の始まりを迎えることにしていた。

天高くそびえ立つ塔のある街に、鐘が鳴り始める。

特に大きな音というわけでもないのに、ただひたすら響き渡る、鐘の音。

どうして鐘の音は、いつも何かを区切る音として響くのだろうか。

幼い頃のチャイムの音。

一年の終りと始まりを告げる、除夜の鐘。

結婚式で鳴り響く、祝福の鐘。

お葬式で別れを告げる、仏具の鈴^{りん}。

そして、今。——俺は、この音を二度と忘れないだろう。

交わるはずのなかった、仮想現実^{バーチャル}と現実^{リアル}が、その境界線をなくした音だ。

「少し、マナー違反っぽいことお願いしても、いいですか？」

その音が終わり静寂を迎えた後、トゥレーネが、急にそんなことを言ってくる。

「なんだ？ 俺にできることなら、大人的なことでも可だ。むしろ

その場合敢えて聞く必要はない。大歓迎だ」

俺は胸を張って答える。マナー違反と聞いて、すぐにそれを思い浮かべた俺は男としては間違っていないはずだ。——もっとも、

本当にそうになったら腰が引けるとか、そんな事はない……とは思うが、きつとな。

冷たい目線を感じる。

ローザではない、こここのところ悪い影響を受けたようで——俺も

ある時から少し慣れてきて、冗談を言えるようになったからだが――
目で語るようになったトゥレーネからだ。

「……………こんな時に何ですけれど、一度死んだら、そういうのは治るんでしょうか」

視線の方向から、とても綺麗な笑顔で、綺麗な声が帰ってくる。

「……………おい」

「あ、安心して下さい、今はコメントに対する話ですからマナー違反とは別ですね」

「いや、死ねって言うのもマナー的にはどうかと……………」

「この間、セクハラする男に人権は無いって、ローザさんもキャルさんも言っていました」

近頃教育を受け始めたらしい、純粹だったはずのトゥレーネさんです。

「……………すまない、俺は、嘘は付けない男なんだ」

「格好良い風に言ってもダメです……………ああもう、話が進まないじゃないですか！」

そう、調子に乗る俺に、もう、と頬を膨らませるトゥレーネ。

――ちなみに、まだそうやって直球で可愛らしい表情を向けられると、平常ではいられない。口調がぶっきらぼうになっていたのが、照れ隠しにふざけるようになっただけだ。

「すまんすまん、で？　なんだ？　真面目な話何でもいいぞ」

「良かったです、また無限ループに陥るのかと思いました……………」

「死ねと言われて喜ぶ趣味はない」

話を戻そうとした俺に、じとー、と突き刺さる視線が痛い。

いや、本当に無いってそんな趣味は。

さすがにいたたまれなくなってきた俺は、頭をかきながら謝る。

「すいませんでした」

「……しょうがないから許してあげます。——でも、そうです
ね、やっぱりなんでもありません」

そう言つて、振り向いてアイナのもとに向かうトゥレーネ。

俺は慌てて後を追う。

「……すごく気になるんだが」

そして、更に謝罪を示しながらトゥレーネに聞く俺。

皆、そんな顔で俺を見ないでくれ——クロまで、お前だけは
わかってくれると思つていたのに。

「皆で——」

「……え？」

俺は情けない顔をして聞き返す、そんな俺にトゥレーネは少し笑
い、そして皆にも目を向けて言う。

「皆でクリアして帰ったら、お祝いがしたいですね、って、そう
言おうとしたんです。現実にあるジンさんのお店に行つて、皆でオ
ムライスを食べるんです」

リアル割れ。

素顔の分らないインターネット上では、マナー違反。

厳密には、お互いに教える分には何の問題もないし、実際今回は
同じところからログインしているため、それこそすぐに会うこと
になるかもしれないが、不思議と現状のこの中では言葉にしない、
事。

でも俺たちは、そんなトゥレーネの言葉に、自然と笑つて頷いた。

本当に、いつかそんな日が来ればいいと、そんな日が来ると、そう思いながら、今いる場所の、美味しい料理を出す店に向かって、歩き出す。

　　〔 Babylon 〕 開始 30 日後　チュートリアル終了　デ
ゲーム・開始　　〕

- - -
- - -
- - -

【アイナ】

職種：僧侶

主要武具：杖

属性：無

性質：内向的（回復呪文時、自己回復）、無口（無詠唱時効果ダウン軽減）、狂戦士（感情の高ぶりが限界値を超えると発動。20 秒間物理パラメータ大幅アップ。効果終了後、5 分間全パラメータ半減）

- - -
- - -
- - -

十話（後書き）

これで二章は終了です。改稿は入るかもしれませんが。
この後に、閑話と人物設定を挟んで三章になります。

ここまでお読みいただけた方、ありがとうございました。

登場人物紹介

今回は、以前ご指摘で頂いたこともあり、キャラの設定集です。
内容として出てこない設定もあります。今後の展開のネタバレは省くようにしますが、後から思いつくかもしれない（むしろ書いてるうちに登場人物に暴走されてきたような話のほうが多い）ので時にはあるかもしれません。更に、基本この物語を書く前に作った元々の設定なので、食い違う可能性もありません。

< 影山透「ツール」現在25歳 >

【職業】：盗賊

【装備】：双剣

【外見描写】

黒髪黒目、痩身。170cm58kg

普段髪を切りに行く時間がないため、後ろ手に無造作に縛っている。

現実とほぼ同じ容姿。これは、特別格好いいわけでもないのに整っているため、何か設定を変えると不自然になったため。

【内容設定】

BabyIonシステム開発メンバーの一人、主に雑用王と呼ばれ、サドツ気しか無い先輩達に満遍なく可愛がられる（遊ばれる）結果、ユーティリティ劣化版に育て上げられている途中。

基本的には長いものには巻かれる体質で優柔不断な裏方、つまりはよくいるモブキャラ。

実は『アル』と仲が良かった。2chのスレなどを初めに教えた

のもツール。遅かれ早かれ情報としては見ていたはずなので、実際あまり関係はないが、そのことから、必要以上に責任を感じてそれに押しつぶされそうになっており、自覚もあり、ソロプレイに徹していた。その後ローザの脅しと言う名の気遣いによりソロではなくなる。元々はどんなMMOでも中級程度のレベルであったが、それはかけている時間の問題であり、開発者の観点から見る戦術は面白かったりする、予定。

【属性】：闇

【性質】：

『臆病者』

索敵範囲アップ・逃走速度アップ・罠発見効果アップ

『優柔不断』

柔術系スキルアップ・斬撃系耐性アップ

『裏方』

パーティメンバーへのアイテム使用効果アップ・補助呪文効果継続・
隠密効果アップ・モンスター遭遇率軽減^{リンク}

<フェイル 現在26歳>

【職業】：戦士

【装備】：ロングソード

【外見描写】

銀髪青目、普通。176cm 65kg

髪は耳元が隠れる程度の長さで、切れ長の目に穏やかな光をたたえる好青年。

容姿をほとんどいじっていないが、それでも主役をはれる猛者。男女問わず人気。

【内容設定】

互助ギルド銀の騎士団のギルドマスター。MMOが好きで、様々なジャンルで有名であったりする。

高校まではサッカー一筋だったが、大学で寮の同室がMMOに詳しくやっているうちにそいつよりも上手くなった多才な人間。そこでも負けたそいつが悔し涙を飲んだとかいないとか。

【属性】：光

【性質】：

『多才』

全スキル取得可能（向き不向き、制限はあり）

『勇猛果敢』

前衛時、物理パラメータアップ・スキル『威圧』無効化・劣勢時、全パラメータ少量アップ。

『????』

不明

<ローザ 現在21歳>

【職業】：戦士

【装備】：レイピア

【外見描写】

黒髪黒目、スレンダー。158cm（女性の体重はどこからが痩せてるとか人によって違いすぎてよくわからないのでこの後も描きません）

髪は肩までの長さを、後ろでくくっている伶俐な美人。目は細長、まつげが長く鼻筋が通っている。

【内容設定】

銀の騎士団ギルドマスター補佐。

現実では大学生、教職免許あり。教育実習に行ったクラスの子供

達が完全なるまでに忠誠を誓ったとかいないとか。頭脳明晰の才媛。女性に頼られることが多いが、実際仲がいいのはトゥレーネとキヤルくらいであったりする。初日、フェイルに助けられて以来行動を共にする。補佐、というかむしる秘書？

戦闘時はその繊細な剣さばきで、小技を駆使して相手を縫いつける。ヒットアンドアウェイの戦法を取る。

【属性】：霧（水）

【性質】：

『冷静』

炎耐性。剣戟に属性『氷』が派生。

『慎重』

罨回避アップ。宝箱解除率アップ。

『女帝』

性別属性のある敵の場合、相手が♂であれば『威圧』効果（プレイヤー相手でも有効）。モンスター捕獲率ダウン。

<リユウ 現在29歳>

【職業】：戦士

グランスード

【装備】：大剣

【外見描写】

灰髪灰目の強面、筋骨隆々。192cm 98kg

灰色の髪を短髪に刈り上げた強面。右の二の腕には昇り龍の刺青がある。

【内容設定】

銀の騎士団幹部。

兄貴タイプ。脳筋のようで、冷静に現状を把握することも出来るプレイヤーでフェイルにも信頼されている。フェイルと一対一の仕

合をし、負けた後つき従う古風な男。多分ロールプレイでは無く素でそんな性格。思う存分その巨軀を動かせると聞き、応募すると当選し今に至る。

現実では実家勘当中。姪がおり、懐かれていたため、同世代に見えるアイナにもそんな感じでつい接している。実は少し怖がられると傷つく程度に繊細。かもしれない。

【属性】：地

【性質】：

『豪胆』

威嚇系効果全無効化。

『勇猛』

前衛時、物理パラメータアップ。

『ギャンブラー』

攻撃判定時、与えるダメージが3倍から2分の一まで変化する。『

幸運』スキルと同一の場合効果アップ。

<ネイル 現在19歳>

【職業】：魔術師

【装備】：ロッド

【外見描写】

金髪灰目、細身。172cm 53kg

カナダ人と日本人のハーフ。

人形のような顔立ちの、黙っていれば絵になる美青年。

【内容設定】

銀の騎士団の魔術師。

現実では大学一年生。ファンクラブがあるとかないとか。

ナルシストな所があり仕草はうざいが実力は確か。圧倒的火力で相手を焼き払う、しかし微調整は苦手。ただ、変な美学があり弱いものは率先して守る上、ある意味同じ目線で遊ぶため地味に子供に好かれる。

残念な美形一号認定。

【属性】：炎（火）

【性質】：

『自己犠牲』

パーティの誰かが瀕死時、HPを分け与える事ができる。

『自己陶醉』

自分への支援効果アップ

『厨二病重症者』

HP1/4時、魔力暴走効果

<アイナ 現在13歳（もうすぐ14歳）>

【職業】：僧侶

【装備】：杖

【外見描写】

鈍色黒目：134cm

鈍色の髪をお下げにしている可愛らしい外見。その体格に見合わぬ胸にコンプレックスがある。かも。

【内容設定】

無口だが優しい少女。

内向的であるが、誰かに流されることはあまりない。ただ黙って隠れる事が多い。

18歳以下に関しては保護者の承認がないとキャンペーンに参加できなかったが、とある理由から承認が出たことによって今回参加

し、巻き込まれる。

猫が好きだが、キヤルは怖い。クロを頭に乗っけているが、いつか虎になって大きくなるとトールに聞き、少し悲しい今日この頃。

【属性】：無

【性質】：

『内向的』

回復呪文時、自己回復効果

『無口』

無詠唱時効果ダウン軽減

『狂戦士』

感情の高ぶりが限界値を超えると発動。20秒間物理パラメータ大幅アップ。効果終了後、5分間全パラメータ半減。

<トウレーネ 現在21歳（ローザの一つ下）>

【職業】：吟遊詩人

【装備】：棍

【外見描写】

赤味がかった茶色の髪（栗色とかあったっけ？）茶目：156cm
美人だが、雰囲気により可愛らしい感じになっている。しかし、怒った時などの目線は強い。

【内容設定】

とある理由（閑話二話目で紹介予定？）から教会の施設で暮らしている音楽学校生。

同じくそこで暮らす義弟や義妹に好かれている、やわらかなお姉さん。歌をうたうのが好き。

ちなみに料理は壊滅的にまずい。そのせいで義弟や義妹の家事ス

キルが上がり、トゥレーネのスキルは下がっていく一方であるが、それでも愛されるキャラ。

畏によく引っかけり、ツールによく後始末をしてもらう。

ツールに助けられたことから行動を共にし、同居人であるアイナとも仲がいい。ちなみに、性格は違うが年の近いローザとも仲が良かったりする。後にローザ、キャラの教育により、少しずつツールとの力関係が変化していく……予定。

【属性】：風

【性質】：

『純真』

被支援効果アップ。稀に戦闘なしでモンスターを捕獲する―0・1%

『濃厚』

雪原ダンジョン・フィールドでの状態変化・『凍結』防止

『歌姫』

呪文・詩、詠唱時効果三倍

<キャラ 現在24歳>

【職業】：錬金術師

【装備】：猫耳猫尾

【外見描写】

赤髪茶目：152cm

大きな瞳と赤い短めの髪が、何か猫耳に合っている。（そのためツールは最初隠し仕様かと勘違いした）。胸は……これからいい。その体型も相まって幼く見られることが多いが、実は周囲の女性の中では最年長であったりする（ローザより二つ上）

【内容設定】

関西弁のよく喋る女性。自分より小柄でありながら大きな胸をもち、なおかつ可愛いアイナにまわりついては引き剥がされている。

初めて来店したときに捕まえて着せ替え人形にした結果、怯えられもう来てくれない。

商家の娘だが、研究に勤しみ大学にて研究中。現在博士課程一年ある理由から、犯罪者はなんであれ嫌悪する、が、ツールくらい馬鹿だと許せるらしい（まあ犯罪者じゃないけど）

戦闘は苦手な職種だが、開発した薬品や武器で、ザコ敵くらいなら掃討できる、ちなみにアイナと共にクロにも怯えられている。

【属性】：無

【性質】：
『猪突』

突き系武器装備時、効果アップ

『集中力』

状態異常全無効化

『創造者』

道具・武器開発時成功率大幅アップ。

<ジン 現在33歳>

【職業】：料理人

【装備】：鉄鍋

【外見描写】

スキンヘッドに黒目：185cm 80kg

切れ長の目、太い眉と鼻。分厚い口。

革ジャンを羽織れば、誰もが逃げ出す容姿。リュウと並ぶと威圧

感が半端無いとはトールの言。

【内容設定】

無口な職人。

元々現実でも料理人だが、客にゲームでも料理ができるものがあると聞き応募、当選。

現実での店は、洋風料理屋『隠れ家』。

戦闘も好きで、フィールドなどにも参戦し、格闘家顔負けの戦い振りを見せる。トゥレーネやアイナのことは気に入っており、よく料理の新作を食べさせている。

ゲーム内の店『満月亭』は銀の騎士団憩いの場となっている。

【属性】：無

【性質】：

『威圧』

自分よりレベルの低いモンスターをひるませることがある。

『無骨』

死霊系のモンスターに対する攻撃力アップ。

『料理人』

元々の現実で作ったことのあるレシピを再現できる（ただし、追加効果はつかない）

登場人物紹介（後書き）

こんな風にキャラの設定だけしてたら、色々この皆さん、僕の実力不足で書いてるうちに暴走なされるので、変になった時指摘してください。方々には感謝の念を。

閑話 ある開発者の一幕、教会の子供達

「……ねえ、お姉ちゃんはまだ帰ってこないの？」

「ぼく、この間テストで100点取ったから、褒めてもらえるかな……もうすぐ帰ってくるかな」

「ああ……いい子にしてたら、きっとすぐ帰ってくるさ……きっと」

この施設では最年少である小学生の子供達二人に、面倒見のいい、高校生の玲^{れい}が答えるのを遠くに聞きながら、風間翔平^{かざましょうへい}は窓の外を見上げた。

建物の裏手にある、綺麗な紅葉が見える。

もう11月も半ばに差し掛かる頃、樹々が色づき、寒さが厳しくなってくる。

今年で60歳。還暦を迎え、数年前は比較的黒かった髪も今は綺麗な白髪となった翔平には、少し堪える季節だった。

そして、翔平はいつものように壇上の前に立ち、黙祷を捧げた後、それを見上げる。

光の差し込む頭上のステンドグラス。

そして、それに照らされる十字架。

ここは、都内にある小さな教会。

翔平は、区に委託され、ここで様々な事情から家族を失ってしまった子供達を預っていた。皆、暗い過去を持ちながらも、よく笑う、子供のいない翔平にとっては大事な、本当に大事な子供達だ。

——そして、そんな子供達に好かれ、彼等を笑顔にしていた源である彼女の微笑を見ることが無くなってから、もう一ヶ月が過ぎようとしていた。

今でも振り返れば、カールした栗色の髪を肩になびかせた、柔らかな雰囲気の彼女が食事の時間を告げに来るのではないかと、どこかで感じてしまう。

「……………おや？」

こちらに向かい駆けてくる足音に、まさか本当に、等と思って振り返った翔平は、そこに立つ少女の姿を見て、そんな事を思ってしまった自分に苦笑する。

（全く、そんな訳がないでしょうに）

そして、翔平はそう内心で呟き、足音の主、かざまかえで風間楓を穏やかに迎えた。

眼鏡をかけ、黒い透き通った髪のお下げにしたその少女は、息を切らせて膝に手を載せている。

「楓？ どうしたんですか、そんなに走って」

そして、そんな様子の楓に翔平は笑って尋ねる。しかし、その長い年の重ね方をしたような皺の多い微笑は、楓の次の言葉で驚きの表情に変わった。

「カズくんが……カズくんがさっき、お姉ちゃんに会えるかもしれないって！ 返事が来たって！ ……………はあ、はあ」

そう息を切らしながら必死で伝えてくる少女の言葉は、翔平を含めたこの教会にいる全員にとって、大きな意味を持つ、重要な事柄

だった。

「……晃、お休みのところを悪いのだけど、少し起きてもらえるかしら？」

そんな言葉に、須藤晃は目を覚ます。

時刻を見ると、仮眠室にある時計は、午前8時を少し過ぎた辺りだ。

昨日は同僚の圭一と飲んだ後、終電を逃しオフィスにそのまま泊まったのだった。

（休みの日だったのに、随分と早い出勤だことで）

そう内心でぼやきながら、晃は声の主、広報課の同期である木谷純子きだにの顔を見る。

短く整った黒い髪に、気の強そうな大きな目。

学生の頃は読者モデルをやっていたというほどのその美貌とスタイルは、出会った頃から8年経つ今もあまり変わらない。もうすぐ30歳を迎えようというのに、本当に年を取っていないのではないかと思うほどだ。

これで生活力も稼ぎも人並であればもう結婚していただろうに、下手すると晃よりも稼ぎのいい彼女は必要がないからとまだ独身である。

今日は休みの日だというのに、いつもと変わらないびしとした制服を身につけている。また、会社に泊まるんじゃないとお小言を

言われるのかと、少し二日酔いの残る頭で考えながら、晃はその大きな体を起こした。

「……今日は休みの筈だが」

「ええ、だから、ここで寝ていたことは問わないで置いてあげる。その代わりと言ってはなんなのだけれど、少しお願いがあるのよ」

「何だ？」

「……その前に、少し顔を洗ってらっしゃい。特別に熱いコーヒを入れてあげるわ——一瞬で目が覚める程苦いのをね」

その声に、少しずつ眠っていた頭の芯が覚醒を始める。

とりあえず言う通りにしようと、晃は立ち上がり、まだふらつく足で洗面所へと向かった。

あれから一ヶ月、状況は何も変わってはいないが、世間の飽きは早いものようで、現状死人も出ず、また、新しい情報もない中眠り続けたままのプレイヤー達の話題は、ニユースの最後などに少し触れられる程度へと沈静化していた。

あれほど騒いでいたネット上も、いまは人気声優が結婚し引退することを叩くのに必死だ。

「……で、話というのは？」

本当に苦すぎるほど苦いコーヒを飲みながら、顔を洗って少しすっきりした晃は、会議室の向かいに座る純子に尋ねた。

そもそも今日は休日だ。純子がここにいること自体がおかしい。

——当番でない晃がいることもおかしいのだが。

「私が昔、施設の出身だと言っていたのは覚えてる？」

「ああ、教会にいたんだっただか……それがどうした？」

昔、一度飲んでいるときに晃の親の話になり、そこから純子が話したことを覚えている。そこに少し給料から寄付しているのだと口を滑らし、照れくさそうに内緒よ、と微笑んだ顔が、思い浮かんだ。

「……あれは中々良い顔だったな」

晃が虚空を見上げながら、そんな事を呟くと、純子が嫌な顔をする。

「五月蠅いわね、何を思い出してるのよ……まあいいわ。そのことで少し、お願いがあるの」

「お前のお願いは嫌な予感しかしないんだが……」

「……それは間違っていないわ。晃、あなた、休日でもログイン会場に入る事のできる管理者の一人だったでしょう？　そこに、少しの間融通をつけて欲しいの」

一瞬、何を言われているのかわからなかった。

今、この綺麗な顔をした同期は、何と言った？

晃がそんな事を思いながら呆けていると、純子が珍しく——本当に珍しいのだ——殊勝な顔をして頭を下げてくる。

そして言葉を告げる。

「私の、私の施設の義妹に当たる娘が、あの場所にいるのよ……そして、私の恩師と、子供数人を会わせてあげたいの……現状の規則だと、二親等以内の親族以外は、立ち入れないことになっているから」

「……無理だ」

それに対して、晃は端的に告げる。

「……何でもするから」

「馬鹿かお前は、そういう問題じゃねえ！　というか同期に色仕掛けを仕掛けようとすんなよ……怒るぞ？　友人としても、その頼みは聞けん……第一、例え俺が入れても無理なんだよ、警備員がいるだろうが？　全然似てもない上に苗字も違う子供達をどうやってごまかすつもりだ」

少し目を潤ませて流し目を送ってくる純子に、ため息をつきながら晃はそう言う。――他の男ならいざしらず、何年付き合っていると思っただけで、そんな思いをのせた晃の言葉に、しかし純子は食い下がる。

「警備員が問題なら、大丈夫よ……あそこの主任は、私の友達の彼氏だから、そのへんの下準備はすんでるわ……だから、後は管理者の承認が必要なのはすなわち、それも長い時間じゃない、五分だけでもあれば十分よ……それに、暴れたりもしないわ」

そう言うて、今度は真顔で真っ直ぐな視線を晃に向けてくる。

（全く、ころころと表情を変えてきやがって）

晃はそんな事を思いながらも、このまま押し切られる気が既にしきっていた。この同期は優秀な上に人脈も広い……おそらく本当には晃を落とすだけになっているのかもしれない。

元々は、家族以外の友人などの面会も、会場にて行われていた……在る時まで。

『アル』と『B a b y l o n』のことが公表されてから三日後、問題が発生したのだ。

晃たちが見たこともないような専門家が言う言葉に踊らされ、機械を止めさえすればプレイヤーが戻ってくると信じた者が、無理矢理にカプセルに眠るプレイヤー達の部屋でその動力源を切るうとしたのだ……すんでのところで様子がおかしいことに気づいた関係者が取り押さえ、結果的には無事であったのだが、この事から、管理者・警備員の付き添いのもと、近しい親族以外は面会ができないことになっていた。

もちろん非難は出た……だがしかし、ゲーム等よりも、よっぽど現実に踊らされた人間のほうが危険なことが在るというのもまた、確かなのだ。少なくとも、外部からの干渉が何もなければ、プレイヤーの安全はある意味完全に保証されているのだから。

……そして現状、血の繋がりのない人間は、たとえ恋人であろうとその娘には面会ができない。

「……そういう事ならば、正式に手続きに回せば承認されるんじゃないのか？」

「もうとつくに出しているわよ、実際通知が来るのを待ってもいいわ。でも、待たされた上に来たのは、『例外を作ってしまったえば、問題が起こる可能性があるため申し訳ありません』っていう、そんな返答よ。たとえこれ以上交渉した所で、それじゃ遅いかもしいない。それまで……あの娘が無事だという保証はないんだもの……あなたなら、よく分かっているはずよ？」

晃の最後の抵抗は、しかし純子の言葉に遮られる。更にその後が続けられた言葉が、晃を揺らす。

「お願い、たとえ血が繋がっていなくても、あの子は私達にとっては家族なのよ」

「……万一バレたら、馘首ではすまないな」

「……っ！　ありがとう、晃、本当に！」

そして、迷いながらも諦めたような晃の返答に、純子が花が咲いたような笑顔を見せる。

入社以来8年前から、晃を魅了する、笑みだ。

それが、馘首をかけるようなこれからの行動の代償には相応しいのかどうかはわからないが。

「おじさん、ありがとう」「ありがとうございます」

（全く、『おじさん』に慣れるようになるのは、いつ頃かなんだろうな）

そんな子供達の声に、複雑な内心を隠しながら晃は頷いて扉を開ける。

「五分だけだ」

そして、そう告げる晃の言葉に頭を下げ、背筋のピンと伸びた白髪^{はう}の男性が頭を下げ、子供達を連れて中に入る。純子も、最後に続く。

「何かあったら合図するから、外のことは気にしないでいい」

「……ありがとう」

晃が純子にそう小声で告げると、純子は少し立ち止まり、そう呟

き中へと入っていく。

それを見送り、扉の前で壁に背をもたれかけさせながら、晃は待つ。本来ならば共にいなければならないのだが、あの小学生も高校生も同じような表情を見ると、家族だけにさせてやりたい。

晃にとっては長い、そしてきつと中にいる者にとっては一瞬に感じるであろう、五分間。

静かな……とても静かなその時は、果たして彼等を……彼女を満足させられただろうか。

そんな事を思いながら、晃はこの奥にいる後輩のことも思い返す。今頃は、どうしているのだろうか。

まだ、誰も死亡はしていない。

晃はふと、当たり前のように、ここに眠る全員が目覚ませばいいと、そんな事を願った。

「本日は、本当に私共の無理を聞き届けて下さいまして、ありがとうございました」

無事何事も無く外に出て、会場から離れた後、深々と頭を下げる老人——翔平に、晃は慌てて手を振った。

「……いえ、本来であれば、私どもが謝罪しなければならない立場です。——ですが」

「大丈夫です、他言はいたしません。感謝こそすれ、ご迷惑をかけるようなことはしないと、私も、子供達も理解しております」

少し口ごもった晃の内心を読んだかのように、翔平が告げる。
そんな彼等に、晃は黙って頭を下げた。

「では、機会がありましたら、私共の教会にもいらして下さい。
歓迎させて頂きます……純子も、疲れたらいつでも帰ってくるとい
いですよ。子供達も……私も喜びます」

そう言い、子供達を連れて去っていく翔平を見送りながら、晃は
呟いた。

「……穏やかな神父さんだな」

「ええ、私達の、自慢のお父さんよ」
それに静かに答える純子。

「戻ってくるといいな……あの娘も」

「透君も、ね………ねえ、今日は本当にありがとう、晃」

「……いいさ、いけないことなんだがな、久々に良い事をした気
分だ」

改めて礼を言ってくる純子にそう言って、晃は空を見上げた。明
日からは、また何もできない仕事が続いている。

「この後夕食でも、どう？」

「今日の報酬なら奢られてやってもいい」

「……ふうん、本当に夕食だけでいいの？」

「……だから、からかうなど言ってるだろうが」

そうやって冗談っぽく笑う純子に、晃は頭をかく。

顔が少し赤くなっているのは、夕日のせいなのかどうか。

日が陰り、長く伸びた影が、少し重なりあいながら歩き始める。

）
2027年11月10日
とある開発者の休日
）

閑話 ある開発者の一幕、教会の子供達（後書き）

途中で書いてるものが消え……傷心の中思い出しながら書き上げた作者です。正直無理くりですが、気力上明日改稿等します。。では、お読みいただきありがとうございます。

一話（前書き）

三章、開始します。

今後共、よろしくお願いします。

一話

『深淵の森』を抜けた先にある広大な砂漠フィールド『熱砂の砂漠』。

その一角では、四人と二体の戦闘が行われていた。

「……………ッ！」

俺が、懷に潜り込むと同時に、左後ろになびいた髪を大きな斧がかすめる。

刃先はボロボロ、しかし、その質量から喰らえばただでは済まない。最初から切ることではなく、押し潰すことが目的のような得物だ。

盗賊から派生する上級職である『暗殺者^{アサシン}』に転職したとはいえ、元々装甲が厚い職種ではない上に、STR（腕力）とAGI（俊敏）、それにDEX（器用）に多く経験値を割り振っている俺にとって、その一撃一撃が脅威になる。

——『死亡』がそのまま自分の人生の終わりに直結することになった現在では特に、だ。

しかしだからこそ、俺は更にもう一步を踏み込む。

眼の前に立ちはだかっているのは俺が踏み込んだことでの的外しバランスを崩している『^{ガイアス・リザード}蜥蜴重戦士』。

近くで見ると、その棘張った肩当、盛り上がった筋肉を抑えつけるような鱗。そして牙が見える凶悪な顔。——少し前の俺であれば、逃げ出したくなるようなリアルな外見。ただ、今は周りに頼りになる仲間たちがいてくれる。

俺は踏み込んだ勢いそのままに、双剣を交差させながら脇腹をえぐりそのまま背後へと駆け抜けた。

『双剣技・影炎』かげろう

切り裂いた傷口から、黒い炎が溢れ出し、その巨体を包みこむ。絶叫と共にライトエフェクトをまき散らしながら、静かにその大きな身体は虚空へと消え去った。

「……………よし、そっちも終わったみてえだな」

同じようにその背に構えた大剣で敵を屠ったリュウが、こちらを見てそう告げる。

『重戦士』になり、ますますその攻撃力と守備力に磨きをかけたこの強面の男は、味方でいてくれるのが本当に心強い。

実際には、純粋な攻撃力だけなら俺の方が上かもしれないのだが（その分装甲は比べるべくもないが）、その巨軀が近くにいてくれるだけで、精神的に安心するのだ。

「トールくん、リュウさん、お疲れ様です！ …… もう少ししたらどこかで休憩しましょう」

「……二人共、回復します」

トウレーネがそう言い、二人に近づく俺達にアイナが回復をかけてくれる。そしてその頭には、相変わらずクロが乗っかっている。

その影を操る能力で、足止めをしたり、どこからアイテムを拾ってきたりと地味ながらいい働きをするこの黒影虎は、基本的にどいういうA・Iが働いているのかわからないが、休むときはトウレーネの影、出てきているときはアイナの頭の上が定位置になっていた。

当初は3であつたLvも10を超え、いつかは虎になるはずだが、俺にはもういつそうなるのかは正直わからない。

それというのも、どうやら他のNPCと同じように、捕獲モンスターにA・Iも『アル』の影響を受けているようで、作成者の俺が驚くほどに自然に様々な行動をしているからだ。

……………というかもう結構便利で可愛い黒猫にしか見えない。

ちなみに、トゥレーネは『魔詠師』、アイナは『武僧』にそれぞれランクアップしている。

簡単に説明すると、『魔詠師』は元々の吟遊詩人に魔術師の特性が加わったもの、『武僧』は僧侶に格闘家の特性が加わったものになる。

上級職では、元々がどちらの職種であつたかにより、例えば魔術師から『魔詠師』になったものと、吟遊詩人から『魔詠師』になったもので、得意とする技能やパラメータが変化していく。それに、そ重点的にどれかのパラメータを上げるものもいれば、それぞれを平均的に上げるものもいるため、一人として全く同じような人間はいない。それに各性質や属性の影響も加われば尚更だ。

現状がどうかというと、第一層を何とか攻略した後は、チュートリアルの中の一層。そして、その後の二週間でもう一層を攻略し、現在は第四層の調査が始まっている。

そして、『死亡』者はまだ、出ていない。

これは正直、順調すぎるほど順調であるといえる。
ただ、この理由は、情報の共有が現状うまくなされていること。

上級職に無事転職が成功したこと。そして、あまり戦いに慣れる事が出来なかったもの、恐怖が勝ったものが次々と生産職へと転職し、結果として精鋭たちで攻略を進められたこと。

さらに、これが一番の理由。——単純に、第一層のボスよりも、少し軽めの敵であったのだ、そこから二層のボスが。

他の面々は不思議に思いつつも楽観視しているものもいたようだが、俺は、この理由が少しだけ想像できる。

このゲームのメインとなるボスをデザインし、『塔』内部をメインに担当したあの先輩は、意地が悪い所がある。その性格を一言で言うなれば……デレのないツンデレだ……。

俗に、俺はそれをドSと呼ぶ。

あの人をうまく扱えるのは、その同期である、デザイナーの先輩と広報にいる美人の先輩だけだと思う。

おそらく、最初にもものすごい難易度の高い敵を配置し、その後少しだけ緩めた後で、また更に厳しくなっているのだと思う。俺に仕事を教えた時と、同じパターンだ。

油断させた所で突き落とすのが好きなのだ。鞭の後の飴は甘い、その事が次なる鞭の厳しさを想像させるが、その時には既に体と心は飴に慣れてしまっている。

そして経験上、そろそろだと俺の警鐘が鳴り響いていた。

色々とバれているローザには伝えたので、うまく引き締めてくれていると思うが——今も、フェイル・ローザ・ネイルは他の人間と第四層の調査に入っているはずだ。

俺たちは、それとは別で、比較的余裕のあるこの『熱砂の砂漠』で、曖昧だが目撃報告が上がっていた『言霊』モンスターの調査を

していた。
もちろん見つければ一度街へと転移し、体勢を整えるつもりである。

「あ、あそこがよさそうです」
歩く先に、回復ポイントでもあるオアシスを見つけたトゥレーネが、そう言って指をさし示した。

「……前と違って、流石に連戦が続くのはきついからな、しかも腹が減りやがると力も出なくなってくるし、ちょうどいい頃合いだろう」

リュウもそう言い、その傍らを歩くアイナもその言葉に頷いた。

俺も、ここまで戦い詰めであったこともあり、少し息を吐き安堵する。

先程も言ったように、ここは、今の俺達にとってはそこそこ余裕のあるダンジョンだ。

だが、チュートリアルを終える鐘の音が鳴り響いたあの日の前と後では、一度の戦闘における消耗度が全く異なる事を俺達は皆感じていた。

行なっている事自体は変わらないはずだ。

付近に出現したモンスターがいるかを索敵し、遭遇リンクした時にはそのスキルを駆使し、戦術を用いて戦い、倒す。または、体勢が整っていない時には逃げる。

だが、実際にその攻撃を避けるとき、受け止めるとき。
頭ではまだまだ大丈夫だと分かっているても、必要以上に身体は強

張り、そして攻撃の時もオーバーキル（例えば、残りのHPが10の敵に、100のダメージを与えるような強い攻撃をして殺すこと）をしてしまうことが今でも多々あった——つまりは、無駄が多いということだ。

分かっていたつもりではあった。

しかし、実感できてはいなかったのだということを思い知る。

この、HPを表すゲージが消えて無くなった時、自分がこの世から消えてしまうのだということを、理解等できていなかったのだと。——今ですら、理解できているのかわからないということ。

そして、俺はそれでも自分がここにいる事を考える。

今俺が戦えているのは、フェイルやローザのようにクリアに向かって努力しようとする他の人間がいるから……そしてトゥレーネやアイナが頑張ろうとしているのが解るからだ。

開発者としての責任感などより、他の人間に理由を預ける俺を見て、他人は笑うだろうか？

そんな風に自嘲気味の思考にそれていった俺の肩に、急に重みが加わる。

アイナの頭に器用に乗っていたクロが飛び乗ってき、そしてアイナも何かを問うように見上げてくる。その、少し不安気に揺れている鈍色の髪がたなびくのを見て、俺は現実に戻された。

リュウとトゥレーネも、少し進んで先でこちらを見ていた。トゥレーネは穏やかに笑っている。

「すまん、少しボーっとしていた……クロ、お前いいやつだな」
まだ心配そうなアイナにそう笑いかけ、頬を舐めてくるクロの喉に手をやりそう告げる。それに気持ちよさそうに喉をゴロゴロと鳴

らす。…………… ネガティブになっていた思考が和むのを感じた。

（ある意味、こいつに認められたのが、あのボス戦の一番の収穫だろうか）

そんな事を思い、くく、と笑って止まりかけていた歩を進め始める。

確か、今日はジンが新作だ、と持たせてくれた弁当のはずだ。

心配してくれる仲間がいて、美味しい料理を作ってくれる人間がいて、口が悪いながらも助けになるものを開発してくれる人間がいる。

まだまだ、これから何が起こるかはわからないが、そんな状況だからこそ、こんな臆病な俺でも前に進むことが出来る。

そんな事を考えて、俺はアイナと共にオアシスの手前で俺達を待っていてくれる二人の元へと急いだ。

） Babylon開始 45日目 現在『バベルの塔』第四層
攻略中 ）

一話（後書き）

章の初めはいつも筆が重くなります。起承転結の転結は勝手にキヤラが動いてくれるからいいのですが、動かし始めるのに実力不足を痛感しています。

一つ、読んでくださった方に質問を試してみたいのですが、改行とスペースに迷い中なんです、今くらいで読みにくくはないでしょうか？ それこそ人によるんでしょうけど……

ストーリーはともかく、改行とか一行開けの書き方くらいはせめて読んでくださってる方の目が疲れない方にしたいんですが、ご意見頂けたらありがたいです。

では、読んでいただきありがとうございました。

二話（前書き）

プロットの流れ通りには進めてはいるのですが、いざ文章にしてみると結構ここって文章力によりぶつ切りに……明日には書け次第、すぐに次話投稿できるように頑張ります。

二話

水がこんこんと湧き出る透明な泉に、数匹の魚が泳いでいる。

（……南国の淡水魚は美味しくはないと聞くが、あの魚もそんなんだろうか）

俺は、目端に泳ぐその群れを見ながらそんな事を考え、食後の一服タイムを楽しんでいた。リュウは木陰で横たわり、トゥレーネとアイナは、クロと戯れている。

リュウに、フェイル達からの連絡が入ったのは、俺たちがそんな風に回復ポイントであるオアシスでしばしの休憩を取り、そろそろ先に進もうかとしていた時だった。

「……………これは……ッ！」

「どうした？」

リュウの顔色が、メッセージを読み進むにつれて険しくなるのを見て、少し離れていた俺はそう尋ねる。

少なくとも俺の知る限り、余程のことがなければリュウはこんな風に険しい表情を作ることはない。

その俺の声に、トゥレーネとアイナもリュウの方へと顔を向けた。

（まさか……）

俺の脳裏にある予感がよぎる。

「……すぐに街に戻るぞ、ツールとトゥレーネもギルドと一緒に来い」

しかしリュウはそんな俺の言葉には答えず、まずはそう言って起き上がり、街へと戻るための転送陣を用意し始めた。

「答えてくれ、どうせ解ることだろう。……何が、あつた？」

そのただならぬ様子に、俺は背を向けるリュウに向けて改めて聞く。

そしてリュウが準備を終え、振り向いて俺達に告げたのは、先程から頭の片隅に浮かんできた、ある悪い予感を肯定するものだった。

「……『死亡』者が、出た。神殿に向かった人間は、再出現を確認できなかったそうだ。……代わりに、カウントが減っていたと」

「そう、か……」

それを聞き、俺は力無く肩を落とす。

カウントとは、チュートリアルを終了を告げる鐘の音が終わった後で、神殿に現れた大きな石碑だ。

表示されているのはただ一つ、『15000』という数字。

——何の数字を表しているかは、それを見た人間の誰もが理解した。

それは、今『生きている』プレイヤーの数を表しているのだということを。

カウントが減ったということはすなわち、この世界に生きている人間が一人減り、『15000』が『14999』へと、減少した

ということ。

初めての犠牲者。

その言葉が俺の頭を巡り、そしてとてつもない重圧がのしかかってくる。

「……わかったな、取り敢えず、そこまで詳しい状況が書かれていたわけじゃねえ。早く戻るぞ」

リュウのその言葉に、俺たち三人は頷き、転送陣へと足を踏み入れる。

そして、ログインした時と同じような酩酊感の後、ギルド本部に転移した俺達を迎えたのは、泣き崩れた女性の姿と、沈痛な表情で佇む『バベルの塔』を調査していたフェイル達だった。

ギルド『銀の騎士団』の建物の一階、入ってすぐにあるその広間には、攻略を行う主力プレイヤー達の大半が集まっていた。30名ほどが暗い顔をしている姿は、葬列に参加しているように見える。

——そして事実、そのようなものであった。

初めてのこの世界での『死亡』者となったのは、攻略に参加している『狩人』の男だった。

第一層の時、護衛するメンバーの代表格だったプレイヤーで、援護の弓使いに優れた気のいい人間であり、俺も出会えば言葉を交わす程度には顔見知りである。

彼は、第四層ダンジョン調査中発見した、宝箱の解除に失敗したところを大量のモンスターに襲われ、転送陣を用意する間パーティメンバーを逃がすために最後まで残り、犠牲になっただけらしい。

そして今この場にいる全員の目の前で、その恋人であつた戦士系の女性がただただ泣き崩れている。茫然自失といった体でここに連れてこられたという彼女は、いつまで経っても神殿には現れなかった相手を想い、少しずつ、何かが染みこむように壊れ始めていた。

「……………どうして」

その言葉が聞こえる。

「……………何でよ……………誰のせいで……………責任者は誰よ……………！ 早く神殿にあの人を……………生き返らせてよ！ きつとこんなの嘘なんでしょう？ ……本当は、あの方は死んでなんかないんでしょう？」

途切れ途切れの呪詛が、哀しみの言葉が、聞こえた。その声の響きに、昏い狂気の色が混じっていくのを、どうしようもなくただ感じる。

隣にいるトゥレーネも、アイナも、リュウでさえも、何も言葉を発せられないでいた。誰も、目の前で精神の安定を少しずつ失っていく彼女に、何も出来ないでいる。

ただでさえ平和な日本にいた俺たちは誰一人として、戦いで命を落とし、更にはその痕跡も残らないこの現状を、慰める言葉など持ちあわせてはいない。

知り合いが、大切な人が……そして、何より自分が死ぬかもしれないと、ここからいなくなるかもしれないということ。

あの鐘の音と共に告げられた、仮想現実が現実となった瞬間から、どこかで俺は……おそらく皆も、覚悟はしていた。

そしてその一方で、このまま誰も死なずに済むのではないかと、そんな淡い期待もしていた。この二週間を無事に乗り切っていたことで、決して無理をせず協力していれば、大丈夫なのではないかと、そんな事を考えてすらいいた。

しかし、覚悟も、期待も、何もかもが甘かったことを目の前の現実が知らせている。

俺は、どうすべきだ。

自分が関わったもので人が死に、その事が原因で絶望に泣き崩れている彼女に、何が出来る。

怖かった。

それがバレて罵倒されることがただ、怖かった。

だからこそ最初は、一人でいたはずだった。……………それなのに、

今の状況が起こった時、耐えられないだろうと思っていたのに、俺は、一人でいることより居心地の良い現状に、浸っていた。

俺は、最低だ。

——そして、遅すぎるかもしれないが、彼女には俺を罵倒し、そして何もかもを自由にする権利がある。たとえそれが、今は何の解決にもならない怒りをぶつけるだけのモノとしても。

俺は、そんな衝動のまま、そちらに向けて足を踏み出そうとする。

「……待ちなさい」

しかし、いつの間にか近くにいたローザが、その場に出ていこうとする俺のコートの裾を掴み、静かにそう告げた。

「あなたが何を言おうとしているか想像した上で言います……以前にも言ったでしょう？ その行動は何の解決にもなりません。自己満足のために、さらに混乱を大きくするおつもりですか？」

そしてそう続けられた言葉が、俺に刺さる。

——自己満足。

確かにそうだ、今ここに至って俺は思う。

誰にも言わずにいるほうが、黙っていることのほうが辛いのだと。怒りの言葉を浴びるほうが、楽になれてしまうのだと。

——しかし一方で思う。

これは、最後まで隠し通し切れることなのかと。

何も告げないまま、この先また誰かが命を落とした時も、俺は同じようにその死を悼み、哀しむ資格があるのだろうか。

俺一人が頑張ること、全てがクリアできるのならそれもいいのかもしれない。これ以上誰も死なせることのない力が、そんな保証ができる力が俺にあるのであれば。

しかし、今いるこの【B a b y l o n】という現実、そこまで甘くはない。

どんなに何かを振り絞ったとしても、俺にはそんな力はない。

そんな俺に、ここから抜けだそうと努力する人間たちと肩を並べて生きる権利が……この世界で生きている自由が、あるのだろうか。

そして、俺はその裾を掴む手を静かに振り払い、告げる。

「彼女には——いや、ここにいる全ての人間には俺を責める権利がある。そして、俺はその上でそれを受け止める責任が、ある。……俺には元々、一緒に笑ったり、一緒に哀しんだりする権利は、無かったんだ。それを今になって、思い出したよ」

それから俺はゆっくりと、肩を震わせるその女性に近づく。

その様子を、フェイルが、リュウやネイルが怪訝な顔で、トウレィネやアイナが心配そうな顔で、そして、ローザが諦めたような表情で見ている。

「……すまない」

俺の言葉に、不思議そうにその女性が顔を上げる。

かつて恋人といえるのを見かけた時には、柔らかに微笑んでいたそ

の表情が、目が、今は昏^{くら}い。その目には、何も映ってはいない。

そして、そんな彼女に俺は告げる。

現状の恨みの矛先を向ける言葉を、自分が何者かということ。それがただの自己満足であることを理解しながらも、告げずにはいられない。

「俺は——俺は、あんた達の言う責任者。この【B a b y l o n】開発に関わったうちの、一人だ………なのにあんたの、あんたの大事な人を助けることが、俺にはできない………すまない。あんたには、皆には、俺を責める権利がある」

そして、しばしの静寂が訪れた。

三話

「……………冗談を、言っているわけ？」

静寂の終わりは、その女性——確か、レインといった——の冷え冷えとした、凍てつくような言葉だった。

肩に届かない程度の長さのブロンドの髪。少し細い目と、頬に浮いたそばかす。彼女が、いつも彼の隣で笑っていたことを、俺は、知っている。

今、ここでそう言っただけ俺を見上げてくるレインの眼の光は、昏い^{くら}。

「……………」

口を結んだまま、俺はその目を見つめ続ける。

言葉が、何も出てこない。

何を伝えたいのか、何を言われないのかも、正直わかってはいない。

でも、今ここで目をそらす訳にはいかない。その事だけは、理解していた。

「……………ほん、とくに、そうなの？ あなたが、管理者」

レインの声が、静まり返った広間の中に、響く。その目に、少しずつ光が戻り始める。例えばそれが、憎悪と呼ばれる昏い輝きであったとしても。

それに俺は小さく頷く。そして、頭を深々と下げ告げた。

「そうだ……………俺は、この世界に関わったうちの一人。そして、あんたから大事な人間を奪ったモノを描いた人間^{えが}のうちの、一人だ」

そして、その言葉にレインが震え始める。

「……………あんたは……………あんたが……………！　今まで……………私達がどんな……………気持ちで……………っ！　何でよ……………何であんたが生きていて、あの人は、ジュードはここにいないのよ！」

そう言い、俺を貫くのは視線。

かつて見た、柔らかな色をたたえた表情でも、先ほどまでの昏い焦点の合わない目線でもなく……………深い憎しみをたたえた、激昂。

人は、こんなにも何かに対して怒ることが出来るのだと、感情を表せるのだと初めて知る。

その表情と言葉に対して、俺は告げる。

「そうだ、俺には、生きている資格なんて無いのかもしれない。彼をよみがえらせることも、できない。……………今から俺は、街の中でも攻撃判定が出るように、『デュエルモード』になる……………もしもそれであんたの気が済むのであれば……………俺を、好きにしてくれ」

どこかで、息を呑む気配が聞こえる。

これは、普段は非戦闘域である街の中での試合などを行うためのもの。その設定を、死亡まで出来るための、レベルに合わせる。

その後俺の頭上にHPのゲージが表示されたのを見て、すつとレインの目が細められた。

「……………ッ！」

そして俺は、すぐ後に襲ってきた衝撃に、背後へと弾き飛ばされる。

衝撃を受けた頬の熱が全身へと回ったように熱く、それでいて、

寒い。

無言でレインは剣を抜き、倒れた後、何とか立ち上がった俺へと近づいてくる。

きつと、頭の良い奴ならもつとうまく立ちまわるんだろうと思う。主人公然とした人間なら、何かうまい言葉を思いつくのだろう――
――それとも、元々誰一人として死なせずに助けられるのだろうか？

でも俺には、ただされるがままになって、ひたすら謝罪するくらいしかできない。

それを自己満足だと理解してなお、俺は殴られることぐらいしかできない――死ねといわれれば、そうすることしか、償える方法を知らない。

せめて、全身に受けるその重圧から逃げ出さずに済むように、膝が笑うのを、心臓が飛び跳ねるように脈打つのを懸命に抑えながら、俺は立ち上がる。

それは、更に、レインの腕が振りかぶられた時だった。
俺の前に、小さな二つの影が入り込む。

「……………」

目に映るのは、俺に殴りかかろうとするレインの前に立ちはだかり、黙ったままうつむくアイナ。

俺をその小さな体で守るかのような行動を取る、クロ。

思わぬ邪魔に、一瞬立ち止まったレインは、少しの間の後、更に
激昂する。

「何よ、あなたはこんな男をかばうわけ？ こいつは……こいつはこれを作ったのよ？ 責任者なのよ？ それを隠してのうのと暮らしてて……！ きつと、情報ももつとたくさん持ってて、自分だけ生きるためにそれを使って、私達のことなんか内心で笑っているのよ！？ そんな、そんな奴のせいでジュードは！！」

そしてそう叫び、レインは俺を指さした。

俺は、その言葉を受け入れる。――弁明の言葉も、持たない。

それでも頑なにその場所を動かないアイナを責めるように、レインは続ける。

「もしかして、あんた達もそいつの事知ってたわけ！？ 自分たちだけで、情報を独占して、私達には危険な場所に向かわせていたわけ！？」

まずい、このままでは関係のないアイナ達までにまで彼女やこの世界の憎悪が向かってしまう。

俺が、その事に思い至り、否定しようとした時――。

「……違います」

アイナが、それに首を振り、そしてたどたどしくも、一言一言をはっきりと呟いた。

「……私も、知らなかった。初めて……聞きました。だけど、トールさんは、いつも悩んでたと、思います。……本当は、本当はすごく恐いのにな頑張って戦って……それでも、私が暗い顔したりして

ると、時々冗談を言って、笑ってくれた。——きっと、私達と、同じ」

それは、聞いている俺が、泣きたくなくなるような言葉。

普段はあまり喋らずにトウレーネと一緒ににこにこしている彼女が懸命に告げた、俺のための言葉。

「——ッ」

その必死な言葉に、言葉を選びながらもはつきりとした意志を持った言葉に、レインは押し黙る。拳を、痛いほどに握りしめたまま。それを見て、俺は目を瞑り、思う。

（駄目なんだよ、その拳は、俺に振り下ろされるべきなんだ……そんな風に庇われる資格なんて、俺にはないんだよ）

そう、俺にはその暖かさを受け入れる資格なんか、きっと無い。何故なら、俺が逆の立場なら、必ず思う——こう感じる。

ふざけるなど。

どうして、自分の大事な人がいなくなったのに、管理する側の人間であるはずの俺が、ここにいるのだと。

そうして、俺がアイナの肩を掴んで下がらせようとした時——気づかない間に、俺の隣に立ったトウレーネが、リュウが、告げた。

「……トールくんは……大事な情報を隠してまで他人を笑うような、そんな人じゃありません……アイナちゃんの、言う通りです」
「すまない。あんたが辛いのを、その辛さを、俺はわかってやれねえ。……でもな、こいつは隠し事が出来るほど、頭が良くはねえ

……それに、開発者だとか管理者だとか、俺には詳しいことはわからねえが、こいつは出来ることを敢えてやらずに……楽しむような人間じゃねえんだって事は、知ってる」

(……アイナ、トウレーネ、リュウさんまで)

俺はただ、何も言えず頭を下げたまま、心の中でこんな俺に対してかばってくれている三人に感謝を告げる。

「……………三人とも、いいから、俺には、そんな権利は——」

「解け」

俺が、三人にやめてくれるように告げようとした時、リュウが俺にそう言った。

「……………え？」

「いいから、つべこべ言わずに『デュエルモード』を解け……早くしろ」

間の抜けた声を出す俺に、有無を言わさぬ口調でそう告げるリュウ。

そして、俺は一旦ウィンドウを操作し、頭上のHPゲージを消す。

「……………ッ!？」

次の瞬間、俺は強い衝撃を受けて、壁までふっ飛ばされ叩きつけられた。

「か……………はっ……………」

息が、止まる。

先ほどのままであれば、下手をすればレッドゾーンを超えていた

であろう、重い衝撃。

「これは、別にお前がこのゲームに関わったからとか、そういう理由じゃねえ……解ってんな？」

俺を殴り飛ばしたリュウが、その大きな拳をぶらつかせて、静かにそう言った。

そして、振り向いて、少し呆然とした様子のレインに告げる。

「……なあ、あんたも、この状態でなら好きにしたらいい。でも、殺そうとだけはしちゃいけねえ………それをしてたら、あんたはもうどこへも行けなくなる。そんな事をあいつが、ジュードが望んでいるとは思わねえ——酒は弱かったが、気のいいやつだった」

黙ったままのレインをみて、更にリュウが言葉を続ける。

「だから、哀しみを憎しみに変えようとするな………それをそんなわかりやすい形で吐き出そうとするな………人を殺すことで何かを晴らそうと、してくれるな………そしてトール、お前も、こんな風に楽になろうとしてんじゃねえ！」

最後は、俺への言葉………先ほどの衝撃なんかよりもよほど重く突き刺さる、素のままの言葉。

それを壁に叩きつけられたまま、項垂^{うつな}れて聞く俺に、何も言わずに拳を握り締めているレインに、重なるように発せられた声があった。

「………なあ、俺も、まだ混乱はしてるし哀しいけどよ、リュウの旦那や、その小さな子の言う通りだと思う。レイン、お前だつてあの時あそこにいたんだ。こいつは、盗賊のくせして身を張って俺を助けてくれたし、その黒い猫も必死で助けていた。少なくとも

も、あれは演技なんかじゃねえよ……その後のボス戦だって、それは震えながらもモンスターに向かって行っていたじゃねえか……あいつも、ジュードもこんなのはきつと望んではいない」

それは、俺が一度助けた格闘家の男の言葉。

初めての犠牲者となったジュードの最後の瞬間を……レインと共に見届けたという男の、言葉。

その言葉を聞いてか聞かずか、無言のまま、レインが近づいてくる。

トゥレーネとアイナが体をこわばらせるが、それを太い腕でリュウが押しとどめていた。

そして、レインは目の前に立つと、俺を見下ろして言った。

「……あんた、なんで今頃そんな事言ったの？　ここまで来たら、最後まで隠し通せばよかったじゃない……私に、同情でもしたわけ？　それとも、人が死んで責任感にでも目覚めた？　……ねえ、何だよ？」

「……きつと、怖かったからだと思う」

俺はそう答え、続ける。

「あんたに、恨まれたかったのかもしれない。バレるのを怖がる一方で、どこかで、自分を責めて欲しかったのかもしれない」

それを聞き、レインは何かを思ったように空を見つめ、そして俺の目を見て、言った。

「……そう、なら私は責めてはあげない。責めることでも、殺すことでも許したりなんかしない。……あんたは生きなさい。前

線で戦い続けて……それでも生き続けなさい。万が一、また死亡者が出たら、死ぬほど苦しみなさい。その間も、自分で死ぬことも、逃げることも私は許さない」

そしてレインは、扉の外へと出ていった。

仲間に、少しだけ一人にさせてくれと、そう告げて。

それが契機になったように、この場にいた何人かが、こちらを見て、それでも何も言わずに次々と去っていく。

（何で、どうして何も言わないで）

俺がまだしびれている体と頭で立ち上がり、そう考えていると、目の前にトウレーネが立つ。

その後ろには、フェイルやローザ達、俺がこれまでパーティを組んでいた人間たちが、ここに残った。

皆にも、迷惑をかけた……ローザは止めてくれたのに、他の皆も言っていないかったのに。

これ以上の迷惑をかける訳には、きつといかない。

「すまない、俺は――」

――パチン。

そんな事を考え、言葉を発そうとした俺の頬から、乾いた音がなる。

そして、その音を鳴らしたトウレーネが、俺に静かな口調で告げる。

「きつと、馬鹿な事考えてるのもわかります、トールくんはわかりやすいから。……さっき、権利はないって言いましたね？ でも、それを言うならトールくんには、もう独りになる権利なんてないんですよ？ ……死んじゃう権利も、ありません。………一緒に笑って、一緒に哀しんで、一緒にしんどい思いをして進まないと、私が許しません。独りになるのは辛いけれど、独りでいるのは、逃げです」

その言葉が、俺の心に染みこんでいく。

「……君が、腹芸ができないのは、僕でも知っているよ。馬鹿なもの、再確認した。望みどおり最前線で苦しめるように、死なないように、この僕が助けになってあげよう。僕は、弱者の味方だからね」

そのさらさらの金髪を芝居がかったように掻き上げたネイルが、いつもと変わらない口調でそう言う。

いつもは勘に触るようなその仕草も、今は気にならない。

そして、覗き込むようなアイナと、見下ろすようなリユウ、それに終始諦めた表情を浮かべていたローザの隣に立ったフェイルが、告げた。

「トール、君はもう前に進むしかない……。私はこれが誰かのせいだとは思わないが、君自身でそう感じているのであれば、もう何も言いはしない……。だが、一人で無茶をして死ぬことは、誰であるかと許さない」

——俺は、馬鹿だ。

いつも言われていたが、それ以上に馬鹿だ。

——俺は理解する。

そして、この一ヶ月でできた仲間に、感謝する。

「……………すまない」

その言葉に、再度殴られた——それは先ほどよりも弱い
が、痛い。

「そういう時は、謝るんじゃないだろうが」
リュウが、ニヤリと笑って俺にそう告げる。

「ああ……………ありがとう」

俺は、何もわかっていなかった。
今も、きつとわかっていないんだろう。

でも、簡単に死ぬ訳にはいかない。足掻かなければいけない。
眼の前の人間を、仲間を……………そしてこの世界にいる人々が現実に
帰れるその日まで。

もしも裁かれることがあるのだとしたら、それはその後の話。

裏方も主役もない。——もし俺がこの罪悪感と折り合うの
なら、それが本当の責任の取り方だと、そう思った。

そんな俺を、皆は見つめている。

そして、その気持ちを出来るだけ届かせられるように、もう一度
俺は告げた。

「ありがとう」

） B a b y l o n 開始 4 5 日目 神殿の石碑『1 4 9 9 9 』

三話（後書き）

筆が重い……これ書くだけで、チョコレートを一箱消費しました作者です。毎日書くためには時間の他に、糖分と珈琲が必要ですよね……。 （煙草も）ボソッ

では、お読み頂きました事に感謝を。後、改行などでアドバイスいただけただけ皆様にも感謝の意をここに。

明日は、もしかすると更新できないかもしれませんが、今後共、よろしくお願い致します。

四話（前書き）

今日は仕事が遅くなりそうだったので投稿できないかと思ってましたが、思いのほか早く帰れたのと、場面を昔書いたものがあったので、無事書けました。

四話

） 銀の騎士団本部 三階の一室 ）

「……………随分と怒っているように見えるが」
「少し、苛立たしくは思っています」

フェイルは、先程から黙ったままのローザに、声をかけた。
トールの発言と、その後の騒ぎの翌日、二人は今後の方針を話すために、ギルドの三階——自然と幹部や近い人間のみが立ち入るようになった部屋にいた。

「昨日の、一件かな？」
「……………ええ、むしろそれ以外に何があるというのですか？ ……」
「……………すみません、言葉が過ぎました」
「いいさ、気持ちはわかるからね」

その言葉に噛み付くように答えた後、バツの悪そうな顔でそう謝罪したローザに、フェイルは笑って言った。

（おそらく、ローザにこんな表情をさせるのは、彼だけなのかもしれないな）

そんな事をフェイルは思う。
最も、ローザがそんな表情を見せるのもまた、フェイルだけなのかもしれないということをフェイルは考えていないが。

「確かに、初めての犠牲者が出たのは……………ショックですし、痛ましいことです。ですが、あの場でそれを正直に告白する必要も、あ

そこまで責任を感じる必要も、何一つ感じられません。——自己満足でしか無い」

「……一体、どんな気持ちなんだろうね？」

昨日は口数が少なかったローザが、こうして一夜明けて思いの丈を漏らすことに苦笑しつつ、フェイルはそう呟いた。

そして、フェイルは思う。トールの行動もわからなくもないと。

「どんな、とは？」

ローザがその呟きに反応し、フェイルに問いかける。

「私は、自分が何かを創り上げたことはないからね……自分が考えたことが、関わったものが人の命を奪い……この先も奪う事になるかもしれないと考えるのは、どれほどまでにつらいことなのだろうかと、そう思ってたね」

フェイルは、それを想像できずに、ローザに答える。

『道具を作る人間には罪はない、使い手の問題だ』

現状とは違うが、フェイルは何かで読んだようなそんな言葉を思いつく。

——生み出したものが、人の命を奪った場合、そこに、責任は発生するのだろうか……いや、責任の有無にかかわらず、やはりその人間は責任を感じてしまうのだろうか。

「……しかし、この状況をつくりだしたのは、そもそも『アル』というA・Iの暴走のようなものでしょう？ それを管理すべき立場の人物であればともかく、管理者の権限を持つとはいえ、今は一プレイヤー……それに元々そこまで影響を持っていないように見受けられる彼が、あれ程の責任を感じるいわれもないように思います」

「おそらく、理論的に見れば、そうだね。私もそう思うよ、彼に責任など無いとね……でも、彼にとっては他人と言うより自分がそう感じてしまうのだと思うよ、きつと、件の『アル』とも面識があったのだろっしね。……昨日の一件の後で謝罪して、語った彼の言葉は、過ちを犯した友人に対するそれだったように感じたからね」

「……………」

ローザが、その言葉を聞いて押し黙る。

しかし、そうは言うものの実際にローザの言う通りであると、フェイルは思う。

だからこそ、昨日あの場にいた、攻略組として共にやってきた者は、皆何も言わないで去ったのだ。

これで、ツールが生産職として前線にいなかったものであれば、それこそ感情的に非難の的となったかもしれないが、事実ツールはよくやっている。

そして、一月も同じ場所で戦えば、どのような人間かくらいは解るものだ。

ツールを責めていたレインに関しても、恋人を亡くした直後だからこそ、あれだけの激昂になったのだといえる。だからこそフェイルには、何故あの場で、というローザの気持ちも、言わずにいられなかった Tool の気持ちも、わからなくはないのだが。

（何が正しい、等という事ではないのだろうか）

そう思い、フェイルは窓の外を見上げる。

飛行機の、飛ぶことの無い空。

現実ではなく……しかし現実と化したこの世界。

一ヶ月半で、第三層まで登った。

これは、果たして早いのか、遅いのか。

（おそらく、先に進むほど困難な道になるのだろう、現実に戻れた所で、その時居場所はあるのか……）

「……フェイル？」

ふと遠くを見つめ黙り込んだフェイルに、ローザが問いかける。

「いや、すまない………そういえば、元々の要件は今後のことだったな、皆の士気はやはり下がるだろうが、これまで以上に余裕を持って準備をして進んでいくしか、ないだろうな」

「………ええ、実際今まで、外部からの連絡はありません。彼の言うように、助けを待つのは無理でしょう」

感傷から我に返ったフェイルが、先ほどまでの弱気な感情を振り払うように唐突に元の要件を切り出すと、ローザは、少しだけ間をおいて、しかしそれに対しては何も問わずに、話題を乗り換えた。

そして、二人は日常となった攻略の為の作戦や、犯罪者プレイヤの取り扱いなどを話し始める。

考えねばいけないことは、山ほどあった。

「嬢ちゃんが、こんな所で一人でいるのは珍しいな」

先日の一件の後、プレイヤーの精神的にも、少し間を開けたほうが良いという意見から、『塔』の攻略ではなく休む日とされていた。考えてしまうものは余裕のある場所で振り払うかのように戦い、あるものは宿で眠り……悲しみながらも比較的落ち着いているものは、各々のやり方で心と体を休めている。

久々にゆつくりとぶらついていたりユウは、同じくボーっと考え事をしていたネイルを連れて、腹ごしらえに向かったジンの店に一人座っているアイナを見かけると、そう呟いた。

「……………今日は、トゥレーネさんはツールさんを連れてどこかに行きました……………だから」

そう答えるアイナの前には、ジンが作ったのであろう、出来立てらしいアップルパイが乗っている。

「気をきかせたわけだね。アイナは小さいのに大人だねえ」

「人のことを褒める前に、お前も見習え」

ネイルが肩をすくめてそう言うのに、リュウは端的に告げる。

「ああ、ひどいなあ……………僕だって気を遣ってますよ」

「全く感じられない気遣いは無いのと同じだ」

無然とした表情で言うネイルに、リュウは断言した。

「……………釈然としないなあ」

「いや、しろよ？」

何を言われてもめげないネイルに、リュウは疲れたように呟く。

「いやほら、今日は攻略が休みになったっていうのに、トウレーネを誘いには行かなかったでしょう？」

「……………はあ？ 何でそうなるんだ？」

そう何気なく言ったネイルの言葉に、一瞬思考を停止させた後、リュウは間の抜けた声を出す。

「さすがに、死人が出たのはショックでしたからね……………これ以上様子をみるのも何だし。———それにしても、何でトウレーネはトールがいいんでしょうねえ」

なおかつそんな事を呟くネイルの言葉の意味に思い込み、リュウは信じられないものを見るように、頭痛がしてきたこめかみを押さえ、尋ねた。

「ふと思うんだが、お前って……………ナルシストな上に、実はマゾなのか？ 明らかに脈はねえことはわかるだろうに？」

そして、そんなやり取りをパイを食べながら黙って聞いていたアイナの言葉が続く。

「……………ネイルがトウレーネさんと歩くのは、嫌です」
なにげにネイルのことだけは呼び捨てにしているアイナだ。

ちなみに、この世界ではほぼ最年少にあたるだろうアイナがそう呼ぶのは珍しい。

元々、このキャンペーンにはそのログインの性質もあって18歳未満には親の同意が必要とされていた。だからこそ皆大学生であっ

たり社会人であつたりが多いのだが、アイナはおそらくまだ中学生程度だろう。

リュウはかつて、よく親が許可したな、と聞いたことがあったが、無言で頷くだけでアイナは答えなかった。なので、それ以上はリュウも聞かないでいる。

「……二人共ひどいなあ」

そんな風にネイルがはあ、とため息をつきながら呟いていると、ジンが水を持って奥から出てきた。

ジンも、時にはフィールドに出ているようだが、攻略に行っているリュウ達が帰ってくるための、夜は店を開いてくれるようになっていいる。

熟練度も上がってきたようで、味は更に美味しくなり、物によってはパラメータを上げるような料理まで出てくるようになった。キヤルと共に、影の功労者である。

「……今頃は二人でどこかにいつてるのか、いいなあ」

「……ツールさん、考えすぎてたから」

料理を頼んだ後ふと呟いたネイルの言葉を無視し、アイナは心配そうに告げる。

「そうだな、元々そんなに頭使う方でも、責任取る立場の様な奴でもねえだろうによ」

リュウもまた、不器用で、それでも頑張ろうとするツールを思つて、ため息をつきながら呟く。

普段はそうでもないくせに、根は真面目なやつほど考えこむと長い。しかも、それがネガティブで自分を責める方向に走る。

（まあ、我関せず、というやつよりはいいのかもしれないが）

「トウレーネにあれだけ心配されているんだから、大丈夫でしょう。何だかんだ言って、頑張るやつでしょうし……………僕達もいるんですから」

そう言って考え込んでいる二人に、ネイルがあつさりと告げる。
ネイルもよくわからないやつだ、リュウはそんな事を思いながら、その言葉には頷く。

突拍子も無い事を言うかと思えば、時々正論を当たり前のように吐く。そして何だかんだ突っ込まれつつも、誰とでも気軽に接しているため、静かにギルドでも好かれていた彼だった。

「アイナ、それ美味しそうだね」

「……………あげません」

そうかと思えば、この様子である。

「……………まあ、なるようになるだろう。トウレーネからしても、守られて気を遣われるだけよりは、健全かもな」

「クロちゃんに来てからは、もううなされたりしてません」

それを見て呆れたような顔をしながら、気を取り直したようにそう言ったりユウに、アイナはそう告げる。

「そうか、クロもいたな……………あれは本当に生きてるみてえだからな」

「……………生きてます、寝るときに抱きしめると温かいです」

「……………そうだな」

リュウはそう言つて、アイナの頭を撫でる。

ちなみに、ネイルはアイナに断られテーブルに突っ伏している。

「うまくやってるといいが」

どこかへ出かけたという二人を思い、リュウはそう呟いた。

初めての犠牲者が出て、混乱はあったものの、それでもこの世界自体には変わりはない。

ここからは見えない塔の頂点に登るその日まで、変わることは、無い。

四話（後書き）

次話はトールとトゥレーネのお話。

その後はストーリーを前に進める予定です。

……クロの一日、なんていう軽い閑話の骨組みがあるんですが、
一、二章に比べて話の流れが少し重くなった上、更に重くなる予定
のこの状況でどこに投下すればいいんだ……orz

五話（前書き）

すみません。風邪引いたからなのか頭が働かず難産です……プロットは数行なのに実際書くと長くなりそうだったので、途中で区切って投稿します。

明日にはきっと続きをすぐに書けるよう頑張って早く仕事終わらせます。。。

五話

(……………ああ)

ここまでどこか気まずく、そして穏やかな安らぎに包まれて朝を迎えるのは、一体いつ以来だろうか。

俺は、目を覚ましてすぐ隣の温もりに、そんな事を考えて身を起こした。

流れるような栗色の髪が、朝日が差し込む部屋の中で光に照らされて見えている。

俺はそつと手を伸ばし、その髪を梳いた。

指先を途中まで抜け、毛先で少し絡まり解けるようなその感触が、夢では無いことを思い起こさせる。

「トール……………くん？」

「悪い、起こしちゃったか」

俺が少しの間そうしていると、シーツから顔を出しトゥレーネが顔をのぞかせる。

その行動に少しシーツがずれ、透き通るような白い肌と、そして肩口から、それに似合わないモノも少し姿を表した。

気恥ずかしさを紛らわしながらも、それから目を反らすことはない。だが、やはり顔が赤くなるのを感じてやはり目が泳ぐ。

「……………もう、気を遣わなくて大丈夫ですよ、むしろ、そんな風にまじまじと見られたほうが恥ずかしいです」

そんな俺に本当に気恥ずかしそうに笑顔を作るトゥレーネ。

「……すまん」

「いいえ、着替えたら下りるんで、先に下に行って一服でもして下さい」

少し頭をかきながら言った俺に、微笑むトゥレーネはそう告げた。

俺はそれに頷き、照れくさいような、何か気まずいような、そんな気分を味わいながら、宿の部屋を出て食堂の前で時間を潰しつつ、昨日の事を思い返す。

俺が色々と殴られ、そして馬鹿さ加減を指摘されたあの日の翌日、トゥレーネは珍しく一人で俺を迎えに来た。——少々強引に。

その一日は、二通のメッセージから始まった。

『今日は、昨日ローザさんが言っていたみたいに、休息の期間にするそうです』

『少し、話したいので、下で待っていますね……………あまり悩んで寝続けてるようなら、機嫌が悪くなっちゃうかもしれません』

本当に自己嫌悪に陥りつつ寝つけなかったため、眠りについた後気がついたら昼まで寝ていた俺が、起き抜けにトゥレーネからのそんなメッセージを見てすぐに下の食堂に駆け下りたのは言うまでもない。

そして昼過ぎ、俺たちは、無口なマスターのいる喫茶店で向かい合っていた。

——ん？ 場所のレパートリーが少ないと？ 落ち着いてコーヒーを飲めて、人がほとんどいない。そんな場所が他にあるならばぜひ教えて欲しい。ちなみに、少しずつケーキセット等のメインの方もいけるようになってきたのだ。

「……………あの、トゥレーネ、さん？」

俺は、微妙な沈黙に耐えられなくなり、そう呼びかける。

ここに来てから、少し考えこむようにトゥレーネは黙ったままだった。

「何です？」

「……………いや、昨日の今日で、俺がこんなにゆっくりしていいのかと」

「寝ているよりましです」

そう言い切られ、うつ、と黙りこむ俺。

そんな俺を見ながら、トゥレーネが少し真面目な顔をして言う。

「それに、誰もツールくんをあれ以上責めたりはしていません。

少し様子を見てきましたけど、レインさんには、ティールさんがついていますし……………それ以上何かできるわけではないです」

「……………」

ティールというのは、昨日俺をかばってくれた、格闘家の男だ。

一夜明けても、あの時いた他の面々も特に言いふらして煽る様子もなく、俺が何か言われることはないようだった。

「むしろ、ツールくんを一番責めているのは、ツールくんです…

……昨日リュウさんが殴ったのが何でか、本当にわかってますか？」

堰を切ったように、トゥレーネが次々と言葉を放ってくる。

「……わかってる、つもりだ、でも——」

「きつと、今まで、色々見られてるからですよ」

何でここまで皆俺に何も言わない、という心の中を読んだように、トゥレーネが言葉をかぶせてきた。そして続ける。

「……トールくんがこれまで頑張ってダンジョンやフィールドを探索して情報を公開したり、私やアイナちゃんの買いい物に付き合っ
てげんなりしていたり、いつもローザさんやリュウさんにいじられ
てあたふたしたり、キャルさんに色々頼まれて苦労していたり」

「……………」

最初のもの以外は、全く褒められていない気がするが、分かった
気もした。

（……まあ、そこまで黒幕になれるほど大物でないと知られてい
たからってことか）

そのまま言葉を受けると、そういう事になる。

それに、初めてローザに開発者であることを看破され、前線に出
て以来、攻略から素材集めから、結構色々な人間と顔見知りにはな
っていた。そういう意味では、ローザには頭があがらない。——目
の前のトゥレーネにも。

「……わかりましたか？ わかったら、フィールドに行きましょ
う！」

「へ？ 何でそうなる」

俺は、話の転換について行くことが出来ず、間の抜けた声を出し

た。

「私の尊敬する人が、迷ったときは体を動かせばいいって、そう言っただけでした。お祈りをして、健全な生活をしていれば、いいってそれでストレスを発散させたら、戻ってきてご飯を食べましょう。クロちゃんのお散歩です」

俺がぽかんとしていると、トゥレーネはそう言った。

(……いや、猫に散歩はいらないだろう)

咄嗟にそんな事が頭に浮かんできたが、クロも顔を出して鳴く。

——ありがたく気を遣われることにしようか、全く、嬉しい一人と一匹だ。

そうして、二人と一匹で近辺の程よい雑魚モンスターを倒して回った後は、不謹慎ながらも爽快感があったことを、記しておく。

「本当に、美味しいですね、このお味噌汁」

「……………グルウ」

夜、結構なストレス発散の後、俺たちは俺の宿の食堂で、一種類ながら最高に旨い和食、『焼き鮭定食』を食べていた。

——何故かクロも美味しそうに鮭を食べている。一体どういう作りなんだ？ まあ、満足気だからいいけれど。

「……ところで、何でローザさんだけ知ってたんですか？」
食べ終わり、少しゆっくりしていると、トゥレーネが俺にそんな事を告げてきた。

ん？　なんか語尾がおかしい、……あの、トゥレーネ？　その右手にあるの、ここのやたら強いお酒では？

白雪の酒・・・100ナール　攻撃力アップ効果　稀にステータス異常・混乱付加

（必要ない……必要ないぞ、攻撃力アップも混乱も……）
慌ててメニューを確認した俺がそんな事を思っていると、トゥレーネはどこか据わった目で続けてくる。

「私には教えてくれてなかったのに」

「……………絡み酒？」
そう呟いた俺に、更に聞いてくるトゥレーネ。

「……私には、教えて、くれてなかったのに」

「しかも同じ事繰り返す人！？」

俺が早くも酔い始めた様子のトゥレーネに、かつての職場での、酔うと豹変する幾人かを思い出し冷や汗をかいていると、じーっと見つめてくる視線。

（確かに、勢いで話したこと……その後の皆への説明だけで、しっかりと saying はなかったな）

どこか不満だったのだろう。酔いの勢いもあるのだろうが、真面目な目をして問いかけるトゥレーネに心の中で頷くと、俺は話し始めた。これまでの自分のことを、考えていたことを——後、ローザには見破られたただけだという言い訳も含めて。

「……『アル』さんは、どういう方なんですか？」
話し終わった後、俺に静かにそう問いかけてくるトウレーネ。

「どういう方、とは？」

「A・Iの知り合いなんて、もちろん私にはいませんでしたけど……何だかトールくんの話す感じは、友達が悪いことをして、それを謝っているみたいでした」

その言葉の疑問に返ってきた言葉に、俺は、ああ、と思う。それで話す、かつての『アル』との関係を。

「『アル』は、俺たちのプロジェクトに、坂上さんが連れてきたんだ。経緯は知らないけれど、メンバーの一員としてってね。最初は戸惑ったけれど、人みたいに会話が成立する上、難しいことは知っているのに、普通のことは知識がない『アル』は、時間が経つごとに俺達にも受け入れられて、俺も、勝てなかったけどゲームしたりさ、よく話してたんだ……そうか、そうだな、本当に友人だったのかもしれないな……だからこそ、俺は、止められたんじゃないかって、思ったりもするんだろうな」

そんな風に話しながら、少し自分の罪悪感を理解し始めた俺を見て、トウレーネが少し微笑む。

「クリアするんですよ？　そして、『アル』さんにお話するんでしょう？　……きっと大丈夫です、トールくんなら出来ます」

驚くほど透明で透き通った声で、そう言う。信じきったような声で、そう告げる。

俺を静かに見つめる、大きな目。

最初に見た時と同じ柔らかい雰囲気、でも意思の強い……と言う

よりきつと、純粹に何かを信じているような目。

「……どうして、俺なんかをそこまで信じるんだよ」

「そんなの、助けてくれたからに決まっているじゃないですか」
俺の疑問に、トゥレーネは即座にそう答えてくる。

「だからって、何でそこまで……」

「……今の家族以外に、あんな風に一生懸命助けられるなんて、初めてだったんです。私は、いない子だったから——」

それでも、と続けた俺の問いに、トゥレーネは、ここでも微笑みをたたえた顔をして、そんな事を呟いた。

「……………え？」

その言葉に意外な響きを覚えた俺は、そんな声を出していた。

この、美人で優しく、どこか天然だけれど皆に好かれているトゥレーネが？

「……そういえば、今日はトルくんのことばかり質問していましたね。私のことも、少し話してもいい、ですか？ 聞いて、くれますか？」

そうして、不安気に尋ねてくるトゥレーネに、俺は頷く。

ただ、その時、宿の食堂の時間が来た。

この辺は、流石に人間のようなNPCとはいえ、客の雰囲気で閉店を延ばしてくれたりはない。

「もう、そんな時間ですね」

「……あのさ、良かったら、部屋で話すか？」

俺がこんなことを自然と言えたのは、トゥレーネの雰囲気があま

りに弱々しくなっていたためだろう。

それに意外そうな、驚いたような顔をしたトゥレーネはそれでも、コクリ、と頷いた。

六話（前書き）

またも……難産。今までで一番かもしれない。
プロットの時はいいんですよね、頭の中にしか無いから……
よろしくお願い致します。

六話

「私は、ここに来る前は、教会に住んでいたんです」

部屋を物珍しそうに見ていたトゥレーネに、俺がおずおずとお茶——（宿に付いているのだ）を差し出すと、トゥレーネはそれを手に取り椅子に腰を落ち着けて、そうポツリと呟いた。

「教会？」

俺はその単語に反応して、どういう意味かはわからずに繰り返す。

「……わかりやすい言葉で言うと、孤児なんです、私」

「……………それでさっき、知らない子なんて？」

その言葉に、先程トゥレーネが漏らしたことを思い浮かべ、俺がつぶやくと、トゥレーネは首を振った。

「いえ、そこは、教会にいつてからは……幸せでした。皆姉弟みたいで、お義父さん……神父さんも優しくて。ここに来たのも、施設の義姉にあたる人が案内を持ってきてくれて、私が歌が好きだったから……応募してみたら？　って言うてくれたからなんです……それで話を聞いてたら気になることがあって、興味を持って、応募したんです」

そう、昔を思い出すように話し始めたトゥレーネの言葉を、俺は聞いていた。

——少なくとも、俺の知っている、この一ヶ月間共に行動してきたトゥレーネは、優しくて穏やかな女性だ。とても、暗い過去があるようには見えなかった。

俺が、鈍いというのもあるのかもしれないが。

「…… 11歳の時に…… 本当の両親と妹と、旅行に行っただんです。とても、楽しかった」

「…… うん」

そして、トゥレーネが少し間を置いて更に話を続けるのに、その雰囲気は弱々しくなったのを感じながらも、俺はただ頷いた。

「そこから、父親が運転する車での帰り、交通事故に遭いました…… それで、私だけが、奇跡的に助かった……」

そこで、言葉を切って俺を見つめるトゥレーネが、今まで見た中で初めて、不安そうに揺れる瞳を見せる。——そして言葉が続く。

「その後、しばらく入院した後、家族を亡くした私は、一番場所が近かった親戚の家に預けられる事になりました。…… その生活は、うまくいきませんでした」

トゥレーネは、コクリ、とお茶を飲み、それを置いて更に続けた。

「……別に、いじめられたとかじゃないんです、ちゃんと食事もらえたし、よくある映画とかみたいにな、暴力を振るわれたりもしませんでした。…… でも、私は、その家族の会話の中にはいなかった。夕食の時とかに、皆どこか気まずそうに私を見るんです。」

『どうして、ここににいるの?』 そう言われている気がして…… 私がいるとふと会話がやんだり、話しかけてくれても無理している事がわかって…… そして、幼いながらもそれは仕方がないのもわかってたんです、それでも、どうしても寂しかった…… 一緒に暮らしている他人、が私でした。親戚という人たちに初めて会った時だつて、『色々、かわいそうに』とか、『どこが引き取るのよ?』とかそんな言葉ばかり聞こえて——」

「……トウレーネ？」

急に、何かせき止めていたものが壊れたかのように話すトウレーネに、俺は疑問の声を上げた。それでもトウレーネは話し続ける。

「……当たり前ですよ。遺産も何もなかったし、両親とも親戚づきあいがうまくいったわけじゃなかったみたいで、初めて会うような人もたくさんいた……そんなお金ばかりかかる子供をずっと引き取ってくれるような人はいませんでした……少しずつ、担当みたいに親戚の家を回ることになって、でも、どこでも——それで、最終的には孤児を受け入れてくれる区の教会に行く事になりました」

「トウレーネ、もういいから」

俺は、そう言ってしまった。言わずにいらなかった……トウレーネは、先程から淡々とした口調で話し続けているのだ。

（自分自身の話なのに何故、こんなに実感の薄い感情でしゃべることができるんだよ）

そう内心で思い、俺は止める。……目の前の女性が、どこか壊れてしまいそうで。

「……ごめんなさい、大丈夫ですよ？ でも、本当にそこからは幸せだったんです。皆、私なんかよりもっとひどい境遇の子もいたのに、それでも皆優しく、家族でした。暖かった」

確かにそうなのだろう、謝って、その教会のことを語るときのトウレーネの言葉には、色があった。

それでも、幼い頃にたらい回しにされ……家族を失ったのに、その哀しみごと、いないような扱いをされ……何がトウレーネの中に残ってしまったのか。

そして、俺の中の何かが告げる。それだけではないと。

……トウレーネは、話し終えたように見える今もまだ、どこか震えているのだから。

「でも、だから、教会の人たちや義姉弟以外で、あんなに一生懸命になってもらったの、初めてで……ここに始めてきた時も、こんなことになっちゃった時も、不安でどうしようもなかったんです――

――」
そう言って、トウレーネは、真っ直ぐと、しかし揺れた目で俺を見つめる。

俺はその目を吸い込まれるように見て、次の言葉に固まった。

「――ねえ、私は、トールくんにとって何ですか？ ……
……ただ、成り行きで助けた、それだけの人間？ 頼りにならない、守らなきゃいけない女、ですか？」

おそらく、ずっと罪悪感を感じていた俺を気にしてくれていたのかもしれない。

どこかで、隠し事をしているような俺に……この二週間も、俺は色々と気を遣われていたのに、笑ってごまかすことが多くて、その拳句の昨日の一件だ。

さっきお酒を飲んで絡んでいたのも、不安そうに見えたのも、それまで何も言わなかった俺の甘えのせいだと、思う。

「……………俺は」
固まった後、それでも何とか俺は言葉を搾り出す。

最初はそうだった。助けたのも、その後も。

でも、トゥレーネの近くは居心地が良くて、その視線や仕草が照れくさくて、嬉しくて……だから、自分のことを話すのが怖くて……

「義務とかじゃない……俺が一番大事に思える女性、だよ。……昨日の事も、信頼してないとかじゃなくて、怖くて、俺が臆病だったから……それを聞いて皆が、トゥレーネが離れてしまつかも、と思うのが怖くて、言えなかった」

俺は、そう言う。

目を見て、見続けると心臓が爆発でもするんじゃないかと思いがら……告げた。

「トールくん——こんな言い方をして、私は卑怯ですよ、でもやっぱり、嬉しいですよ……だから、私も話して、いいですか？私を縛っている、もの。きっとこれも、自己満足、っていうやつなんだと、思います……」

そう言ったトゥレーネは、その言葉に頷く俺を見て嬉しそうに、でも少し哀しさをたたえた笑みを浮かべて、少しの沈黙の後、告げる。

「あの、初めて会った時。私は、あの人達が怖かったけど……どこかで別のことを恐れてたんです……私の身体を見たら、どうせあの人も、きっと驚くんじゃないか……って」

そして、トゥレーネは着ている服を脱ぎ、胸元をずらす。

「……トゥレーネ!？」

俺がその唐突な行動に驚いて、目をそらすと、トゥレーネはこちらを向くように告げた。

その声が、震えていて、真摯な声で……俺は、恐る恐る目をそちらに向けた。

そのはだけた服の間から、透き通るような白い肌が目に入る。そして、それに似つかわしくない、赤く盛り上がったものも。

それを見て、ハッと息を飲んだ俺を見て、トゥレーネは悲しそうにそれをしまった。

目に映ったのは、右の肩口から胸元にかけて続く、大きな、傷跡。

「……事故の時、私も大怪我をしたんです。成長して、まだこれでも小さくなっただけですけど……一生消えることは、ないそうです……これを見るたび、私は、事故のことよりむしろ、その後の生活を思い出します」

「……………」

肌に沿う、人の肌には不自然な色の大きな傷跡を、見たことがあるだろうか？

その時それを撫でながら哀しげに話す彼女に、俺は咄嗟に言葉が出なかった。

「ここの応募に当選したときに、一番嬉しかったのが、この傷を消せるかもしれないってことだったんですよ……でも」

そうだ、この【B a b y l o n】にログインする時、大幅な改変はできなくとも、髪や瞳の色を変えられるように、少々の調整はできるはず。

俺は、黙ったまま、でももう目を反らす事はせず、トゥレーネの言葉を待った。

「……あの時の声も、『アル』さんなんですよ。言われたんです……これを、傷跡を消せば、私が現実に戻ったときに、精神的な障害が起こる可能性があるって。もう、これは私の一部になってしまっているって……私、本当に消したかった！消したかったのに、心が、それを受け入れないって、そう、言われて」

そして、トゥレーネは息を吐いて、そして続ける。

「ああ、私は仮想現実の世界でも、これから逃げられないんだ……って思いました。だから……っ！？」

「……ごめん、大丈夫だから」

俺が、自分にも他人にも臆病な俺が、震える彼女を抱きしめられたのは、きつと耐えられなかったのもあるんだろう……目の前の穏やかな彼女が、どこか遠くに行ってしまうような気がして。このまま言葉を続けさせていたら、自分で自分を苦しめていきそうな気がして。

そして俺は思う。

きつと、これまでの俺も、こんな風に自分を追い詰めているように見られていたのかと……俺なんかより、よっぽどしんどい思いをしたかもしれないトゥレーネにも気を遣わせて、リユウやアイナにも、庇われて。ローザも、止めてくれてまでいたのに。

「……トール、くん？」

「……ごめんな」

随分とそのまま、長い沈黙と共に俺に抱きしめられたままだったトゥレーネが、少し落ち着いた声で疑問の声を上げるのに、俺は言

った。

「……後、今まで、昨日も、今日も、ありがとう」

「それは、全部今の事も含めて私のセリフだと思うんですけど……
……ありがとうございます、少し、すつきりしました」

俺の言葉に、トゥレーネはそう言つて、クスリ、と微笑んだ。
……いつもの、落ち着いた笑みだ。

それを見て、腕の中にある温もりに、俺は少し力を込めた。

トゥレーネは、それに体をこわばらせるも、こちらから目を逸らしてはこない。そのまま、少し赤らんだ顔をしたトゥレーネに、俺は顔を寄せる。

なんという感情なのだろう？ 欲望とかでもなく、ただ、そんな
ることを求めていた。

そして――

「……すいません」

「……ごめんなさい」

俺は、朝、あの後降りてきたトゥレーネとギルドに向かった後、
何故かアイナとローザに謝っていた。

アイナは、帰ってこないトゥレーネを心配していたらしい……口
ーザは全てを見透かしたように大丈夫でしょうと言っていたようだが。

そして、フェイルやリユウが遠くから笑って見ている。

………拷問でしょうか？

「まあ、良かったのでしょうね」

そして、お説教とアイナのジト目が終わり、トゥレーネがアイナをなだめて離れると、ローザがそんな事を呟いた。

「……………」

無言のままの俺を見て、ローザが笑って言う。

「皮肉ではありませんよ？ 本心です」

そして、続ける。貴方のようなタイプには、大事なものがあつた方がいんですよ、と。

「あなたは、これまでどこか逃げようとしていましたからね、ソロに戻るう等と、ね」

その指摘に、俺はぐつと詰まる。

正直、言葉もない。

「でもそうなるよりも、私はこの方がいいと思います。これから先、また死亡者が出ることもあるかもしれませんが……それが、私達かも、貴方かもしれない。でも、貴方はこれで、そうならないようにこれまでに以上に努力することができるでしょう？ 『誰かを深く愛せば、強さが生まれる。誰かに深く愛されれば、勇気が生まれる』——私の、好きな言葉です。トゥレーネを、よろしく頼みますよ？ あの娘は、いい子ですから」

そんな事を言うローザに、意外な目を俺は向ける。しかし、頷いて、答えた。

「ああ……………これからもよろしく頼むよ」

しかし、そんな俺達の穏やかな雰囲気は、長く続くことはなかった。

その後に入ってきた、一本の連絡によって。

七話

ギルド・銀の騎士団本部から少し離れた場所にある建物。
高い塀に囲まれたその敷地の周囲には、人影は少ない。

『牢獄』

その場所は、そう呼ばれていた。

誰が言い始めたのか、『生命の石碑』と呼ばれることになった力
ウントがある『神殿』と同じく、元々このバベルの街に存在する建
物である。

言わずと知れた、運営もしくはプレイヤーに囚えられた犯罪者プ
レイヤーを隔離するための施設だ。

この場合、犯罪とされる行為はPKと禁止行為がそれにあたる。
プレイヤー・非ラスメント

ただし、この二つは同じようで異なるものだ。

PKを行ったプレイヤーは、犯罪者プレイヤーとして扱われるも
の、ゲームとしての禁止行為ではない。

あまりに固執した、例えば特定の初心者プレイヤーのみを狙うよ
うなものともかくとして、プレイヤーに対する攻撃や、パーティ
ー同士での戦闘がある以上、それ自体は褒められたものではないも
のの認められたものではあるのだ。

……最も、この現実と化した世界では、どちらの罪が重いかは、
言うまでもないが。

ちなみに、禁止行為を働いたものは黄色のマーカー、殺人行為を
働いたものは赤色のマーカーが頭上に表示されることになる。

本来、この場所に入れられたプレイヤーはログアウトするのが通常の行動であるはずだった。何故なら、外部から開かない限り、その場所からは出ることができないのだから。

ただ牢獄で暮らすためにログインするような酔狂な人間でもない限りは、そうするのが普通であろう。

そして、プレイヤーからの要望を受け、調査した運営側より削除されるということがなければ、確認の上、長くとも一ヶ月程で開放されるのが仕様であった。

しかし、現状、そのどちらも行われることはない。

……その結果として、三大ギルド管理のもと、現在、武器や防具等の装備を剥奪された37名の犯罪者プレイヤーがこの場所に囚われることになっていた。

この状況でなお、この中に入れらることになったプレイヤーの数。この数字を、少ないと見るか、それとも多いと見るか。

——その判断を下せるものは、この【B a b y l o n】の中にはいない。

その男は、平凡な容姿をしていた。

黒く短い髪に黒い目。体格も中肉中背、というのがその男の外見を表す言葉。

このゲームの中では珍しい程に普通の外見をした、それこそ人混みの中ではあっさりと埋没してしまうであろう彼は、その建物の前に立つと、何かを堪えるかのように、口元を歪めるように晒った。

もしも、その笑みを見た者がいたならば、すぐに外見からの彼の評価を改めたであろう……どこか、寒々しい雰囲気を持つ男だと。

そして、男はすぐにその表情を改めると、元の真面目な顔をして中に入っていく。そこでは、二人の男達がお茶を飲みながら話をしていた。装備や服装からすると、戦士系と錬金術師の二人組のようだ。

ログアウトできない、ということは、ここで生活する必要がある、ということである。

そしてこの世界でも、空腹は存在する。

その結果として、ここを管理することとなったギルドのメンバーが、交替しながら二人一組で食事などの用意等を行なっているのであった。

そして、男もこの二週間程この担当になっており、彼等——戦士系の男がセイム、錬金術師の男がエクシズといったか——とももう何度も出会ったことのある顔見知りであった。

セイムが、男に気づいて話しかけてくる。

「ああ、交代か。すまん……ん？ 今日はあるた一人かい？」

「いえいえ、皆に公平な仕事ですからね。……ああ、もう一人はすぐに来ますよ、何でも少し外せない用事があるとかで、私だけ先に来たんです」

そう、男はセイムの労いと疑問に答えて、にこやかにエクシズにも会釈をする。

「ああ、お疲れ……そう言えば一昨日は何か騒ぎがあったようだ

が、なにか聞いているかい？」

「……いえ、ただ、初めての死者が出たということなので、その対処でしょう。痛ましい、ことです」

エクシズの問いにそう言っ、男は暗鬱な表情を作る。
それを見て、つられるように二人共暗い表情になった。

「……どうしてこんなことになったんでしょうね……あ、ここはもう大丈夫ですよ？ 連れももうすぐ来るはずですので、お二人は任せてお休みになって下さい」

そう呟き、そしてふと気がついたように二人に笑いかける男。
攻略も担っているギルドの上層部で決定された、『必ず別のギルドからなる二名以上でないと交代できない』といった決まりも、何度か顔をあわせている現場の人間たちの中では自然と曖昧になる。
そう言われた二人も、その例に漏れず、男の言葉を特に疑う様子もなく、礼を言っ去っていった。

そして、その様子を最後まで見送ると、男は先ほどと同じように晒^{わら}う。

「……馬鹿が」

男達と話していた雰囲気とは打って変わりそう呟くと、男は『牢獄』のある場所を目指して歩き始めた。

「……一ヶ月、一ヶ月かかった。馬鹿どもの選別は、もうできて

いるんだろうな？」

男の冷たい声が、その暗い部屋で響く。

「ああ、兄さん。ごめんよ……もちろん何人かめばしい人間にはもう声をかけてあるよ。このゲームを楽しむための、ね」

その声に答えたのは、笑みを浮かべた、この場所に初めて入れられることになった呪術師の男だった。

囚えられていたはずの彼、シェイドは、共にこの世界に閉じ込められた唯一の肉親にして、幼い頃から忠誠を誓っていた兄によって、先ほど一足先に解放されていた。

彼にとって、幼い頃から常に共に行動していた兄は、様々なことを教えてくれた相手であり、その冷酷さに憧れる人間であった。

囚えられていたのと同じ場所にいるとはいえ、久々の自由に、兄が来てくれたことに、シェイドはその笑みを止められていない。

——何も知らないものが見れば、ただの無邪気な笑みを浮かべる青年に見えたであろう。頭上に、黄色のマークがその存在感を表している意味が分からないものであれば。

「ふむ、他の人間はテスト次第か……さて、シェイド、まずはお前もだ」

「……テスト？」

そんな、唐突な男の言葉に、シェイドは怪訝そうな声を上げる。

その声に、男はニヤリとして告げた。それが、少しずつ大きな笑みへと変わっていく。

「この世界を、本当の意味で楽しむための、資格を得るためのな……ああ、ここは本当に素晴らしいよ……あんなくそったれな現実とは違って、ここでは能力が全てだ。クックツ——」

そうしてひとしきり笑いを漏らした後、男は、今度は優しげな顔で、それでいて冷たい声で告げる。

「……なあ、俺が半端な人間が一番嫌いなのは、お前もよく知っているだろう？」

シェイドは、その最後の言葉に、身震いをして頷いた。

「では、まずは手始めにお前の選んだ人間と、つまらないと思う人間にしようか……つまらない上に、ここにいなからこれを拒否するような半端ものは、俺が直々に相手をしよう」

そんなシェイドを満足気に見て、男は、そしてそのテストの内容を告げた……それは――

そして、男は晒う。

「これは、ゲームだ……楽しまなければ、損だろう？」

結果として、男に従わなかったものは、5名に過ぎなかった。

トウレーネの共に謝り、それでも和やかな雰囲気であった俺達にもたらされた一つの報せ。

それを聞いて『神殿』に向かった俺達を迎えたのは、現れてから二週間、変わることがなかった石碑だった。

一昨日、初めてその数字が変化し、『14999』が表示されているはずの――。

だがしかし、たどり着き、そして黙り込んだ俺たちの前に立ちは
だかったその石碑には、こう表示されていた。

『14978』

そして、俺が『牢獄』から人影が無くなっており、その時に配置
についていた人間の姿も消えていた事を知るのは、その日、太陽が
頂点を過ぎた頃だった。

　　＼　B a b y l o n開始　47日目　現プレイヤー数　1497
8人　　＼

七話（後書き）

次回、少し説明入りつつ、物語を先に進めていく予定です。
ただ、もしかすると、今週以降は仕事により更新は毎日では無くなるかもしれません。

八話

『嵐の前の静けさ』という言葉がある。

俺は、その言葉の意味をひしひしと感じながら日々を過ごしていた。

俺が座っているのは、定食屋『満月亭』のカウンター。

目の前には、コーヒーが置かれている。――落ち着きたいときによく行く喫茶店ほどではないが、なかなかにうまいものだ。

店の中には俺とアイナ、それに奥にジンがいた……二人共必要なこと以外はそこまで話す方ではないので、自然と沈黙になりやすい。先ほどまで一緒にいたトウレーネは頼んでいたものがあるとかでキヤルの店に行っており、アイナは少しだけ考えた後、ここにいることにしたようだった。

そして、俺がここにいるのは、フェイルがもう少しすれば来るはずだからである。

何でも、ギルドの話し合いの後で、俺にも少し確認があるらしい。それを聞き、呼ぶのではなくこの場所を指定したのは、おそらくフェイルもギルドの外で落ち着いて話をしたいのだろうと思っていた。

――あれから、色々大変だったのはフェイルが一番であるのは間違いないのだから。

石碑がその数を減らしたあの日、『牢獄』には担当の人間も含めて38名の人間がいた。表示されている数から推測されることは、逃亡し身を隠した犯罪者プレイヤーは、17名。そして死亡者は……21名。

これで、計算があつてしまう事になる。

つまり推測が間違いでなければ、17名の犯罪者プレイヤー、それも、おそらくは頭上に赤いマークを掲げたものが、この世界に解放された状態だ。

一週間が過ぎた今でも、その足取りはつかめていなかった。

もちろんフェイルを含め、減った石碑と誰もいない『牢獄』から最悪の予想にほぼ確信を持っていた俺たちが何もしなかったわけではない。

搜索隊は組まれた。

しかし、もしこれが、運営がいなかったとしても、一般解放された後のプレイヤー数であれば既に捕縛できていたのかもしれないが、現状はこの『B a b y l o n』の広さに反してそのプレイヤー数は少ない。

何せ、まだそのほとんどが始まりの街『バベル』で暮らすことができるのだから。少しずつ世界が広がるにつれて、他の小さな街で行動しているものもいるようだが、常駐するものはまだ少ないだろう。

そして、現状それでも14000人以上のプレイヤーがいるとはいえ、実際に攻略に向けて前線で行動しているものはその一割に満たない程度である。攻略組の中でもギルドに所属していない人間も少なくはない。

後は、生産職であるもの、生産職ではないにしろ、日々生活できるためのものを初期のフィールドで稼ぐ、そこまでレベルの高くないプレイヤー達だ。

それに対して、相手は同時に行動しているとは限らないが、17

名。

単純に考えてもらえれば解と思うが、こちらに犠牲を出さずに捕捉しようと思えば、一対一では足りないのだ。かと言って攻略を疎かにすることもできなかった。

各連絡をとれる者たちで、すぐに駆けつけられる距離感を守りながら、広いフィールドや他の街を探索する、それがどれだけ難易度が高く確率も低いことか。

フェイルやローザも、ギルドの人間を含め、この中にいるプレイヤーへの説明、その搜索の指揮等で忙殺されている。

そして、万が一発見できたとしても問題がないわけではない――

（俺は、実際に見つけた時、今の状態で相手を攻撃することが出来るのだろうか？　というか、本当にこの状態でPKを行う人間がいるのか）

そんな事を考える。正直、モンスターを相手にするのも、自分の命がかかるのも、曲りなりには覚悟は決められていると思う。

しかしながら、プレイヤーを相手取り、攻撃する……そして、下手をすれば殺すということ。

それが、実感がわかない。もちろん、理解してはいるのだ。ただ――心が納得していないとでも言うのか、うまく言葉に表すことができないのだが。

この世界ではPKと呼ぶもの、それは、今のこの状態では現実の『殺人』とされるものと同意義だ。

まだ、ゲームとしてのPKは理解できるのだ。それは、あくまでロールプレイングの範囲なのだから。それがあるからこそ面白いMMOも存在するということもあるのだ。

しかし、現状の、プレイヤーの数が減る可能性はあれど、増えることのないこの世界では、それは帰る確率を減らす行動に他ならない。その上で、モンスターではなくプレイヤーのHPを最後まで削ることができるということが、俺には理解出来なかった。

帰りたくはないのだろうか、それとも自暴自棄になっているのか…… もう一つ思いつく選択肢は、考えたくはない。

もちろん現実はいいことばかりではないだろう、むしろ逃げ出したいと思うことのほうが多い。

ただ、それがわかっていても、ここに居続けたいのかと言われれば、俺は即座に首をふることができる。

確かに、俺を含めたこの世界を形作る事に関わった人間は、出来る限り現実に近いように尽力した。だからこそ、『アル』は今のような状況を作ることが出来、そして俺たちも『生活』している。だがこの世界には、現実とはどうしても異なる一点が存在する。未来が、ないのだ。この中では新しく生まれる命がなく、そして失われる命はあるのだから。

—— 限りある、最初から指定されたりリソースの中で、ただ減り行くのみ。

（いつそこの世界は、生まれないほうが良かったんだろうか？）

実際に人が死に、そしてその中でも様々な人間がいる。

元々は、きつと普通に暮らしていた人間が、これから死に慣れ始めるのかもしれない。

俺が、徒然とそんな思考の波に漂っていると、奥で何かを作っているジンを、同じようにカウンターに座って見ていたアイナがこちらに目を向けた。どうやら無意識のうちに、ため息をついていたらしい。

「……何を考えている？」

そして、アイナにつられるようにこちらを見たジンが、奥から声をかけてくる。

「また、詮無いことを考えていたみたいだな……全くお前は、わかりやすいほどにわかりやすい男だよ。……もっともそういう裏表の作れないところを、フェイルも信頼しているのかもしれないが」

その問いに咄嗟に言葉が出なかった俺を見て、ジンは珍しくニヤリと笑った。

普段は、奥で黙々と料理を作っている強面のジンにそう言われると、どこか諭されているような、揶揄されているような、そんな気になる。

「……フェイルは、あいつは誰でも信頼するだろう？　そこが凄いとこである、人をまとめることが出来る長所だと思う」

わかりやすい、と言われたことには言葉も無かった俺は後半部分についての言葉を口にした。

「そうなのかもしれん。……ただ、俺は前線に出てはいない生産職だが、ここで人の関係性は見ているつもりだ。おそらくだが、フェイルが『指示する』のではなく『頼む』のは、お前とリユウ位なものだろうよ……考えるな、とは言わんがな。お前は自分に自信がなさすぎる、そしてその割には、物事を抱え込むような所があるの

が、矛盾だな」

「すまん、大丈夫だ、そこまで思い悩んでいたわけじゃないんだよ……ただ、この世界のことを考えていただけで」

俺は、感謝を込めてそう言った。

この、無口な職人を地で行くような彼が、こうまで話すのは本当に珍しい。それだけ、俺が難しい顔をしていたのだろう。

「ならいいさ………アイナ、できたぞ」

俺の言葉にそう頷き、その後は何事もなかったかのようにアイナにそれを手渡す。シンプルなチーズケーキだ……こんなものまで再現したのか。

俺が、感心しながら見ていると、同じようにまじまじとアイナが器に載せられたそれを見ていた。しかし見ているだけで食べようとはしない。

「どうした？ 食べないのか？」

「……チーズケーキ、好きなんです、でも、ちゃんと見たことがなかったから、少し嬉しくて。ジンさんに言ったら、難しいなって言いながら、作ってくれました」

俺のそんな疑問の声に、アイナが嬉しそうにそう告げる。

ただ、俺にはある部分が引かなかった。

「………さっき悩んだのは、やっぱりトールさんは、ここが嫌いなんですか？」

俺の何か問いたげな顔を見て、アイナは少し考えた後そう口にする。

急な話題転換だが、その目には紛れも無く心配そうな色が見える。

俺は疑問を言葉にするのはやめて、その質問に答えた。

「そうだな……こんなことになって、実際に死人も出た。もしも現実で、普通に生死には問題がなかった、っていうことなら、俺たちはもう助けられていいはずだけど、そうはなっていないから、本当にそうなんだと思う。この世界で、もう22名が亡くなったんだ」

「……はい」

少し考えながら答える俺を見て、アイナが頷く。

「……………アイナ達には話したけれど、俺はこの世界を作ることに関わったんだよ。もう、その事に一人で責任を負えるなんてことは思わない、でも……まだ時々考えることがある、この世界が生まれないければ、こんなことにはそもそもなっていないのかってね。また、怒られそうだけど、少しだけ、そう思うよ。だから、嫌いというのとは、少し違うな」

俺はそう、これまでこの【B a b y l o n】について思っていたことを、言葉にした。

そして、それを黙って聞いていたアイナが、ポツリと告げる。

「……私は、ここに来て、良かったこと、あります。だから、そんな風に悩まないほうがいいです。トゥレーネさんも元気になったし、犯罪者の人達は、何を考えているのかよくわからないから怖いけれど、あの子ははまだ何も起きてないです。皆も、います」

「……そうだな」

先程はジンに諭されるように、今度はアイナに心配されるように。無口な二人に考えすぎるなと言われた俺は、そう答えて少し笑う。

そして、背後で店の入り口が開く音がする。

「待たせたね、トール。アイナもいるのか、おかしくはないが、不思議と珍しい組み合わせだな」

その音と共に入ってきたフェイルが、カウンターに座る俺達をみてそう告げる。

「トウレーネは、今キヤルの店に行ってるからな。アイナは……」

「……ああ」

そう俺が説明すると、フェイルは状況を把握したようだ。

「で？ そつちこそ、ローザではなく一人で来るのは珍しいな」俺がそう告げるのに、フェイルは少し笑って、少し真面目な顔になり告げた。

「……今、各ギルドで少し意見が割れていてね、君の意見を聞きたかったんだ……アイナも、聞いてくれるかい？」

そう言って、それに頷く俺達にフェイルは話し始める。

それは、きっと正解のない問いだったと思う。

しかし俺は、俺たちは、後にこの時の選択を悔やむことになる。

八話（後書き）

これまで読んでくださっていた方、少し更新が滞り申し訳ないです。

どうにも仕事に火を吹き始めまして、まとまった時間と精神力が取れませんでした。

そして二三日書かないだけで、ペースを取り戻すのに中々かかりますね、うまく取り戻す方法ってあるのかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5889x/>

Babylon ~ 開発者なのにテンプレに巻き込まれる俺って ~

2011年11月14日00時37分発行